





高知大学法人  
高知大学地域連携推進センター

年 報  
2014



## ごあいさつ



## 「敬地愛人－地域発展のために」

地域連携推進センター長

受田 浩之

平成 26 年 4 月 1 日から高知大学に「地域連携推進センター」が発足致しました。当センターの前身は平成 17 年 7 月設立の国際・地域連携センターです。ほぼ 9 年間にわたり、高知大学の地域連携、並びに国際連携を担ってまいりましたが、本学の「地（知）の拠点整備事業（通称COC）」の立ち上げに当たり、両者をそれぞれ独立・発展させ、COCを含めた地域連携に関わる機能を「地域連携推進センター」として集約致しました。

国際・地域連携センターの 9 年間の活動を 3 年毎に 3 タームに分けて振り返ってみます。まず平成 17 年度～19 年度の第 1 タームは、「地域の大学」を標榜する国立大学法人として、地域との「信頼と絆」を醸成していく、ネットワーク構築期間でした。続く平成 20 年度～22 年度の第 2 タームに入り、培った信頼関係に基づき、高知県の政策・施策（高知県産業振興計画を中心に）への提言と実施に力強く関わってまいりました。そして平成 23 年度～25 年度の第 3 タームは、大学の研究者のみならず、学生も含めた、本学のすべてのプレーヤーを地域貢献の舞台へ誘う、特別な枠組みを創出する期間であったと考えます。

第 2 タームに当たる高知県産業振興計画の推進では、食品産業の中核人材育成事業である「土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業」（土佐 FBC）を文部科学省科学技術振興調整費で推進し、高知県の将来を担う、熱いリーダー達との濃密な関係を創り上げてまいりました。また、高知県産業振興計画への関わりが深くなればなるほど、本学から地理的に離れている地域の方々から、本学に「もっと寄り添ってほしい」というご要望が頻繁に聞こえてくるようになりました。第 3 タームでは、この地域からの声にしっかりと応えようという目的で、本学 COC 事業（高知大学インサイド・コミュニティ・システム事業化－KICS）を企画し、実施することに致しました。

KICS 事業では、高知県が産業振興計画に伴い設置した 7 か所の産業振興推進地域本部に、本学の地域ブランチを併設すると共に、4 か所に高知大学地域コーディネーター（UBC-University Block Coordinator）を配置

致します。地域の課題を掘り起し、その課題を解決するための手段を、体制やプレーヤー、予算の獲得も含めて提案していきます。さらに地域ブランチには本学が自らの裁量で活用できる講義室も構えて、土佐 FBC をモデルとして、地域の産業人材の育成をはじめ、生涯学習に対する豊富なメニューの提供を行ってまいります。

本学では平成 27 年度から、教育改革の一環として、「地域協働学部(仮称)」の立ち上げを計画しております。「キャンパスは地域、テキストは人」というコンセプトで、地域課題の解決を円滑に進めるリーダーの養成を目指します。地域が保有する「ヒト」、「コト」、「モノ」などの明珠をお借りして人財を育て、同時にその成果を地域に還元することを教育システムとして確立します。この教育の拠点として、上述の地域ブランチをフルに活用すると共に、学生教育に対する UBC の効果的な関わりを徹底的に追求してまいります。

高知県は少子・高齢化や過疎の問題など、我が国が抱える焦眉の課題を 10 年から 15 年先取りしている地域と言われています。その課題に対する解決の試みは、他の地域に対する貴重なモデルを提供すると共に、「課題先進地域」の再生と持続可能性に向けたチャレンジであると捉えております。したがって、高知大学「地域連携推進センター」の役割としては、単なる政策提言の「Think・タンク」としての機能に留まらず、地域と共に活動する「Do・タンク」、さらに課題解決を実現する「Realize・タンク」、そしてその課題解決活動を維持する「Sustain・タンク」までを期待されていると認識しています。地域からの期待をしっかりと受け止め、その役割を長期的に果たし続けることで、「課題先進地域」を「課題解決先進地域」へと導いていきたいと考えています。

私たち「地域連携推進センター」のスタッフ一同は、これからも「敬地愛人－地域を敬い、人を愛する」精神を持ち続け、地域発展のために邁進してまいります。様々な課題に対して、「地域の大学」高知大学を積極的にご活用頂きますよう、併せてその窓口として、「地域連携推進センター」をお気軽にご利用下さいますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

特別対談1 /

# ハイッテル、ツナガッテル、ガンバッテル



地域連携推進センター長  
受田 浩之



進行役  
高知大学法人企画課広報戦略室長  
坂本 克彦

## 「敬地愛人」のココロザシ

### 坂本

平成16年に国立大学法人化されて以来、「国際・地域連携推進センター」のトップとして国際連携・地域連携・産学官連携を推進されてきた受田センター長です。10年を経てこの度、「国際連携推進センター」と「地域連携推進センター」に分離改組されることになりましたが、その理由をお聞かせください。

### 受田

私たちはこの10年間、地域貢献活動を活発にしていくとともに、そこで培ったノウハウ、人的ネットワークをさらに国際的に展開させていこうという2つの大きな役割を持って業務にあたってきたわけです。その活動が予想以上に大きな発展をしてきました。支える人的な組織や、さまざまな仕組みも増えてきたということもあって、一定の期間を経たことを一つのきっかけに組織をそれぞれに独立させ、より充実をさせていこうということになりました。

### 坂本

さらに「国際・地域連携推進機構」という新しい仕組みも生まれています。

### 受田

「地域」と「国際」というと、ともすれば異なった場であるように感じますが、私たち大学側からみれば活動を支えて下さっている人たちや地域にフィードバックする、あるいは実績を応用していく場という意味では同じカテゴリーだろうと思います。たまたま、それが国境を越えることがあったりするわけで、常にシームレスに連動させていきたいというのが私たちの思いです。

### 坂本

新たに再出発する「地域連携推進センター」のミッションについて、一言で説明いただくとしたらどういふものに。

### 受田

「大学の経営資源を地域のために最大化する」ということです。高知大学が持っている経営資源、人的資源、さまざまな情報や知識、ネットワーク、そういったものを活用し切って価値を最大化するというのは、まさに高知県の地と知のエンジンになるということだと思います。

### 坂本

法人化以降、高知大学は「地域の大学」を標榜していますが、高知県のために貢献する大学として何ができるのか。センターは、その高知大学の存在意義を示す場所でもあります。

### 受田

たとえば高知県は高齢化、少子化、人口の自然減がいち早く顕在化した地域であり、「日本を15年先取りした課題先進県」でもあります。今、高知がトップランナーとして直面しているこの課題は、やがて日本全体が直面する課題であり、将来、東南アジアなどでも同じ状況が起こってきます。私たちが高知県で培って来たモデルが将来の世界においても活用できる。それに立ち向かっていく解決策を提案しながら「課題先進県」から「課題解決先進県」へ導いていくお手伝いとエンジンになりたいという思いなのです。



**坂本**

設立からのこの10年はどんな10年だったのでしょうか。

**受田**

正直なところ、当初は今のようなカタチに発展するとはまったく想像もしていませんでした。地域に対する思いがまだ薄く、地域に対する貢献度は明らかに低かったですね。とにかく地域に耳を傾け、動きながら学び、考え、その途中途中で必要に応じて新しいシステムや思い切ったプログラムを企画立案しながら、チャレンジをし続けているうちに徐々にセンターの規模が拡大し、私たちの身の丈も高まってきたという感じです。

**坂本**

その活動を支えて来たのが、受田先生が以前からよくおっしゃっている「for 高知」、「敬地愛人」という合い言葉。地域連携推進のポリシーに通じています。

**受田**

for 高知、高知のために。これは10年前に当時の医学部長の円山先生が医学部長室のボードに書いてあったことばです。医学部ってここまで高知のことを考えているのかと驚きました。「敬地愛人」は西郷隆盛の“敬天愛人”に習ったもので、私がアレンジしました。敬天の天を地域の地に変えたら、地域を敬う精神を持ってそこに住んでおられる方を愛する気持ちになれるのではないかと。その考え方、ポリシーのもとに心をつなげて活動して行けば地域連携センターのスタッフの活動というのは自ずと見えて来る。以来、共通のミッションステートメントとしてきたわけです。

**高知大学、ハイッテル**

**坂本**

こうした活動の中から、地域課題の解決方法として画期的なシステムが生まれて来ています。地域課題の解決に対して、KICS(高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業)が始まっていますし、現在、UBC(高知大学地域コーディネーター)の方たちが県内のいろんな地域に出向いて活動されています。

**受田**

平成25年度から文科省の事業で、地(知)の拠点整備事業、通称COC事業が始まりました。今までやってきた実績を踏まえて、COC事業でなければやれないモデルを作り出そう。そこから生まれたのがKICSです。この10年

でいろいろ変わってきたとはいえ、県民の皆さんにとって大学はまだまだ敷居が高い場所。だから、こちらから地域に出かけ、地域に入って行かないといけない。私たちに欠けているのは「入っている」ってことだと気づきました。それを新たな課題解決体制として実質化できないかと考えたのが「高知大学インサイド・コミュニティ・システム」です。

**坂本**

地域における課題解決事業の中には、地域だけではなく、高知大学の『人』もちゃんと入っていると。

**受田**

さらに言えば、知識や情報やネットワークも、研究経費や技術も入っています(笑)。その地域に入っている「人」を「UBC(ユニバーシティ・ブロック・コーディネーター)」と呼ぶことにしました。高知大学地域コーディネーターです。高知県の産業振興計画においては産業振興地域本部として高知県内を便宜上7ブロックに分けていますが、そこにカウンターパートとしてUBCを1名ずつ派遣し、さらに県と一体化してサテライトオフィスをつくり、そこに学習の場をつくるということで「入っている」を実現しようと考えています。7人のサムライが県内に常駐しているというイメージです。現在は予算の関係で4人でスタートしていますが、「これでこそ大学が課題解決先進県のエンジンになっている」と言ってもらえるように、まずはしっかりと事例を積み上げていってほしい。すでにプロジェクト案件、共同研究に導いていくようなモノを含めて、これまで掘り起こせていなかったもの、なかなかつながりが持ち得なかったものがどんどんつながり始めています。「大学人であるからこそできること」がたくさんあるはずですよ。

**坂本**

各地域のサテライト機能が地域の方の学びの場になるということですね。

**受田**

地域産業人材の育成ということで7年前から「土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業」、略して土佐FBCというのがありますが、サテライトではその学外教室を定期的に開設をして、地域の産業人材の方に集っていただく。地域住民の方の生涯学習の学びの場を定期的に開催していこうと思っています。

**坂本**

土佐FBCは、地域の中核人材育成プログラムとして非常に評価が高く、「イノベーションアワード2014」で文部科

学大臣賞の受賞もされていますね。

**受 田**

これは平成 20 年度に始まった5カ年事業でした。25 年度からは寄付講座になっていますが、3500 万の予算が大学、県、企業、市町村振興協会、受講者からお金が集まって自然に運営できている。そういうふう自立できる仕組みにまで発展しながら、その仕組みが次のことを生み出して行く。それが一つのお手本にもなっていて、全国からだけではなくモンゴルからも視察に來られます。人材育成は国境を越えますね。同じ課題を抱えている所同士で交流ができます。

**高知大学約7500人、県人口の1%**

**坂 本**

ところで、さきほど高知大学は課題先進県にいる強みがあるとおっしゃっていただきましたが、それは同じ県内にいる他の大学も同じです。どのように連携しながらそれぞれの役割を担っていくことになるのでしょうか。



**受 田**

私たちに強みもあれば、弱みもあります。たとえば高知大学には工学部がない、経営系にしても弱い。弱い所は他大学と補完し合いながら連携していかないとはいけません。私は大学一組織が地域連携を担うというカタチは理想の姿ではないと思っています。高知のために高等教育機関が連携しなければ、それこそ高等教育機関の価値も最大化できない。これは高知県のためであり、地域住民のため、自治体の皆さんのためだから、その効果を最大化できるのであればどんなアライアンスでもいいと思うんです。

**坂 本**

つまり、大学同士も協働していくと。

**受 田**

高知県立大学のある永国寺キャンパスに「(仮)産学官民連携センター」ができますので、そういうところでアライアンスが組みやすいように整備をしていこうというのが今の流れです。やっとそこまできました。

**坂 本**

では、高知大学が持っている一番の強みは何でしょう。

**受 田**

うちの大学は学生数も5000人強で、決して大きい大学ではありません。教職員合わせて1500～1600人。大学院生が700人ぐらい。全部合わせると約7300人で、これは県人口の1%にあたります。規模は大きくないけれど、県における相対的存在感というのは47都道府県の中でも結構大きい。私たちはこれだけの規模を抱えているということは自覚しないとはいけません。1人が100人に対して一定の存在感とさまざまな情報を提供することができれば、あつという間に県は変わります。そういう意味でみた時に高知大学の分野として強みとしては医学部、農学部、教育学部をはじめそれぞれが非常に地域と密接なつながりを持っているのも徹底的な強みですね。経済効果もだいたい1%。雇用創出も含めてだいたい1%です。県庁、高

知市に次ぐ第3の企業だっという位置づけです。

**課題があるところに未来がある**

**坂 本**

地域連携推進センターを支える3つの部門があります。「域学連携推進部門」では地域課題を解決する人材育成を担って行く。土佐 FBC もその担当になるわけですね。新しい人材育成事業も今後、地域からリクエストがあれば考えていくとか。

**受 田**

私の頭の中で次にやろうと決めているのが、観光をマネジメントできる人材の育成。実際に大学に対して学部、学科を作ってほしいという要請も具体的に來ています。高知はおもてなしは得意だけれど、マネジメントは弱いですよ。地域の人材育成は大学がやるべきことだし、大学でなければやれないことがたくさんあります。

**坂本**

「産学官民連携推進部門」では、海洋深層水の事業が始まるとお聞きました。

**受田**

私自身、県の産業振興計画の策定委員長をやり、フォーアアップ委員会の委員長をずっと務めているという関係もあって、県の産業振興にどこまでコミットできて貢献できるかが勝負だと思っています。室戸の海洋深層水に関しては、今これだけ取水地が増えているなかで室戸が持っている付加価値をどうあげていくか。健康増進価値については、これまで医学部を中心とする研究の裏付けがかなりあって、今、具体的に医学部と病院を中心に臨床医の先生方と室戸市の市民が被験者になって中長期的にモニタリングしているところです。将来、室戸では各家庭に水道水とミネラル硬度を制御した上水道があるということになれば、新たな移住のインセンティブにもなるかもしれませんよ。

**坂本**

そして「知的財産部門」。昨年、弁理士さんが配置されて大きな効果があると聞いています。

**受田**

私が身の丈と表現している特許出願は30件ぐらい。研究者は特許をつくるために研究しているわけではありませんが、やっている中身が社会に対して産業上、利用できるものであれば、その価値を最大化する上で権利化していくべきです。全国の国公立大学合わせて1年間の技術移転に伴うロイヤリティ収入を含めた知財に関連した収入がどれくらいあったかというデータでランキングが発表されます。これはあまり知られていませんが、実はある年1度だけ、東大とか京大とか、そうそうたるたくさんの研究者を抱えている大学と肩を並べてベスト10に入ったことがあるんです。地方の規模のあまり大きくない大学でも、知財に関しては非常に貢献できるということです。

**坂本**

一方、知財は研究者の守備範囲、領域を規定するためのモノでもありますし、防衛的な意味合いもありますね。

**受田**

知財に対する環境が整備されているか、いないかでパートナーになりうるかどうか決まります。高知県の産業界、中小零細企業の皆さんにもそういうふうに高いレベルで、いろんなところとパートナーシップが結べるように知財に関する環境整備や啓発、教育をしていくのも、私たちの役

割だろうと思っています。そういう意味でも知財の専門家、弁理士に入っていただいてまず、知財の環境整備がよりしっかりしてきました。それともう一点は今、県内の大学だけではなく、四国の大学で連携してもっと効果的に各大学が創出した知財について技術移転を図って行った方がいいのではないかとということで、一昨年『四国共同機構』という組織も作られています。

**坂本**

最後に地域連携推進センターの今後の展開についてお聞きしたいと思います。

**受田**

昨年11月、「産業競争力協議会」の地方版「四国地方産業競争力協議会」が発足しました。4県知事の輪番で各県から産業界、各界の人たちが集まるもので、私も委員で出ています。四国共同機構を含め、これから四国内の5国立大学の役割は相当大きく、今後、連携することで県境を越えながら四国全体に対してやれることもたくさんでてくると思います。その中で私たちには「課題先進県にいる」という立地を生かし切ることが、まず一つ課せられた存在意義だと思います。他県に比べてより課題は先進的です。その課題先進の地域における強みを生かし切るためには、課題解決先進県になれるように解決へのシナリオをしっかりと描き、実際にアクションをおこしていくこと。そういった意味でも私たち地域連携推進センターがフロンティアになっていく必要があると思っています。

**坂本**

お話を聞きながら高知の中で、四国の中で、高知大学やセンターの存在感が思った以上に大きくなってきていることがわかりました。夢が膨らむと同時に責任も感じます。

**受田**

実は高知は製造品出荷額当たりのニッチトップ企業が東京に次いで2番目に多いんです。よく高知は食品加工が弱いと言いますが、かつお節製造の歴史を振り返ってみると、高知県は日本の食品加工のトップですよ。食品の専門家でもある私から見ると、やるべきことは自然に見えてくる。維新のはなしを含めて、課題が見えて来たときに変革は辺境の地から起きていくわけです。その土佐が変革をおこ



していくエンジンになっていく時代にいま突入しているの  
かもしれませんし、課題が新しいイノベーションを起こして  
いくんです。「既知と既知を組み合わせることによって未  
知を創り出せるか」です。

#### 坂本

視点をちょっと変えるだけで『課題解決先進県』のエンジ  
ンとしてやるべきことは違って見えてくる。課題があるところ  
に将来があると。

#### 受田

そうやって自ずと輝いていければ、人は寄ってきますよね。  
課題があるということは職を生み出せるということ。私たち  
はこの10年の間で1つずつ実現をしてきていますからね。  
次の10年で劇的に変わっていると思います。



# 目次

index

- 003 ごあいさつ
- 004 特別対談 1 / ハイッテル、ツナガッテル、ガンバッテル

## 域学連携推進部門

- 014 topics1 高知大学インサイド・コミュニティ・システム (KICS) 化事業
- 019 topics2 高知大学と自治体等との連携事業
- 034 特別対談 2 / ぼくらのまちに大学が来た

## 産学官民連携推進部門

- 042 活動報告
- 045 topics1 高知大学と企業、研究機関等との連携事業
- 049 topics2 イノベーション・ジャパン、アグリビジネス創出フェア等の展示会へ出展
- 051 topics3 シンポジウム、フォーラム等
- 056 産学官民連携件数等
- 057 平成 25 年度 民間企業等との共同研究一覧
- 062 平成 25 年度 民間企業等との受託研究一覧
- 065 特別対談 3 / 大学と産業界が一緒になって 10 年後の高知をつくっていかう

## 知的財産部門

- 070 平成 25 年度活動概要
- 071 topics1 知的財産部門の紹介
- 073 topics2 各種セミナー等取組み
- 074 知的財産権の活用状況について
- 076 知的財産部門実績
- 077 特別対談 4 / ほしいものがほしい看護師発の特許のころ

## 四国産学官連携イノベーション共同推進機構(四国共同機構)高知大学サテライトオフィス

- 082 平成 25 年度活動概要
- 083 四国産学官連携イノベーション共同推進機構

## 参考資料

---

- 090 Information
- 091 地域連携推進センター 組織図（平成26年度）
- 095 地域連携推進センター 組織体制（平成26年度）
- 093 高知大学地域連携推進センター規則（平成26年度）
- 096 高知大学国際・地域連携センター職員等（平成25年度）
- 097 高知大学地域連携推進センター運営戦略室規則（平成26年度）
- 099 国際・地域連携センター運営戦略室会議名簿（平成25年度）
- 100 地域連携推進センター運営戦略室会議名簿（平成26年度）
- 101 高知大学地域連携推進センター自治体連携室利用内規（平成26年度）
- 102 科学・技術相談申込書
- 103 交通アクセス



# 域学連携推進部門

---

Regional Alliances Section

topics1 高知大学インサイド・コミュニティ・システム(KICS)化事業

topics2 高知大学と自治体等との連携事業

topics 1 高知大学インサイド・コミュニティ・システム (KICS) 化事業

高知県の大学等のキャンパスは県中央部に集中しており、遠隔地域の詳細なニーズ収集や、地域との密な情報交換に基づく連携活動を行うことが困難な状況にある。

この状況を克服するため、高知県が県内7か所に設置する産業振興推進地域本部に高知大学サテライトオフィスを併設し、本学教員を常駐させ、産業振興推進地域本部に常駐する高知県地域産業振興監と共に活動することで、県と本学が一体となって隈なく地域と向き合い、地域と共に歩む役割を果たせる体制を構築する。この体制を、高知大学が地域に入り込むというニュアンスを込めて、「高知大学インサイド・コミュニティ・システム」(KICS:Kochi University Inside Community System) と呼称した。



高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業

KICS:Kochi University Inside Community System

平成25年度「地(知)の拠点整備事業」採択



地域課題が多様化  
解決のための新しい切り口が必要



キャンパスが県中央部に集中  
地域からの「声」が遠い



高知大学

地域産業振興監・地域支援企画員とUBCとの連携による新たな課題解決体制の構築



高知県地域課題の解決に向けた高知大学との連携

高齢化	全国より約10年先行する高齢化への対策	人生の「セカンドステージ」を充実する学びの場の構築
中山間地域	暮らしの維持、地域の文化の継承、コミュニティの再生	学生による実施研修、自発的な地域課題解決に向けた取り組み
産業の脆弱化	高知県産業振興計画の実行	産学官連携による計画の促進
災害多発地域	防災分野の「ものづくり」活性化、ソフト対策の整備	企業の技術開発や官のソフト対策に対するシーズ提供

高知大学の改革の方向性・機能強化

教育	地域課題解決に資する人材の育成	全学的なCOC教育の推進、地域をフィールドとした教育、地域協働学部の新設
研究	県内企業の研究開発への一層の貢献	地域志向教育研究経費を活用した企業の課題解決に資する研究の実施
社会貢献	地域再生に資する社会人教育、生涯学習の充実	地域の実情に合わせた教育プログラムの提供

県内7か所のサテライトオフィスの立ち上げ

以下のとおりサテライトオフィスを立ち上げ、KICS 化事業の中核となる活動拠点を整備した。

地域名称	場所	住所
高知市地域	高知大学地域連携推進センター	高知市朝倉本町2丁目 17-47
安芸地域	高知県安芸総合庁舎	安芸市矢ノ丸 1-4-36
嶺北地域	高知県中央東土木事務所本山事務所	長岡郡本山町本山 946-6
幡多地域	高知県県庁宿舎(四万十地区)入田隣	四万十市入田 3313-1
物部川地域	高知県香美農林合同庁舎	香美市土佐山田町加茂 777
仁淀川地域	高知県土佐合同庁舎	土佐市高岡町乙 3229
高幡地域	高知県須崎総合庁舎	須崎市西古市町 1-24

平成26年4月1日時点

高知大学地域コーディネーター(UBC : University Block Coordinator)の雇用

サテライトオフィスに常駐し、各地域から高知大学への橋渡し役となるUBCについて、平成25年度に2名、平成26年度に更に2名を、新規に雇用することとした。

平成25年度雇用UBC



あかいけ しんじ  
**赤池 慎吾**  
080-2982-8762  
akaike@kochi-u.ac.jp

安芸地域  
担当

【サテライトオフィス】  
安芸地域/  
安芸市矢ノ丸1丁目4-36 安芸総合庁舎2階

経歴

- 1982年静岡県静岡市出身
- 東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程単位取得退学 博士(農学)
- 財団法人林業経済研究所 研究員
- 鳥根県中山間地域研究センター 研究員

専門領域(活動テーマ)

- 過疎高齢化集落における山林継承と森林管理
- 地域情報データベース(地域カルテ)の構築と普及

今後の抱負

地域の皆さんと一緒に考えながら、「地域の安心・安全な暮らし」や「地産外商」の実現に向けた取り組みに高知大学が貢献できるよう、地域と高知大学(学生、教員、組織)をしっかり結びつけます。そして、地域住民・自治体・企業・市民団体・大学等と連携して、新たな地域づくりに貢献できるよう努力していきます。  
地域の皆さんに高知大学が少しでも身近に感じていただけるように、さまざまな地域の集まりに顔を出させていきたいと考えています。私を見つけたら、ぜひ、お声をかけください。よろしく願いします。



おおさき さとる  
**大崎 優**  
080-8637-9795  
s-osaki@kochi-u.ac.jp

高知市地域  
担当

【サテライトオフィス】  
高知市地域/  
高知市朝倉本町2丁目17-47 地域連携推進センター1階

経歴

- 1982年生/高知県高知市出身
- 高知大学大学院総合人間自然科学研究科人文社会科学専攻修士課程修了
- 修士(経済学)(高知大学)
- 財団法人高知県観光コンベンション協会(現:公益財団法人高知県観光コンベンション協会)、全国農業会議所を経て、現職(高知大学地域連携推進センター特任助教、地域コーディネーター)

専門領域(活動テーマ)

- 産業連関表を活用した地域経済構造分析およびそれに基づく政策提言
- 県内集落での農作業等を通じた地域住民との協働

今後の抱負

これまでの研究活動や地域活動がUBCの活動にも直結していきますので、培った知識やネットワークを活用しつつ、新たな繋がりを積極的に構築し、高知県の地域課題の解決に向けて取り組んでいきます。

平成26年度雇用UBC



おかむら けんじ  
**岡村 健志**  
090-6880-7862  
okamurakenji@kochi-u.ac.jp

幡多地域  
担当

【サテライトオフィス】  
幡多地域/  
四万十市入田3313-1 県宿舎(入田)隣2階

経歴

- 1974年生/高知県高知市出身
- 1996年 高知大学農学部卒業
- 1998年 千葉大学大学院自然科学研究科環境計画学専攻修了
- 2010年 高知工科大学工学研究科博士後期課程基盤工学専攻修了
- 1998年より、シンクタンク・コンサルタント・高知工科大学助教などを経て、2014年より高知大学。
- これまで、地域計画・ITS(高度道路交通システム)、地域情報化など産学官連携による事業を企画、開発、評価。近年は主に、ロジックモデルを用いた地域問題解決のための政策設計や事業立案、自治体とすすめる行政経営教育プログラム、新産業創出事業のプロジェクトマネジメントなどに携わる。博士(工学)、修士(農学)

専門領域(活動テーマ)

- 地域・土木計画学
- 交通工学
- 地域情報化
- 社会マネジメントシステム
- プロジェクトマネジメント

今後の抱負

地域が“良い地域づくり”に挑戦し続けられる。  
私はそれを支える新しい仲間でありたいと願っています。

少子高齢化、若者の働く場、お年寄りの移動手段、地震や津波・・・わたしたちのまちにはいくつもの大きな課題がある。すぐに解決することはできないけれど、それでもあきらめず、今日も地域づくりに挑戦し続ける。もっともっとこのまちで生活することが好きになれる。そんな仕組みづくりへの挑戦を続け、きっとそんな仕組みが根付く・・・。

こんな思いを地域のの方々や学生と重ねながら  
これまでの幅広い研究・コンサルティング経験や専門知識を地域に役立てたいと思えます。



かじ ひでし  
**梶 英樹**  
090-6881-4262  
kaji@kochi-u.ac.jp

嶺北地域  
担当

【サテライトオフィス】  
嶺北地域/  
長岡郡本山町本山946-6 中央東土木事務所1階

経歴

- H4-8 関西大学法学部政治学科卒業
- H16-20 英国バーミンガム大学公共政策大学院公共経営学修士課程(NPOセクター専攻)修了
- H25- 日本福祉大学大学院 社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程(地域福祉領域)(通信)※在学中。
- H5-15. 大阪府庁 保健所、健康福祉部医療対策課、高齢介護室介護支援課
- H17-19 社会福祉法人大阪ボランティア協会 NPO/企業市民活動推進センター
- H19-20 特定非営利活動法人HANDS プログラムオフィサー
- H20-25 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 法人連携部、東日本大震災復興支援事業部プログラムマネジャー
- その他、大阪大学 NPO 研究情報センター研究員、高知大学、立命館大学、関西学院大学等での非常勤講師を担当

専門領域(活動テーマ)

- NPO/NGOと企業とのパートナーシップによる社会貢献活動の構築(BOPビジネス含む)
- コミュニティファンドの企画、運営
- NPOの中間支援、組織基盤強化
- 民間寄付調達(ファンドレイジング)の手法・スキル開発とプロセス
- 子ども参加、訪問型子育て支援

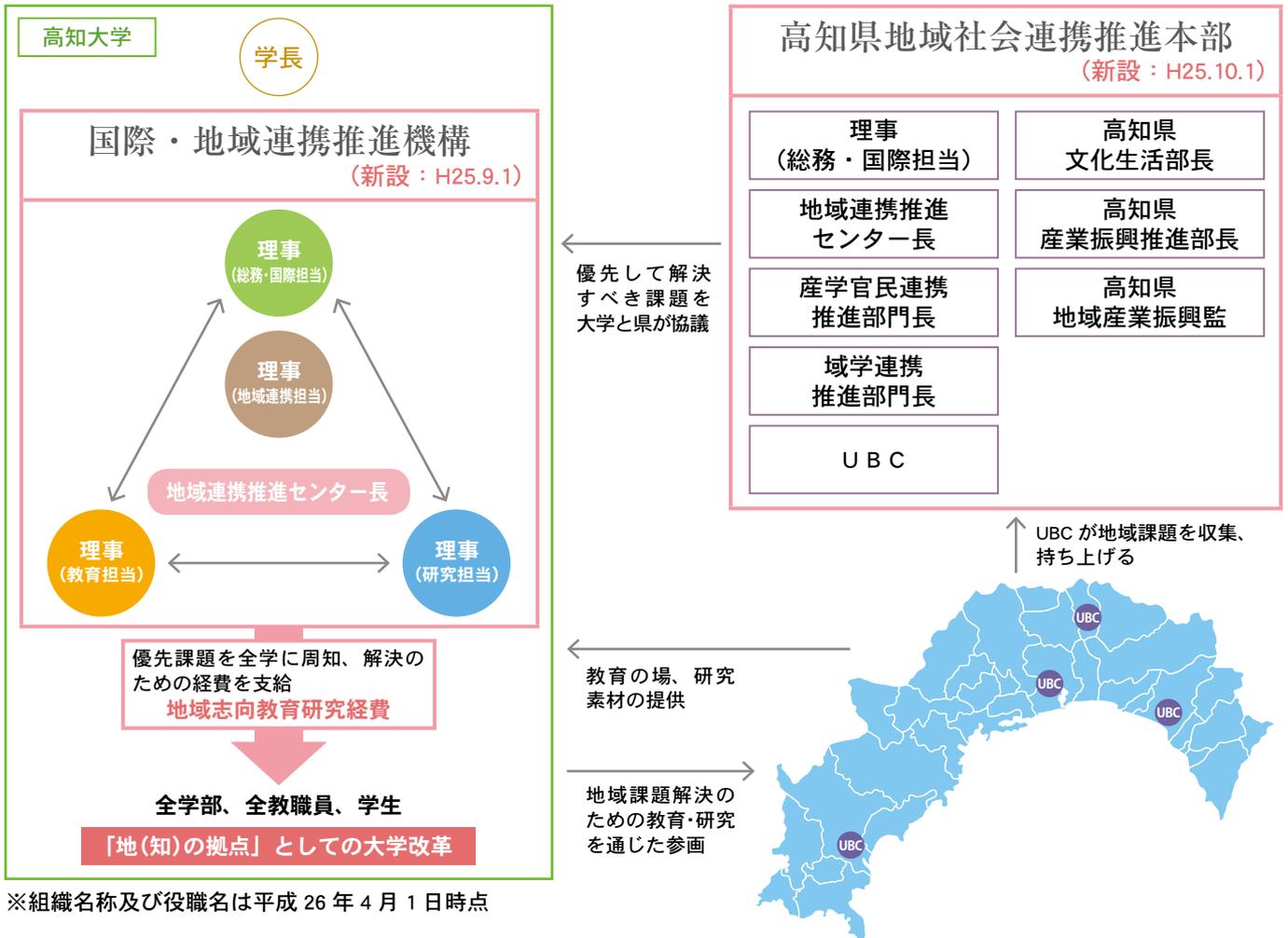
今後の抱負

UBCが地域で様々な関係者との繋がりをつくり、高知県が抱える様々な地域課題の決め細やかな情報収集・発見をするとともに、大学の様々なシーズと繋げることで地域志向の大学としてそのミッションを実現しようとする旺盛なチャレンジ精神をもって、本任務にあたりたいと思っています。

また、協働によって1+1が2以上の成果を生み、地域とのWin-Winの関係が築けるよう、今後積極的に携わっていきたく思っています。

これまで、被災地の地域復興、途上国支援など様々な国内外のコミュニティに入り行政や大学、企業、NPO、地域との協働事業に携わってきました。本任務を遂行するうえで、これまでの連携経験やスキル、ネットワーク等を活かしつつも、大学として何ができるか、すべきかを考え、かつ地域事情にあったコーディネーションを図っていくことを心がけたいと思っています。そして、何より全力で本任務に情熱を注ぎこみ、地域との強い絆が結ばれ、多くの方に信頼されるコーディネーターとして積極的に貢献していきたいと思えます。

「高知県地域社会連携推進本部」にて高知県の重要課題を協議、「国際・地域連携推進機構」を介して学内に周知。「地域志向教育研究経費」を活用して解決を図る。



「高知県地域社会連携推進本部」の設置

KICS 化事業の連携自治体である高知県と、より組織的かつ実質的に連携するための幹部級意見交換の場として「高知県地域社会連携推進本部」を新設した。

平成 25 年度は計 2 回の会議を開催し、高知県が抱える課題内容と意識の共有及び課題解決に向けた組織的・実質的な対話の場を構築した。

- |                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| 第 1 回会議:平成25年10月30日(水)   | 高知大学朝倉キャンパス管理棟 5 階会議室 |
| 第 2 回会議:平成26年 2 月 5 日(水) | 高知大学朝倉キャンパス管理棟 5 階会議室 |

「国際・地域連携推進機構」の設置

高知大学における地域連携事業を、組織として戦略的に推進するため「国際・地域連携推進機構」を新設した。平成 25 年度は計 5 回の会議を開催し、「高知県地域社会連携推進本部」から申し送られた議題を受け、高知大学としての対応を決定したほか、UBC の採用決定などを行った。

- |                           |                       |
|---------------------------|-----------------------|
| 第 1 回会議:平成25年 9 月 30 日(月) | 高知大学朝倉キャンパス管理棟 5 階会議室 |
| 第 2 回会議:平成25年11月25日(月)    | 高知大学朝倉キャンパス管理棟 5 階会議室 |
| 第 3 回会議:平成25年11月26日(火)    | (持ち回り開催)              |
| 第 4 回会議:平成25年12月11日(水)    | (持ち回り開催)              |
| 第 5 回会議:平成26年 2 月 18 日(火) | 高知大学朝倉キャンパス管理棟 5 階会議室 |

地域志向教育研究経費の活用

地域(高知県)を題材とした授業を新設・転換するための経費「地域志向教育経費」を、また、地域課題を研究的アプローチにより解決するための経費「地域志向研究経費」をそれぞれ学内公募した。

公募の結果、地域志向教育経費 22 件、地域志向研究経費 7 件の採択決定を行い、学内教員に交付した。

各種イベントの開催

①地域協働ネットワーク会議の設立【平成 26 年 2 月 17 日（月）開催】

KICS 化事業は、高知県が抱える様々な課題の解決に尽力されている方々との協働を通じて地域の一員としての役割を果たすことを目指している。事業の初年度にあたり、地域と高知大学の協働をこれまで以上に創出する最初の取組としてシンポジウムを開催した。

KICS 化事業の各種取組の基本的考え方、具体的な内容等を高知大学から伝え、広く県民にご理解頂くとともに、多様なご意見を頂く機会とした。



「地(知)の拠点整備事業(00C)」シンポジウム  
高知大学インサイド・コミュニティ・システム  
Kochi university Inside Community System

# KICS

協力機関  
高知工科大学、高知工業高等学校、  
高知学園短期大学、放送大学高知学習センター

## 「地域と高知大学による 協働創出の展望」 ～地域を支える高知大学の“力”～

このたび、高知大学は高知県のご支援を得て「高知大学インサイド・コミュニティ・システム(KICS)化事業」(平成25年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」採択)を開始しました。本事業は、高知県が抱える様々な課題の解決に尽力されている方々との協働を通じて地域の一員としての役割を研究面だけでなく教育面においても果たすことを目指しています。事業の初年度にあたり、地域と高知大学の協働をこれまで以上に創出する最初の取組としてシンポジウムを開催いたします。本取組の基本的考え方、具体的な取組の内容等を高知大学からお伝えして広く県民の皆様にご理解いただくとともに、皆様のご意見を頂くことで確かな一歩を踏み出したく存じますので、多くの方々の参加をお願い申し上げます。

- ◆日時：平成26年2月17日（月）13：00～16：30（開場 12：30）
- ◆場所：高知会館（高知県高知市本町5-6-42）2階「白鳳」
- ◆参加費：無料

主催：高知大学 国際・地域連携センター  
お問い合わせ：吉用（よしもち）  
〒780-8520高知市朝倉本町2丁目17-47  
電話088-844-8555 FAX 088-844-8556

◆シンポジウム日程

- 13：00 開会のあいさつ
- 13：00 シンポジウム趣旨説明
- 13：20 シンポジウム第1部・基調報告  
受田浩之（高知大学副学長、国際・地域連携センター長）  
『高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）』について（仮）
- 14：00 シンポジウム第2部・話題提供  
《話題提供者》  
○上田健作氏（高知大学地域協働教育学部門教授）  
『高知大学の00C教育改革と地域協働学部（仮称）の設置について』  
○中澤一真氏（高知県産業振興推進部長）  
『高知県の視点から期待と課題』  
○渡邊基文氏（株式会社シーネット代表取締役社長、  
土佐経済同友会産学官民連携推進委員会委員長）  
『産業界の視点から期待と課題』  
○光明院修一氏（香南市企画課長）  
『市町村及び地域の視点から期待と課題』
- 15：00 休憩（ご質問やご意見を受け付けます）
- 15：15 シンポジウム第3部・パネルディスカッション  
4名の話題提供者、コーディネーター（受田浩之）による  
ディスカッション
- 16：10 行動提起（「地域協働ネットワーク会議」の設置と参加  
呼びかけ）
- 16：20 閉会のあいさつ

②地域志向研究発表会の開催【平成 26 年 3 月 6 日（木）開催】

大学が保有する研究シーズを積極的に地域に向けて発信し、大学研究の理解を得ると同時に企業や自治体のマッチングを図ることはKICS 化事業における重要なミッションの一つである。高知大学及び土佐まるごと社中の主催により、地域課題解決に資する研究紹介を行った。

## 地域志向研究発表会

主催：高知大学、土佐まるごと社中

平成26年 3月6日[木] 13:30～16:30

高知県工業技術センター2階研修室  
(高知市布師田3992-3)  
駐車場：高知らばさんセンター駐車場

参加費 無料

●開催目的  
県内の大学等による地域の課題解決を目指した創意的な研究をご紹介します。大学等は地域志向した様々な研究を奨励しておりますが、その情報が地域外に発信されることは少なく、また、地域志向した研究に対し、大学等の組織が用意している支援制度等についても、学外には殆ど知られていません。本発表会では、地域志向研究をご紹介しますことで、各機関の取り組みを知っていただくと同時に、研究のパートナーとなる企業や地域コミュニティを募集します。また、地域課題解決のための研究支援についてもご紹介することで、更なる活用と改善を図ります。

●お問い合わせ先  
高知大学 国際・地域連携センター 石塚 吉用（よしもち）  
〒780-8073 高知市朝倉本町2-17-47  
TEL:088-844-8555 FAX:088-844-8556  
E-mail: kt04@kochi-u.ac.jp

講演者・講演内容は裏面

## プログラム

- 13:30～ 開会挨拶
- 13:40～13:55 「高知県産柚子果皮を利用した高知系褐毛和種用飼料の開発」  
高知大学農学部 松川和嗣 准教授
- 13:55～14:10 「廃棄ユズ果皮中のペクチンおよびセルロースを活用した機能材料の可能性」  
高知大学農学部 市浦英明 准教授
- 14:10～14:25 「中山間地域における新たな薪利用システム」  
高知大学農学部 鈴木康志 准教授
- 14:25～14:40 「地域資源を在来微生物で付加価値を高める発酵法の開発」  
高知大学農学部 永田信治 教授
- 14:40～14:55 「大学と地域連携自治体(安田町)との協働による過疎高齢化地域における健康づくり支援活動への介入方路開発」  
高知大学医学部看護学科 坂本雅代 教授  
コーディネーターによる研究支援制度紹介  
高知大学国際・地域連携センター 石塚裕史 副センター長
- 15:05～15:20 休憩
- 15:20～15:35 「食のキャラバン(タイトル未定)」  
高知工科大学地域連携機構 村井亮介 研究員  
コーディネーターによる研究支援制度紹介
- 15:35～15:45 高知工科大学研究連携部 佐藤暢 社会連携専門座
- 15:45～16:00 「果皮むき機の開発と剥離深度制御に関する研究」  
高知工業高等専門学校機械工学科 宮田 剛 准教授
- 16:00～16:10 コーディネーターによる研究支援制度紹介  
四国地区高専地域イノベーションセンター  
関 丈夫 産学官連携コーディネーター
- 16:10～16:25 「地域ニーズ集の作成と活用」  
高知県立大学社会福祉学部 田中きよひ 教授
- 16:25 閉会挨拶

③ COC 全国ネットワーク化事業の開催【平成 26 年 3 月 11 日（火）開催】

全国の COC 実施機関及び実施検討機関によるネットワークを形成し、COC 事業における教育・研究・社会貢献を如何に遂行するか、またその課題として何が考えられるかを中心に、基調講演及び各採択機関からのパネルディスカッションにより議論を行った。

地(知)の拠点整備事業シンポジウム

Center Of Community  
全国ネットワーク化事業

平成 26 年 3 月 11 日【火】(開催 18:00~18:00~17:00)

イイノホール&カンファレンスセンター  
東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル

参加費 無料  
定員: 500名

近年、全国各地方で大学と自治体との連携的連携が進み、大学と地域の連携が進展されています。文部科学省による「地(知)の拠点整備事業」(COC)は、その動きに呼応するものと期待されます。

一方で、全国各地の発展は、各地域にとっても大変重要な課題であり、地域への波及効果も求められるところで、COC は、一部の地域ではなく、日本全国で展開することが望ましいと考えられています。

そこで、全国の COC 実施機関を核とし、各地域を支援する大学等が相互に連携を促進できる場を設けることを目的として、全国シンポジウムの開催を企画します。このシンポジウムにて、COC 実施機関同士が関係構築に對して解決方法のヒントを得ると同時に、今後地域志向化を目指す機関に對しても、情報の提供ができるプラットフォームの役割を果たしていきたいと考えます。

13:00 開会  
13:05 基調講演  
13:10 文部科学省 施策説明——文部科学省高等教育局大学課長 菅原 晴彦  
13:35 基調講演 「地(知)の拠点整備事業」が拓く、地域と大学の新しい可能性——人材育成を中心に NPO 法人 ETIC 代表理事 宮城 裕男  
14:30 分科別パネルディスカッション(パネリストについて UHPF 参照)

分科会1【教育】 学生を対象とした課題解決学習や地域が求める人材を輩出するための教育  
分科会2【研究】 地域ニーズと大学シーズのマッチング、地域課題解決に向けた共同研究、研究成果の還元  
分科会3【社会貢献】 地域住民(子ども、社会人、高齢者等)の学びなおし、異世代間交流、学生の自主活動

15:40 各分科会まとめ  
16:55 閉会

申し込み方法  
以下のURLに申込フォームを掲載しますので、必要事項を入力の上、平成 26 年 2 月 25 日(水)までに必ずお申し込みください。  
主催: 全国地域連携推進センター http://www.cdkc.kochi-u.ac.jp/

お問い合わせ  
高知大学 高知大学 国際・地域連携センター  
高知高知南町南幸町 2 丁目 17-47  
TEL: 088-844-8555 FAX: 088-844-8556  
http://www.cdkc.kochi-u.ac.jp/

パネルディスカッション詳細

分科会 1【教育】  
◎ディスカッションのテーマ例  
学生を対象とした課題解決学習や地域が求める人材を輩出するための教育等  
・ 全学的な視点から、いかに教学改革へとつなげていくか?  
・ 地域や地元産業界からの協力を得るには?  
(地域や地元産業界との役割分担、インセンティブ)  
・ 教育効果の高いプログラムとするためには?

◎講演者紹介  
＜ファシリテーター＞  
上田 健作 高知大学/総合教育センター社会協働教育部門/部門長  
＜パネリスト＞  
宮城 裕男 NPO 法人 ETIC / 代表理事  
宮下 智樹 金沢工業大学/環境・建築学部/准教授  
五十嵐 勉 佐賀大学/全学教育機構(高等教育開発室)

分科会 2【研究】  
◎ディスカッションのテーマ例  
地域ニーズと大学シーズのマッチング、地域課題解決に向けた共同研究、研究成果の還元  
・ 地域課題と教員(学生)の効果的なマッチング方法は?  
・ 大学以外の組織(産業界等)を活用する場合、その効果的な連携方法とは?  
・ 共同研究の成果を、具体的な課題解決(アクション)へどのようにして結びつけるか?

◎講演者紹介  
＜ファシリテーター＞  
石塚 恒史 高知大学/国際・地域連携センター/副センター長  
＜パネリスト＞  
谷本 志志 高知大学/工学研究科・社会基盤工学専攻/教授  
上田 洋平 滋賀県立大学/地域共生センター/助教  
小島 直也 東海大学/医学部看護学センター/所長

分科会 3【社会貢献】  
◎ディスカッションのテーマ例  
地域住民(子ども、社会人、高齢者等)の学びなおし、異世代間交流、学生の自主活動  
・ 地域や地元産業界との効果的な連携体制を構築するためには?  
・ 取組を地域住民等へ周知し、活動へ巻き込んでいくために有効な手段とは?  
・ 活動の効果などをどのように測定するか?

◎講演者紹介  
＜ファシリテーター＞  
受田 浩之 高知大学/国際・地域連携センター/センター長  
＜パネリスト＞  
木村 晴壽 松本大学/総合経営学部/教授  
杉村 公也 中部大学/地域連携センター/副センター長  
(調整中)

①地域協働ネットワーク会議



②地域志向研究発表会



③ COC 全国ネットワーク化事業



## topics2 高知大学と自治体等との連携事業

高知大学は、県内自治体との連携協定等に基づき、各自治体を中心とした以下の連携事業等を実施した。

- 【高知県】 高知大学インサイド・コミュニティ・システム (KICS) 化事業、土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業 (土佐 FBC II)、高知県食品産業研究会、高知県産業振興計画フォローアップ委員会、高知県産学官連携推進会議、高知県食料産業クラスター協議会
- 【高知市】 高知市総合調査、中山間地域実態把握調査、春野中学校区防災教育推進地域指定事業学習会
- 【室戸市】 健康増進事業 (シレスト室戸水中運動プログラム、ロコトレ体操)
- 【四万十市】 天然アジアオノリの生産量アップの実証実験事業、天然アユを守る取り組み、四万十市産業振興計画策定委員会
- 【香南市】 ヒラメ中間育成施設の活用、まちづくりランドデザイン策定委員会、西川地区集落活動センターへの協力
- 【安田町】 人材育成事業「農業振興セミナー」、安田町職員のスキルアップ研修、健康づくり事業への参画を支援、唐浜化石発掘場の調査研究
- 【黒潮町】 日本カツオ学会 (2013 カツオフォーラム in 日南、カツオセミナー in 高知)
- 【土佐市】 土佐市こども科学体験ツアーへの協力
- 【芸西村】 出前公開講座、土着天敵昆虫の普及活動
- 【大豊町】 出前公開講座
- 【土佐町】 出前公開講座
- 【梶原町】 出前公開講座

### 第2期 土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業

地域再生に資する県内食品産業中核人材育成事業である土佐フードビジネスクリエーター人材創出 (土佐 FBC) については、平成 20 年度から 24 年度末まで、文部科学省科学技術戦略推進費の補助を得て実施してきたが、この 5 年間の成果が地域に認められ、高知県産業振興計画の柱である人材育成事業の一角として、高知県、市町村振興協会、地方銀行、JA からの支援のもと、平成 25 年度から第 2 期である土佐 FBC II をスタートさせるとともに、土佐まるごとビジネスアカデミーの「専門知識・技術」コースの科目の 1 つとして位置付けられることとなった。

実施した教育プログラムは、4 つの座学、2 つの技術習得メニュー、さらに企業の商品開発などを OJT で実施する「課題研究」から構成され、指導には現役の本学教員と公設試験研究機関の研究員が当たり、課題研究や実験技術には土佐 FBC 特任教員が専任で指導に当たった。平成 25 年度は、A コース受講生 5 名、B コース受講生 8 名、C コース受講生 13 名、選択受講コース 7 名、企業研修コース 6 名の計 39 名が修了した。

#### 開講式

日時 平成 25 年 5 月 10 日 (金) 14:00 ~ 14:30

場所 高知大学農学部大講義室 5-1 教室

新規受講生 54 名

(A コース 7 名、B コース 10 名、C コース 16 名、  
選択受講 コース 13 名、企業研修コース 8 名)



### 学外教室の開催（幡多教室）

高知県西部の幡多地域は農水産業が盛んな地域で、多くの食品関連事業所もあり、食料関連教育のニーズが存在するが、土佐FBCの講義が行われている高知大学物部キャンパスから片道2時間程度の遠距離にあり、土佐FBCとして地域のニーズを満たすことが難しい状況であることから、平成23年度から幡多地域において、通常のカリキュラムとは別に食品の基礎知識を学ぶことに主眼を置いた教育プログラム「土佐FBCⅡ学外教室（幡多教室）」を開講し、平成25年度は12名の受講生が参加、うち10名の修了生を輩出した。

### 食品関係展示会、商談会等への出展

修了生・受講生の展示商談会への参加や食品市場動向の把握、展示商品の情報収集、事業のPRなどを目的に食品関係展示会「アグリフードEXPO 東京2013」、「アグリフードEXPO 大阪2014」に参加した。

また、例年の取り組みとして、事業のPRや受講生が日ごろの授業の成果を生かし開発・生産した製品の販売、また製品化に向けての試食の実施などを目的に、土佐FBC地産地消店として「高知大学物部キャンパス一日公開」に参加した。

【アグリフードEXPO 東京2013】



【アグリフードEXPO 大阪2014】



### 地域再生人材創出拠点の形成シンポジウム「地域再生と地（知）の拠点としての大学への期待」

地（知）の拠点整備事業のプロジェクト報告事例として、ポスターセッションに「高知大学土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業」を出展した。

日時 平成25年11月8日（金） 13:00～17:40

場所 イイノホール&カンファレンスセンター

東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビル

### FBCレストラン開店

土佐FBC受講生の課題研究「最高のおもてなしで高知の食を満喫FBCレストラン」の一環として、土佐FBC受講生の開発商品を使った料理を楽しむ「FBCレストラン」が11月8日（金）にホテル松葉川温泉で開催された。



イノベーションネットアワード2014「文部科学大臣賞」受賞

全国の各地域における新事業・新産業創出に向けた優れた取組を評価することにより、自主的な地域産業の振興・活性化を促進するとともに、他地域においてもこうした先進事例を学ぶことで、より一層、主体的に地域産業の振興・活性化に取り組んでいく「流れ」の創出を目的として創設された「地域産業支援プログラム表彰」（主催：一般財団法人日本立地センター、全国イノベーション推進機関ネットワーク）において、イノベーションネットアワード2014「文部科学大臣賞」を受賞（※）した。

（※）平成26年6月20日（金）表彰式

「イノベーションネットアワード2014  
地域産業支援プログラム表彰事業 受賞プログラム」  
HPより抜粋

修了式

日時 平成26年3月14日（金） 11:00～11:30

場所 高知城ホール 4階多目的ホール

修了生 39名

（Aコース 5名、Bコース 8名、Cコース 13名、  
選択受講コース 7名、企業研修コース 6名）

成果発表会

日時 平成26年3月14日（金） 13:30～16:45

場所 高知城ホール 2階大会議室

基調講演 テーマ「柚子の市場開拓から始まった地域づくり」

馬路村農業協同組合 組合長 東谷 望史 氏

成果発表

- 「みんなの想いを持ち寄ってかなえる場所づくり」 出水 佐知 氏
- 「ジビエ開拓への道とFBC受講」 北窪 博章 氏
- 「土佐FBC IIを修了して…」 池内 元紀 氏
- 「つながる ～商品・人・未来～ 豆腐プリンの冷凍化」 杉野 一女 氏

土佐FBC倶楽部

本事業に参集し、食品産業の活性化による地域再生という同じ「志」のもと、互いに机を並べた者同士のプラットフォームとして、相互の交流・連携を促進し、もって地域の発展に貢献することを目的とし、3ヶ月に1回程度開催している。

本倶楽部では、修了生同士あるいは修了生と講師等との情報交換、修了生の試作品の評価などが行われ、いずれの回も活発な活動が続いている。



## 日本カツオ学会活動

平成 23 年 1 月に黒潮町と高知大学との連携により設立された日本カツオ学会は、地域・領域・学問・立場など様々なレベルを超えて、カツオの価値を問い直すことを目指している。その活動の一環として、平成 25 年度は以下の活動を行った。

### 2013 カツオセミナー in 高知

カツオに関する学術的な研究・調査を発表する場として、「カツオセミナー in 高知」を開催した。研究者や水産関係者、食品産業従事者等、約 70 名が参加し活発な意見交換を行った。

日時 平成 25 年 6 月 22 日（土）

場所 高知大学朝倉キャンパス メディアの森 6 階メディアホール

基調講演 「かつお一本釣り漁業の収益性改善に向けて～開発調査センターの取り組み～」

独立行政法人水産総合研究センター 開発調査センター開発調査専門役 山下 秀幸 氏

一般講演

「災害とカツオ漁」

東北大学 災害科学国際研究所

川島 秀一 氏

「太平洋沿岸カツオ標識放流調査 ～日本近海への来遊特性の解明(南西諸島海域におけるカツオの移動 および遊泳行動)～」

味の素 株式会社

杉本 信幸 氏

水産総合研究センター国際水産資源研究所

松本 隆之 氏

「次世代に伝えるだし文化、地元に根ざした食育のあり方

～日本古来の『出汁』DASHI『旨味』UMAMI をはじめ日本の伝統食（家庭の味）を伝えて行く使命感～」

有限会社 泉利昆布海産

泉谷 伸司 氏

「土佐の風土に根ざした地域教材開発－カツオ－

その 1 教材開発の概要

その 2 小学校 5 年生における授業実践

その 3 料理編の授業実践と総括」

高知市立朝倉第二小学校

山本 哲治 氏

高知市立小高坂小学校

芝 京 氏

高知大学

菊地るみ子、山中文、岡谷英明、柴英里、吉岡一洋、中道一心、受田浩之



## 2013 カツオフォーラム in 日南

第4回目のフォーラムとして宮崎県日南市において、グローバルな視点と地域や立場を越えてカツオ資源の実態を報告・協議・検討などの意見が交わされた。またカツオ資源の保護、カツオ一本釣り漁法の継承、カツオの食文化再構築に関して、日南市大会宣言も採択した。



日時 平成25年12月7日(土) 13:00～17:30

場所 宮崎県日南市南郷ハートフルセンター

(1) 日南市カツオ漁映像放映

(2) オープニングアトラクション

(3) 開会挨拶 フォーラム実行委員長 日南市長 崎田 恭平 氏  
日本カツオ学会 会長 若林 良和 氏

(4) 来賓祝辞 宮崎県知事 河野 俊嗣 氏

(5) 特別講演「震災からの復興と水産都市としてのまちづくり」  
宮城県気仙沼市市長 菅原 茂 氏

(6) 基調講演「かつお一本釣り漁業の収益性改善に向けて」  
独立行政法人水産総合研究センター 開発調査センター所長 井上 清和 氏

(7) パネルディスカッション  
「資源・漁法・食から見たカツオの未来と地域経済」  
進行：受田 浩之 氏 (日本カツオ学会 副会長)  
パネリスト：菅原 茂 氏 (宮城県気仙沼市 市長)  
久塚 智明 氏 ((株)FBT プランニング 代表取締役)  
河野 賢二 氏 (外浦鯉船船主組合 組合長)  
上牧 英雄 氏 (宮崎県鯉部会 会長)  
黒田 泰裕 氏 (日南商工会議所 事務局長)



(8) 日南市大会宣言  
「カツオ資源の保護」  
「カツオ一本釣り漁法の継承」  
「カツオの食文化再構築」  
日南市 副市長 稲本 龍生 氏

(9) 大会旗継承  
宮崎県日南市 → 高知県中土佐町 (次回開催地)

(10) 閉会挨拶  
南郷漁業協同組合代表理事組合長 松浦 和繁 氏



## 生涯学習活動

### 1) 生涯学習活動の推進体制

平成 25 年度は、公開講座等の企画・立案、分析評価等について審議する生涯学習企画会議を 1 回開催した（平成 25 年 7 月 10 日（水））。

全学的に開催する公開講座である「秋の公開講座」が、過去、受講率 30～50% 台と低迷し続けている状況を踏まえ、公開講座規則の改正及び平成 25 年度実施する公開講座やオープン・クラスについて審議した。

公開講座規則の改正については、平成 26 年 1 月 22 日（水）開催の役員会にて、①公開講座手続②公開講座講習料③公開講座実施主体の改正について承認された。具体的な改正内容は、①全学的に開催する公開講座及び学部等が開催する公開講座の開設にあたって、地域連携推進センター運営戦略室会議が設置する専門委員会の議を経ることを廃止すること②講習料の一律徴収を改め、無料あるいは有料での開設をできるようにすること③全学的に開催する公開講座を、学長のトップダウンあるいは地域連携推進センター以外の部局等でも実施することを可能とすることである。この改正により、平成 26 年度からは、より地域のニーズや課題に応じ、機動的、戦略的かつフレキシブルに実施できることとなった。

### 国際・地域連携センター生涯学習企画会議内規

平成 22 年 3 月 25 日  
国際・地域連携センター運営戦略室会議 裁定

（設置）

第 1 条 国際・地域連携センター地域連携・再生部門に国際・地域連携センター生涯学習企画会議（以下「生涯学習企画会議」という。）を置く。

（審議事項）

第 2 条 生涯学習企画会議は、次の各号について審議する。

- (1) 国際・地域連携センターの所掌する生涯学習活動の企画・立案に関する事
- (2) 国際・地域連携センターの所掌する生涯学習活動の分析・評価に関する事
- (3) その他学内の生涯学習活動に資すること

（組織）

第 3 条 生涯学習企画会議の委員は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 国際・地域連携センター長
- (2) 国際・地域連携センター地域連携・再生部門長
- (3) 国際・地域連携センター運営戦略室会議委員 若干人
- (4) 国際・地域連携センター長が必要と認めた者

（座長）

第 4 条 生涯学習企画会議に座長を置き、地域連携・再生部門長をもって充てる。

- 2 座長は、必要の都度生涯学習企画会議を招集し、その議長となる。
- 3 座長に事故あるときは、座長があらかじめ指名した委員が、その職務を代行する。

（任期）

第 5 条 第 3 条第 3 号の委員の任期は、2 年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（事務）

第 6 条 生涯学習企画会議の事務は、地域連携課地域連携・再生係において処理する。

（雑則）

第 7 条 この内規に定めるもののほか、必要な事項は別に定める。

附 則

この内規は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この内規は、平成 23 年 7 月 12 日から施行し、平成 23 年 4 月 1 日から適用する。

附 則

この内規は、平成 23 年 7 月 12 日から施行し、平成 23 年 7 月 1 日から適用する。

2) 秋の公開講座等

秋の公開講座等は、次のとおり実施した。

①第1群：一般教養及び現代テーマ等：4講座【学内公募】

②第3群：「環境」に関する人材育成を目的とした講座：1講座 ( )は開講中止講座を含めた数値

講座名	定員	受講者	備考	
第1群	書道入門	10	5	
	日本画を描く	10	9	
	リラクゼーションでこころとからだを解き放つ	15	7	
	“理科離れ”ってほんとうですか？	(20)	-	中止
	運動初心者大歓迎！中高年のストレッチ&ウエストシェイプ	15	10	
	暮らしを醸す小さな生命！～発酵と腐敗を区別する文化と生活！～	(30)	-	中止
第3群	【環境人材育成講座】 自然の記録を残す人をつくる —生物標本製作講座（蛇類・小型哺乳類組立骨格標本）—	15	12	
	合計 5 (7) 講座 (参加率：66 (48) %)	65 (90)	43	

参考：昨年度の実績：6(8)講座 参加率49% (第2群(※)を含む43%)  
 (※)高知大学・高知市共催公開講座。平成25年は実施せず。



平成25年度 秋の公開講座 (2講座群)

①公開講座 (第1群：一般教養・現代テーマ等) 高知大学朝倉キャンパス ●受講料 6,200円

講座名	講師	開講日時	募集人員	講師からの一言
書道入門	北川 修久	11月1日(金)18:30~20:00	10名	ピカソのように、「書」を理解することができるようになる。そうならば、あなたは「書」がわかる芸術家です。
		11月8日(金) "		
		11月15日(金) "		
		11月22日(金) "		
		11月29日(金) "【全5回】		
日本画を描く	野角 孝一	10月28日(月)18:30~20:00	10名	普段の生活の中でひとつのモノを長時間見るとは少ないと思います。今回はモチーフをとことん見て感じたことを描きます。
		11月11日(月) "		
		11月18日(月) "		
		11月25日(月) "		
		12月2日(月) "【全5回】		
リラクゼーションでこころとからだを解き放つ	原崎 道彦	10月5日(土)10:30~12:00	15名	がんばらないとできないことは、何もありません。楽なことしかありません。そうしないとリラクゼーションになりません。
		10月12日(土) "		
		10月19日(土) "		
		10月26日(土) "		
		11月2日(土) "【全5回】		
“理科離れ”ってほんとうですか？	川崎 謙 國府俊一郎 蒲生 啓司 原田 哲夫 赤松 直 中城 満	11月5日(火)18:00~19:30	20名	私達は、教育学部で、将来教職に就く学生のための人材を養成している理科教育の教員です。土産の自然・地域資源を創造的に活用する、独自の科学技術教育システムを構築して、持続可能な科学技術立国を目指したいと思います。
		11月12日(火) "		
		11月19日(火) "		
		11月26日(火) "		
		12月3日(火) "		
		12月10日(火) "【全6回】		
運動初心者大歓迎！中高年のストレッチ&ウエストシェイプ	常行 泰子	11月12日(火)11:00~12:00	15名	運動初心者の方、大歓迎です！新しくなった高知大学ダンス室で快適に運動を始めましょう。お待ちしております(〇)
		11月19日(火) "		
		11月26日(火) "		
		12月3日(火) "		
		12月10日(火) "【全5回】		

第1回～第4回高知市内会場【イオンモール高知】、第5回高知大学朝倉キャンパス

講座名	講師	開講日時	募集人員	講師からの一言
暮らしを醸す小さな生命！～発酵と腐敗を区別する文化と生活！～	永田 信治	10月4日(金)19:00~20:30	30名	暮らしの中で「発酵」は良いもの、「腐敗」は悪いものと、私達は教えられてきました。しかし、生命が分解して変化する現象として、科学的には「発酵」も「腐敗」も同じです。民俗学の権威、国立民族学博物館の石毛直道名誉教授の名言、「発酵」と「腐敗」を区別するのは「科学」ではなく「文化」である！・・と言う視点から、身近な発酵食を見直してみませんか？
		10月11日(金) "		
		10月18日(金) "		
		10月30日(水) "		
		11月3日(日)10:00~11:30 【全5回】		

②公開講座 (第3群：「環境」に関する人材育成を目的とした講座) パラタクソノミスト (準分類学) 養成講座  
 高知大学朝倉キャンパス●受講料 9,200円

講座名	講師	開講日	募集人員	講師からの一言
自然の記録を残す人をつくる —生物標本製作講座 (蛇類・小型哺乳類組立骨格標本)—	谷地森 秀二 伊藤 圭子	10月13日(日)9:00~16:00	15名	小型哺乳類は一人一点ずつ作製します。ネズミ類、モグラ類、コウモリ類の中から選びます。 へじ類は、3~4人で一点作ります。作製した標本は、高知大学理学部サイエンスギャラリーで展示したのち、県内の様々な場所で展示する予定です。
		10月14日(月祝) "		
		11月16日(土) "		
		11月17日(日) "【全4回】		

③「地域再生」に関する人材育成を目的とした講座

安田町農業振興セミナー

平成26年1月23日(木) 13:30 ~ 15:00 安田町役場 中山支所2階

講師：高知大学農学部暖地農学コース講師 浜田和俊 氏

テーマ：新規導入果樹としてのブルーベリー

3) 出前公開講座「自然と文化」

出前公開講座「自然と文化」は、大学が地域に出赴いて、市町村の教育委員会等と連携して開催する公開講座である。平成25年度は、芸西村、土佐町、大豊町、梶原町の4地域で開催した。開催にあたっては、事前に講義内容を自治体や教育委員会と協議し、地域(市町村)の要望に応じた内容、地域の特性を重視した地域独自の講座内容としている。したがって、テキストは開催地ごとに独自の内容で作成している。



平成25年度 高知大学公開講座 「自然と文化」ご案内
主催 高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門
共催 芸西村
日時 第1回 6月26日(水) 午後7:00~8:45
第2回 7月3日(水) 午後7:00~8:30
第3回 7月17日(水) 午後7:00~8:30
第4回 7月24日(水) 午後7:00~8:30
第5回 7月31日(水) 午後7:00~8:45
場所 芸西村生涯学習館 2階 学習室
講座タイトルと講師
第1回 「子どもの視点からの子育て」 高知大学 教育学部学校教育教員養成課程(特別支援教育コース) 准教授 是永 かな子
第2回 「施設園芸における省エネルギー対策の現状」 高知大学 農学部 農学科 暖地農学 准教授 宮内 樹代史
第3回 「ライフスタイルを見直して病気を予防しよう!」 高知大学 医学部 医学科 医療学 助教 大浦 麻絵
第4回 「地域資源で村を元気に!」 高知大学 国際・地域連携センター長・副学長・農学部 教授 受田 浩之
第5回 「お酒に飲まれずに飲むための基礎知識」 高知大学 医学部 医学科 消化器内科学 准教授 岩崎 慎二
お申し込み 平成25年6月20日(木)までに芸西村企画課(TEL:0887-33-2114)へお申し込みください。

講座題目・講師一覧
月 日 時間 講座の内容と講師
6月26日(水) 19:00~19:15 開講式
19:00~20:30 「子どもの視点からの子育て」 是永 かな子
7月3日(水) 19:00~20:30 「施設園芸における省エネルギー対策の現状」 宮内 樹代史
7月17日(水) 19:00~20:30 「ライフスタイルを見直して病気を予防しよう!」 大浦 麻絵
7月24日(水) 19:00~20:30 「地域資源で村を元気に!」 受田 浩之
7月31日(水) 19:00~20:30 「お酒に飲まれずに飲むための基礎知識」 岩崎 慎二
20:30~20:45 閉講式 (修了証書授与)



平成25年度 高知大学公開講座 「自然と文化」ご案内
主催 高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門
共催 土佐町教育委員会
日時 第1回 6月27日(木) 午後6:45~8:30
第2回 7月4日(木) 午後7:00~8:30
第3回 7月11日(木) 午後7:00~8:30
第4回 7月18日(木) 午後7:00~8:30
第5回 7月25日(木) 午後7:00~8:45
場所 土佐町保健福祉センター(あじさいホール)
講座タイトルと講師
第1回 「鮭を糍と書き、鮭菌を菌園と呼ぶ、日本人の食と心を醸した、暮らしの知恵と歴史」 高知大学 農学部 農学科 生命化学 教授 永田 慎治
第2回 「健康長寿をおくるための秘訣」 高知大学 医学部附属病院 リハビリテーション科 准教授 石田 健司
第3回 「地域づくりは人づくり!〜高知県土佐町の取組を参考に〜」 高知大学 国際・地域連携センター長・副学長・農学部 教授 受田 浩之
第4回 「内蔵古大草原の生態環境と人々の暮らし」 高知大学 農学部 農学科 食料科学 教授 藤 崎 晴
第5回 「人の中で人は育つ子育て・教育についてのヒント」 高知大学 教育学部 附属教育実践総合センター 准教授 鹿嶋 真弓
お申し込み 平成25年6月20日(木)までに土佐町教育委員会事務局(TEL:0887-82-0483)へお申し込みください。

講座題目・講師一覧
月 日 時間 講座の内容と講師
6月27日(木) 18:45~19:00 開講式
19:00~20:30 「鮭を糍と書き、鮭菌を菌園と呼ぶ、日本人の食と心を醸した、暮らしの知恵と歴史」 藤 崎 晴
7月4日(木) 19:00~20:30 「健康長寿をおくるための秘訣」 石田 健司
7月11日(木) 19:00~20:30 「地域づくりは人づくり!〜高知県土佐町の取組を参考に〜」 石田 健司
7月18日(木) 19:00~20:30 「内蔵古大草原の生態環境と人々の暮らし」 藤 崎 晴
7月25日(木) 19:00~20:30 「人の中で人は育つ子育て・教育についてのヒント」 鹿嶋 真弓
20:30~20:45 閉講式 (修了証書授与)

大豊町

平成25年度 高知大学公開講座  
「自然と文化」ご案内  
主催 高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門  
共催 大豊町教育委員会

○日時 第1回 8月23日(金) 午後7:00~8:45  
第2回 9月6日(金) 午後7:00~8:30  
第3回 9月13日(金) 午後7:00~8:30  
第4回 9月20日(金) 午後7:00~8:30  
第5回 9月27日(金) 午後7:00~8:45

○場所 大豊町農工センター文化ホール

○講座タイトルと講師  
第1回 高知県における再生可能エネルギーの未来  
国際・地域連携センター 副センター長・准教授 石塚 悟史  
第2回 元親の名「長宗我部」の再検討  
人文学部 人間文化学科 地域変動論 教授 津野 倫明  
第3回 シルクロード8 各国の市場経済化と人々の暮らし  
国際・地域連携センター特任教授(国際連携コーディネーター) 新納 宏  
第4回 発達段階に応じたスポーツ活動を考える  
教育学部 学校教育員養成課程(保健体育コース)、  
生涯学習課程(スポーツ科学コース) 教授 神塚 一成  
第5回 地域づくりは人づくり! ~鳥取県高士町の取組みを参考に~  
国際・地域連携センター長・教授・副学長 奥田 浩之

○募集人員 30人  
受講される方にはテキストを頒布し、3回以上出席された方には修了証書を授与します。

○お申し込み 大豊町教育委員会 (TEL.0887-72-0458) へ、  
8月18日(水)までにお申し込みください。

○受講料 1,200円

○少しだけ、高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門のコマースナル  
高知大学国際・地域連携センター、地域連携・再生部門では、いろいろな学習の場を提供しています。なんでも、お気軽にご相談下さい。

お問い合わせ先 高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門  
TEL: 088-844-8555 FAX: 088-844-8556  
E-mail: [kokaikoza@kochi-u.ac.jp](mailto:kokaikoza@kochi-u.ac.jp)  
\*ホームページも見てね URLは → <http://www.kochi-u.ac.jp/wwwlife/index.html>

講座題目・講師一覧

月日	時間	講座の内容と講師
8月23日(金)	19:00~19:15	開 講 式
	19:15~20:45	高知県における再生可能エネルギーの未来 石塚 悟史 現在、わが国の主要なエネルギー源である石油・石炭などの化石燃料は限りあるエネルギー資源です。これに対し、太陽光や太陽熱、水力、風力、バイオマス、地熱などのエネルギーは、一度利用しても比較的短期間に再生が可能であり、資源が枯渇しないエネルギーです。これらは、「再生可能エネルギー」といわれ、東日本大震災以降、石油等に代わるクリーンなエネルギーとして著大に普及が進んでいます。高知県にも豊富な森林資源、年間降水量や日照時間など、全国でも優位な地域特性等の強みもっています。この強みを十分に活かした再生可能エネルギー導入の取り組みについて考えてみたいと思います。
9月6日(金)	19:00~20:30	元親の名「長宗我部」の再検討 津野 倫明 長宗我部元親は天正3(1575)年に土佐を統一し、さらに四国統一の覇業も進めたが、同13年には羽柴(豊臣)秀吉に降伏した。おそらく、こうした元親のプロフィールは高知県の人にとってはなかなか常識となっているであろう。元親の名字についても、漢字表記は「長宗我部」(または「長曾我部」)、読みは「ちよそがべ」(または「ちよそがべ」)が常識化しているのではないだろうか。しかし、当時の文書(もんじょ)や日記には「長祖我部」「長宗我部」など一見すると奇妙な漢字表記がみられる。はたして、元親の名字はどのように表記し、またどのように読むべきなのであろうか。 この講座では元親の名字を再検討し、名字に込められた常識をつかえず見解を提示したい。
	19:00~20:30	シルクロード8 各国の市場経済化と人々の暮らし 新納 宏 皆さんはシルクロードという何を想像しますか?月の砂漠を静々と歩むラクダの隊商?という世界もありますが、大都市には地下鉄が走り、高層ビルが立ち並んでいます。この講座では、1991年旧ソ連から独立した中央アジア・コーカサス8小国の市場経済移行への試練と、その中で庶民の暮らしがどう変わったか、ソ連時代と比較しながらお話します。また、ここは古来シルクロードを通じて文明の興亡が繰り返されてきた地。マルカンド、ブハラなどの世界遺産が多く残されていますので、メソポタミア文明の昔から、チベット、ローマ帝国支配に至るまでの歴史も概観します。 私自身がJICAの現地所長として、また中央アジア担当課長として10年近くこの地域を歩きましたので、その経験を踏まえ写真をお見せしながらお話したいと思います。
9月20日(金)	19:00~20:30	発達段階に応じたスポーツ活動を考える 神塚 一成 わたしたち人間は、生まれてから死ぬまで心身ともに変化し続けます。からだが大きくなる、いろいろな動きができるようになる、言葉を覚えて会話ができるようになる、筋力を立てて考えることができるようになるなど、坂を上るようになっていきます。また、これまでできていたことができなくなる、以前より時間がかかるようになるなどの坂を下るような変化もあります。こうした変化すべてを「発達」と捉えることができます。スポーツには様々な種類があり、わたしたちに合わせてくれる効果も、それそれ異なります。講座では以上のことを踏まえ、それぞれの発達段階にどんなスポーツのどのような活法を、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。
	19:00~20:30	地域づくりは人づくり! ~鳥取県高士町の取組みを参考に~ 奥田 浩之 ハンディを背負った地域が持続的に発展していくためには、首長が明確なビジョンを提示することと地域住民が危機感を共有すること、さらに長期的な地域づくりを支える「志を持った」人を育てる必要があります。「よそ者、若者、帰郷者が地域を変える」というモデルとして有名な、鳥取県高士町の事例を中心に、「地域づくりは人づくり」の概念について、皆様と学んでみたいと思います。この事例から、高知県が進めている人づくり事業「土佐まるごとビジネスアカデミー」や高知大学が実施している「土佐フードビジネスアクセラレーター(FBC)人材育成事業」の重要性を再認識すると共に、地域貢献を目的とした本学の将来構想についてもお話しさせていただきます。
9月27日(金)	19:00~20:30	開 講 式 (修了証書授与)
	20:30~20:45	

梶原町

平成25年度 高知大学公開講座  
「自然と文化」ご案内  
主催 高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門  
共催 梶原町教育委員会

○日時 第1回 9月25日(水) 午後7:00~8:45  
第2回 10月16日(水) 午後7:00~8:30  
第3回 11月6日(水) 午後7:00~8:30  
第4回 11月27日(水) 午後7:00~8:30  
第5回 12月3日(火) 午後7:00~8:45

○場所 梶原町地域活力センター

○講座タイトルと講師  
第1回 元親の名「長宗我部」の再検討  
人文学部 人間文化学科 地域変動論 教授 津野 倫明  
第2回 「地域再生・活性化」と協働一城学連携による地域協働を中心に一  
総合科学系 地域協働教育学部部門 部長・教授 上田 健作  
第3回 肥満とメタボリックシンドローム  
医学部 医学科 内分泌代謝・腎臓内科学 准教授 西山 充  
第4回 “オレ流” 体験的読書論 ~ つながる ひろがる 読書会 ~  
前高知大学理事(教育担当) 名誉教授 松水 健二  
第5回 自然災害に備える  
総合研究センター防災部門 准教授 原 忠

○募集人員 1回あたり30人 先着順  
受講される方にはテキストを頒布し、3回以上出席された方には修了証書を授与します。

○お申し込み 梶原町教育委員会事務局 (TEL.0889-65-1350)へ事前にお申込ください。  
○受講料 無料  
○少しだけ、高知大学国際・地域連携センター、地域連携・再生部門のコマースナル  
高知大学国際・地域連携センター、地域連携・再生部門では、いろいろな学習の場を提供しています。なんでも、お気軽にご相談下さい。

お問い合わせ先 高知大学国際・地域連携センター地域連携・再生部門  
TEL: 088-844-8454 FAX: 088-844-8556  
E-mail: [kokaikoza@kochi-u.ac.jp](mailto:kokaikoza@kochi-u.ac.jp)  
\*ホームページも見てね URLは → <http://www.kochi-u.ac.jp/wwwlife/index.html>

講座題目・講師一覧

月日	時間	講座の内容と講師
9月25日(水)	19:00~19:15	開 講 式
	19:15~20:45	元親の名「長宗我部」の再検討 津野 倫明 長宗我部元親は天正3(1575)年に土佐を統一し、さらに四国統一の覇業も進めたが、同13年には羽柴(豊臣)秀吉に降伏した。おそらく、こうした元親のプロフィールは高知県の人にとってはなかなか常識となっているであろう。元親の名字についても、漢字表記は「長宗我部」(または「長曾我部」)、読みは「ちよそがべ」(または「ちよそがべ」)が常識化しているのではないだろうか。しかし、当時の文書(もんじょ)や日記には「長祖我部」「長宗我部」など一見すると奇妙な漢字表記がみられる。はたして、元親の名字はどのように表記し、またどのように読むべきなのであろうか。 この講座では元親の名字を再検討し、名字に込められた常識をつかえず見解を提示したい。
10月16日(水)	19:00~20:30	「地域再生・活性化」と協働一城学連携による地域協働を中心に一 上田 健作 近年、「協働」という概念が盛んになっているのではないだろうか。「住民と行政の協働による地域(まち)づくり」はその典型でしょう。社会福祉や産業振興といった個別的政策分野でもこの言葉が多用されています。それは、国や自治体の政策文書を見れば一目瞭然です。しかし、「協働って何?」と思われる方も依然として多いのではないのでしょうか。協働とは地域づくりをはじめとする社会問題の解決を進める「新しい協力スタイル」であることは間違いないのですが、 この講座では、「地域再生・活性化」を推進するために求められる「協働」とは何かについてお話をすると共に高知大学がこれら取組を開始する地域との協働とその仕組みについて紹介することで、地域づくりの新しいスタイルについて皆さんと一緒に考えたいと思います。
	19:00~20:30	肥満とメタボリックシンドローム 西山 充 本邦では肥満者が増加しており、現在成人男性の4人に1人、女性では5人に1人が肥満の範囲にあり、肥満者数は3,000万人にも上る。肥満者が増加する要因としては、動物性脂肪摂取量の増加や自動車保有率増加に伴う運動不足などが指摘されている。一方で、高血圧、脂質代謝異常、高血糖などは動脈硬化の危険因子であるが、肥満者ではこれらの危険因子が重複して生じやすい。この病態はメタボリックシンドロームと呼ばれ、相乗的に動脈硬化の頻度が高まることが知られており、すなわちメタボリックシンドロームと判定された方は、個々の危険因子の異常は軽度であっても、併発すると顕著なべきである。 本講座では肥満とメタボリックシンドロームの病態と治療を理解していただき、現実的な対応法を考えていただきたいと思います。
11月6日(水)	19:00~20:30	「オレ流」体験的読書論 ~ つながる ひろがる 読書会 ~ 松水 健二 活字離れ、読書離れが指摘されるようになって久しい。しかし、毎年出版される本の数はむしろ増えてきています。人はなぜ、何が必要があって本を読むのでしょうか? 読書に関する調査報告や文脈を参照して、「読書は私たちの生活にとってどんな意味を持つものなのか」などについて、みなさんと一緒に考えてみたい。
	19:00~20:30	また、いま大人数の読書会やブッククラブ(読書会などと呼ばれています)がいろいろな形で開催されています。静かなゲームになっているものも書かれています。私が参加している読書会の事例もご紹介しながら、楽しい読書、意義ある読書にとって「読書会」が果たす役割、醍醐味などについてお話ししたいと思います。
11月27日(水)	19:00~20:30	自然災害に備える 原 忠 高知県は自然環境に恵まれ、災害への備えが喫緊の課題になっている。高知県の中山間地域は地質がせり、崩落、風雪や地震による土砂災害や集落の孤立化が生じやすい。発生確率の高い南海トラフ巨大地震では、南海トラフ部の液化化、津波災害に加え、中山間地域であっても揺れによる家屋の倒壊や火災、土砂災害などが予想される。本講座では、土佐における読書会の実施事例紹介し、自然災害に備えるための基本的な考え方や具体的な防災対策を紹介する。
	20:30~20:45	開 講 式 (修了証書授与)

芸西村



土佐町



大豊町



梶原町



自治体名	講座名	定員	受講者
芸西村	子どもの視点からの子育て	30	44
	施設園芸における省エネルギー対策の現状 —複合エコ環境制御技術開発の取り組み—	30	34
	ライフスタイルを見直して病気を予防しよう！	30	37
	地域資源で村を元気に！	30	24
	お酒に飲まれずに飲むための基礎知識	30	14
小計 5 講座 (参加率：102%)		150	153
土佐町	麴を糘と書き、麴菌を国菌と呼ぶ、日本人の食と心を醸した、 暮らしの知恵と歴史	30	21
	健康長寿をおくるための秘訣 ～ロコモ体操や百歳体操を実践して元気で長生きしよう～	30	18
	地域づくりは人づくり！～島根県海士町の取組みを参考に～	30	28
	内蒙古大草原の生態環境と人々の暮らし	30	21
	人の中で人は育つ—子育て・教育についてのヒント—	30	26
小計 5 講座 (参加率：76%)		150	114
大豊町	高知県における再生可能エネルギーの未来	30	16
	元親の名字「長宗我部」の再検討	30	22
	シルクロード 8 か国の市場経済化と人々の暮らし	30	20
	発達段階に応じたスポーツ活動を考える	30	17
	地域づくりは人づくり！～島根県海士町の取組みを参考に～	30	13
小計 5 講座 (参加率：59%)		150	88
梶原町	元親の名字「長宗我部」の再検討	30	29
	「地域再生・活性化」と協働—域学連携による地域協働を中心に—	30	19
	肥満とメタボリックシンドローム	30	22
	“オレ流” 体験的読書論～つながる ひろがる 読書会～	30	17
	自然災害に備える	30	21
小計 5 講座 (参加率：72%)		150	108
合計 20 講座 (参加率：77%)		600	463

※参考：昨年度の受講者数・受講率：531名・76%

#### 4) オープン・クラス

本学では、学生向けの授業を一般市民にも公開し、生涯学習に対する社会的要請に応えるとともに、地域社会と大学との連携を深めることを目的としている。オープン・クラスとは、一般の学生とともに受講するコースで、演習・実習を除く、全ての講義形式の講座を開放している。基本的に、1講座の受講生は3名に限定している。授業を一般市民に開放してはいるが、講義の内容を一般向けに考慮することは行っていない。オープン・クラスの受講にあたっては、受講生として登録している。

授業はあくまでも本学の学生を対象にしたものであるため、授業内容が希望に沿うものであるかを試験期間（通常第1回目の講義）を通じて申込者が判断する。その上で、担当教員の承認を得て受講を認めている。

##### オープン・クラス（1学期）

受付期間：平成25年3月18日（月）～平成25年3月29日（金）

開講期間：平成25年4月9日（火）～平成25年8月2日（金）

開講講座数：41講座（共通教育13講座、専門教育28講座）受講者数：112名

##### 【共通教育】

授業科目	学部	定員	受講者数
憲法を学ぶ	人文学部	3名	2名
福島原発事故を考える	人文学部	3名	6名
倫理を考える	人文学部	3名	3名
心理学を学ぶ	人文学部	3名	7名
核時代の倫理	人文学部	3名	2名
リラクセーションの哲学	教育学部	3名	2名
芸術文化概論	教育学部	3名	5名
西洋経済史概論	教育学部	3名	5名
スポーツ科学実技（フィットネス）	教育学部	3名	4名
歴史を考える	教育学部	3名	9名
確率・統計学概論	理学部	3名	1名
フードサイエンスの世界	農学部	3名	4名
法学入門	人文学部	広報科目以外	2名

##### 【専門教育】

授業科目	学部	定員	受講者数
環境文化論	人文学部	3名	1名
経営学	人文学部	3名	1名
考古学概論Ⅰ	人文学部	3名	4名
簿記原理Ⅰ	人文学部	3名	1名
現代アメリカ社会文化論	人文学部	3名	1名
発達障害等の理解と教育	教育学部	3名	3名
被服学概論	教育学部	3名	2名
専門演習Ⅰ	教育学部	3名	2名
英語学特講	教育学部	3名	6名
ダンス	教育学部	3名	2名
言語文化論	教育学部	3名	3名
国文学概説	教育学部	3名	3名
東洋史特講	教育学部	3名	5名
哲学演習	教育学部	3名	2名
倫理学特講	教育学部	3名	2名

日本史特講	教育学部	3名	8名
形態形成学	理学部	3名	1名
食品化学	農学部	3名	1名
蔬菜園芸学	農学部	3名	1名
熱帯農業論	農学部	3名	1名
栽培学	農学部	3名	1名
水族環境学	農学部	3名	1名
水資源学	農学部	3名	1名
歯科口腔外科学	医学部	3名	1名
経済法Ⅱ	人文学部	広報科目以外	2名
ドイツ語オーラルコミュニケーション上級	人文学部	広報科目以外	1名
音楽史Ⅰ	教育学部	広報科目以外	1名
音楽Ⅱ	教育学部	広報科目以外	2名

※参考：昨年度の開講講座数：42 講座（共通教育 16 講座、専門教育 26 講座）、昨年度の受講者数：84 名

オープン・クラス（2学期）

受付期間：平成25年9月9日（月）～平成25年9月20日（金）

開講期間：平成25年10月2日（水）～平成26年2月7日（金）

開講講座数：43 講座（共通教育 22 講座、専門教育 21 講座）受講者数：87 名

【共通教育】

授業科目	学部	定員	受講者数
もしも、古代の中国で暮らしたら	人文学部	3名	5名
文化人類学入門	人文学部	3名	3名
憲法を学ぶ	人文学部	3名	1名
対人コミュニケーション論を学ぶ	人文学部	3名	3名
思想文化研究の基礎	人文学部	3名	1名
歴史を考える	人文学部	3名	12名
公共経済概説	人文学部	3名	1名
書道入門	教育学部	3名	3名
哲学を学ぶ	教育学部	3名	1名
リラクセーションの哲学	教育学部	3名	1名
自然科学の歴史	理学部	3名	1名
地球と宇宙	理学部	3名	1名
生物学概論Ⅱ	理学部	3名	1名
微積分学概論BⅡ	理学部	3名	1名
魚と食と健康	農学部	3名	2名
流れと波の災害	農学部	3名	1名
ライフサイエンスの世界	農学部	3名	1名
災害と生きる	農学部	3名	2名
森林と地球環境	農学部	3名	1名
非営利法人経営論入門	評価改革機構	3名	1名
心理学を学ぶ	人文学部	広報科目以外	1名
消費者問題と法	人文学部	広報科目以外	3名

## 【専門教育】

授業科目	学部	定員	受講者数
ラテンアメリカ経済社会論	人文学部	3名	2名
言語文法論Ⅲ	人文学部	3名	1名
比較日米英文化論	人文学部	3名	1名
財政学	人文学部	3名	2名
アジア文化史Ⅲ	人文学部	3名	3名
専門演習Ⅱ	教育学部	3名	2名
英語学基礎演習	教育学部	3名	4名
国文学史	教育学部	3名	1名
日本史各論	教育学部	3名	6名
東洋史演習	教育学部	3名	1名
哲学特講	教育学部	3名	1名
災害科学	理学部	3名	3名
熱帯生物環境化学	農学部	3名	1名
養液栽培学	農学部		1名
熱帯・特用作物学	農学部	3名	1名
臨床薬理学	医学部	3名	1名
統合医学総論 耳鼻咽喉科学	医学部	3名	1名
日本語学概論Ⅱ	人文学部	広報科目以外	1名
考古学Ⅲ	人文学部	広報科目以外	1名
心理学概論Ⅱ	人文学部	広報科目以外	3名
身体表現論	教育学部	広報科目以外	3名

※参考：昨年度の開講講座数：38 講座（共通教育 16 講座、専門教育 22 講座）、昨年度の受講者数：69 名

### 5) 高大連携事業

地域連携・再生部門では、「サイエンス・パートナーシップ・プログラム (SPP)」(※ 1) 及び「スーパー・サイエンス・ハイスクール (SSH)」(※ 2) 等に係る高大連携や大学訪問への対応を行っている。平成 25 年度においては、以下のとおり実施した。

(※ 1) サイエンス・パートナーシップ・プログラム (SPP)

学校 (小学校、中学校、高等学校等) と大学・科学館などとの連携による、科学技術、理科、数学に関する観察、実験、実習などの体験的・問題解決的な学習活動の実施経費に対して、(独) 科学技術振興機構が支援を行う事業

(※ 2) スーパー・サイエンス・ハイスクール (SSH)

科学技術、理科、数学教育を重点的に行う高等学校をスーパー・サイエンス・ハイスクール (SSH) として指定し、高等学校及び中高一貫教育校における理科・数学に重点を置いたカリキュラムの開発、大学や研究機関等との効果的な連携方策についての研究を推進し、将来有為な科学技術系人材の育成に資するための (独) 科学技術振興機構が行う事業

#### 高知大学による講座型学習活動に関する高大連携事業

SPP 採択事業 (高知大学)

「身近な発想から広がる数学の世界」(理学部)

#### 高知大学による合宿型学習活動に関する高大連携事業

サマーサイエンスキャンプ採択事業

「農楽体験～自然を知る、食を知る、生物を知る～」(平成 25 年 8 月 6～8 日)

高知県内外高等学校等参加者 (修了者) : 15 名

「海洋試料から探る地球環境～海洋コアと遺伝子資源～」(平成 25 年 8 月 19～21 日)

高知県内外高等学校等参加者 (修了者) : 18 名

#### 高等学校の依頼に応じて実施した出前授業 (大学教員派遣) や大学訪問の実績

① 出前授業

月	派遣教員数	内訳
25 年 4 月	0	
5 月	0	
6 月	3	高知南高等学校 (6/13、6/20、6/25)
7 月	1	高知南高等学校 (7/11)
8 月	0	(サマーサイエンスキャンプ (8/6～8/8)) (サマーサイエンスキャンプ (8/19～8/21))
9 月	0	
10 月	4	高知小津高等学校 (10/18)
11 月	4	高知小津高等学校 (11/21) 高知南高等学校 (11/27)
12 月	9	高知小津高等学校 (12/12、12/14、12/16、12/18～12/20、12/24)
26 年 1 月	0	
2 月	1	高知小津高等学校 (2/18)
3 月	0	
合計	22	【対前年 9 人増】

(参考 : 平成 24 年度実績 13 人)

## ②大学訪問

月	件数	内訳
25年4月	0	
5月	0	
6月	2	高知高等学校(6/10)、春野高等学校(6/21)
7月	1	室戸高等学校(7/12)
8月	1	徳島県立小松島高等学校(8/7)
9月	0	
10月	3	宿毛高等学校(10/3)、香川県立琴平高等学校(10/22)、嶺北高等学校(10/31)
11月	1	高知追手前高等学校(11/5)
12月	1	高知県教育委員会【アグリウォッチング】(12/14)
26年1月	0	
2月	0	
3月	0	
合計	9	【対前年△6件】

(参考：平成24年度実績 15件)

## 特別対談2 /

## ぼくらのまちに大学が来た



## 進行役

地域連携推進センター  
域学連携推進部門長 特任講師

吉用 武史



UBC高知大学地域コーディネーター  
特任講師／安芸地域

赤池 慎吾



UBC高知大学地域コーディネーター  
特任講師／幡多地域

岡村 健志



地域協働部門設置準備委員会  
委員長

上田 健作



UBC高知大学地域コーディネーター  
特任助教／高知市地域

大崎 優



UBC高知大学地域コーディネーター  
特任助教／嶺北地域

梶 英樹

### UBCは地域の仲間になりつつあります。

#### 吉用

COC 事業として平成 25 年度から始まった KICS。その使命と期待を担う UBC(高知大学地域コーディネーター)の皆さんです。高知大学のキャンパスの中にいるのではなく、先陣を切って地域に入り込み、その地域に常駐しながら活動していただく。この点がこれまでの大学にはなかった新しい取り組みです。皆さん、それぞれ独自の専門領域を持って地域コーディネーターとしての職務に挑んで貰っています。

#### 赤池

私は静岡県出身です。東京大学大学院では、青森県の森の歴史を研究していました。研究活動を通じて、自分の研究対象として地域を見るだけではなく、自分でも地域の人の役に立てるような研究者になれないかなと思うようになりました。博士課程を終えた後に島根県中山間地域研究センターに所属し、そこでは地域の人たちと一緒に地域づくりをサポートするという仕事をしてきました。その中で大学院時代にはなかったような地域の人たちと一緒に地域づくりができていくという充実感と、一方でやっぱり専門性を活かしたいという思いもありました。高知大

学地域コーディネーターの公募を聞き、があって「これだ!」と思い応募しました。

#### 大崎

私は高知市の出身で、高知大学から大学院へと長い間在籍していました。大学では地域協働のようなことを先生の下でやっていくなかで、やっぱり高知県のことが好きなので、高知県を何とかしたいなあと考えていました。専門領域としてずっと地域協働のようなことをやって来ましたが、また経済分析も私の専門ですので、これから経済分析と地域協働をどう結びつけていくかというのが UBC としての私のこれからの課題であり、目標です。

#### 岡村

私も高知市の出身です。高知大学農学部を卒業後、千葉大学の大学院で環境計画を勉強していました。東京と高知のシンクタンクで国の政策の研究などもやっていましたが、10年ほど前に高知に帰り、高知工科大学の助教を務め、道路交通や地域情報化の課題、黒潮町の缶詰工場の設立など、さまざまなプロジェクトに取り組んできました。高知大学の UBC に移っても、黒潮町のプロジェクトにはそのまま関わっています。

**梶**

私は大阪府出身です。このUBCに任命されて高知にやってきました。前職は国際NGOで企業のファンドレーシングの仕事をやっていました。関西大学法学部を卒業後、大阪府庁の職員として保健医療福祉の仕事をしていましたが、その仕事の中で行政だけではなく、NPOや企業、さまざまなスティックホルダーが協働して地域の問題、あるいは国際問題を解決していこうという協働の枠組みに関心がありまして、大阪府庁を退職し、イギリスのパーミンガム大学の大学院に留学しました。そこでまさにそういう協働、パートナーシップとかいったことの取り組みをいかにマネジメントしていくかということに専攻しまして、その後、日本の国際NGOで企業の社会貢献活動を推進していく仕事をしてきたというわけです。UBCとしてこれまでのキャリアを生かせたらと思っています。

**吉用**

赤池さん大崎さんは3月から、梶さんと岡村さんは6月から地域に入っておられますが、それぞれどういったところで、どのような活動を始めているのでしょうか。

**赤池**

私の担当する安芸地域では、平成27年度に「高知家・まるごと東部博」という大きなイベントが開催されます。今年度は、体験プログラムのブラッシュアップということで高知大学に協力要請があり、大学・行政・地域と一緒に取り組んでいます。これまでに、計6回延べ60名ほどの学生が現地に行って実際に体験し、改善点を話し合う活動を行いました。初めて学生が入る地域もあり、地域の人に高知大学がどうしているのか、学生や教員ってどういうものなのかというのが少し解っていただけのかなと思っています。今後は教員の専門性を生かした経済効果の分析や、地域側の要望を学生たちの学びの場に変えていくような仕組みづくりに取り組んでいきます。

**上田**

赤池さんはもう、地域のアイドルになっているように思えますが。

**赤池**

地域性ということだと思うんですけど、これまでなかなか東部には大学が組織として関わる機会が少なかった。そういったところすごく歓迎していただいています。本当にたくさんの方から声をかけていただいている、高

知に来て飲み会が増えました(笑)

**大崎**

私は高知市地域と仁淀川流域に行っています。高知市地域にはすでにいろんな分野の先生方が入っていますので、なかなか緊密に一緒にやっていこうというふうにはなりづらいかなどは感じています。その中でも中心商店街や、日曜市などの活性化事業に関する案件を中心にやらせていただいています。また、土佐山、鏡、春野のほうからは結構お声をかけていただいている、地域の活動にも参加させていただいています。特に春野のほうは最近動きも出て来たかなというところですよ。

**吉用**

大崎さんは学生の頃から地域にどんどん入っていたという経験もあって今、この仕事をしているわけですが、地域が求める学生の力、あるいはこちらが学生を地域に送る目的が合致しない場面も感じているのではないかと。そこでコーディネーションする苦労はありますか。

**大崎**

やはり、地域の方は学生が来てくれるというのは基本的には労働力としてしか、見ていません。それが悪いかというとそうではなくて労働を通じて見られるものはあるんですが、それだけだと地域の方は労働力がきて良かったで終わってしまいます。労働力ではなくて高知大生が学びに来ているんですよということを地域の人には伝えてやっていますが、そのあたりがなかなかうまく理解していただけないというのが難しいところかなと。今後やって行きたいのは学生を受け入れていただいている先進的な地域を見てもらって、学生を受け入れるとはこういうことなんだということを理解していただく機会ができればいいかなと思っています。



## 岡村

私は幡多地域の担当ですが、高知工科大学で10年ほど地域関係のことをやっていたこともあって幡多地域ともお付き合いがありました。黒潮町の缶詰工場の立ち上げにもずっと関わっていて、現在もそのまま携わらせてもらっています。その中で私がやっているのはプロジェクトのマネジメントなどで、職員や社員の方と一緒に考えていくのが仕事です。分野的には産業振興が多くて、須崎市では産業振興計画の策定委員会の会長をやらせていただ



いただいています。昔はもうすでに皆さんが決めた課題に対峙するというか、よそ者的な感じでお付き合いすることがあった。ところが今は仲間みたいな印象。

一緒になって最初から創ろうとか、考える過程に一緒に入って行って、私も仲間の一員としての責任意識がより強くなりました。人として接するというシーンが多いですね。個人として見られているし、人として対応しているし、その延長線上に仕事があるし、大学があるしという感じです。

## 吉用

岡村さんがおっしゃった「仲間」という点。まさにCOC、UBCのコーディネーターとして担ってもらいたい役割の大きなところだと思います。今までは地域から見たら、先生は必要な時に必要なだけ来て貰ういわば「お客様」なんですよね。それで課題解決につながることはあると思うんですけど、でもやっぱり地域にいて、困ったことがあったらすぐ近くに相談してくれる仲間という存在を地域に置きたいというのが、このKICSの大きな役割だと思います。それを自ずからやっていたら皆さんには本当に頭が下がります。

### 地域に入れば入るほど地域の気持ちが分かり過ぎて 言えないことも増えてくるのが悩み

## 梶

私は7月から嶺北に常駐していますが、何かやりたい、何かやろうというふうになっている住民の方が大勢います。多くの人と話をすることで前に1つ進むことが結構あると思いますが、住民の方と話をしてみると大学が地域に対して、どのような貢献をしてくれるのか、具体的イメージが明確でないケースが多くあります。イメージしやすいのは学生が地域に来てくれる

こと。しかし大学には様々なシーズがあるのでこちらからの提案によってよりニーズにマッチしていく関わりがもっとあるなあと思います。常に顕在化しているニーズと、まだニーズとして気づいていない潜在的なニーズの2つがあるように思います。嶺北では米粉を生産していて、それを米粉麺として広く商品販売していくためにその商品のネーミングを学生の斬新なアイデアで何かネーミングに対する提案をしてくれないかというような話がありました。UBCとしてはこのニーズを大学につなげるという作業をしていて、人文学部で企業活動を専門とされている先生にこの話を持ちかけ、学生のゼミの中で1カ月間をかけて提案を作って貰いました。ネーミングに関しては今、企業の中で検討中ですが、この経験を通じてコーディネーターがどういうふうな立ち位置になってどういう役割を担っていかないといけないのかが少し分かってきましたし、常にUBCが大学のシーズというのを把握しておかないと、地域と大学をうまくマッチングはできないだろうなと思っています。

## 岡村

皆さん、もやもやとしていてまだニーズが文字になっていないことも多いですよ。それを我々を通して外部化して貰うというか、質問しながら、考えながら、より具体化していき、次への階段を作っていくのも仕事かなと思っています。

上田 大学に足を置きながら地域の仲間になる、皆さんなかなか難しいことを今されているわけですが、そこが大学派遣コーディネーターの核心部分だと思います。どういう苦労があるのか、どういう楽しさがあるのか、そこらへんを話してもらえるとUBCの本質が多くの人に伝わるような気がします。

## 赤池

これまでもフィールドワークとして常会に出席している教員や学生はいると思います。地域を何とかするために大学の教員がそこに住んで、常会に毎回出席するということは今までなかったのではないかと思います。地域への入り方としてはかなり印象が違っているんじゃないかと思います。ただ、地域に入って行けば行くほど現状がよくわかるだけに、言えなくなってくる部分もあります。そういった意味では、日常的なつながりが出来ているところに非日常的な学生や教員が来て、私が言えないことをズバッと代弁してもらえると、組織としてちゃんと日常的に顔を合わせる部分と、研究者であつたり研究組織としてちゃんと方向性

を示せる部分と2つが担保できると思います。

### 吉用

これは今まであり得なかったことだと思うんですね。地域の方に仲間意識を持って、それがゆえに言えなくなってしまうと感じられているというのは、一方でUBCを通じて地域からの大学に対する苦情がどんどん来るかもしれないと思うと怖いんですけど(笑)。

### 岡村

黒潮町との連携協議会の時にも言われました。「もう表向きの付き合いはいいから、本音でやろうや」と。そういう本音の話をしたほうが早いんですよね。

### 梶

どんどん地域に入っていくと1つの課題に対して違う意見が住民の中で出る。県や市町村の考えていることと、住民の意見が異なる場合がある。そういう場合、UBCはどちらの気持ちもわかる。これをどのように大学とつなぎ調整していくかがチャレンジになることもあります。

### 赤池

地域課題と言っても、行政が持っている地域課題と住民が持っている地域課題とは、内容や、優先順位が違ったりするので、その時にどうしようかなと思いますね。

## 県の振興監とも支援員とも違う UBCの地域に対する役割ってなんだろう。

### 吉用

このKICSは県との連携事業として実施していますが、そのあたりはいかがですか。

### 大崎

助けてもらっているのは間違いないですね。地域支援企画員は市町村に必ず1名いて県に対しても市町村に対しても全課に対して話をするワンストップ窓口。何か課題が上がって来ても、とりあえず支援員と相談しておけば、そこで情報共有ができる。地域の中でコネクションを持っているのでそれを生かして一緒に仕事をさせてもらっているのがやりやすいですよ。

### 梶

コーディネーターがいろんな人とつながりを持つこと

が大事なんですけど、今までまったくつながりがなかったところに行って、2からつながりをつくっていくのは大変です。県の企画支援員や振興監と一緒にやることで、いろんなことでつながる最初のスタートが非常にスムーズに行く。UBCの活動でいろんな方々からお話が入って来るようになる。最初のステップとして助けられることは大いにあります。

### 赤池

私も梶先生と同じで県外から来ましたので、地域のことも高知大学のことも全然知らなかった。県の支援員は、7年間の活動で培ってきた地域との信頼関係がある。これはこれから高知大学も作っていかねばいけない部分だと思います。支援員には、積極的に声をかけていただいて最初のネットワークづくり、地域の



ルールを教えてもらいながら新しい仕組みのなかに入れたのは本当に感謝しています。これがなかったらと思うと本当に怖いなあ。

### 梶

振興監と話をしていて有難いなあと思ったのは、嶺北地域全体から見た時にどういう課題があってこういう仕組みづくりが必要なんだというふうに大きな視点で見解を述べてくれる。なので嶺北地域において大学はどのような役割を果たすべきかという視点を下さるところがあります。それを聞いてどういう教員の巻き込み方、学生の巻き込み方とか、そういうことが考える視点を貰えていることが大きい。

### 赤池

安芸地域でもいろんな大学が活動している。県としては、地域全体の振興の中で大学と大学の連携をどういうふうに強化していくかということでもご苦労されているのではないかと思います。高知大学のUBCが地域と他大学、高知大学と他大学の連携を担うことで、

高知県の地域振興の新しい展開もあるのかなと思います。

#### 上 田

さきほど赤池さんが言っていた大学と大学をつなぐ役割は大切ですね。大学の UBC だからできること。振興監とも支援員とも違う UBC の地域に対する役割ってなんだろう。この間、地域に入って見て思うことはありますか？

#### 赤 池

はじめは「今更大学が出て来てどうするの？何が出来るの」と、直接的な言われ方もしました。その時、「私の後ろには高知大学があります。県は行政のスペシャリストです。大学には、教員の専門性に加え5千人の学生もいます。これまでと違ったことができるのではないかと思います」と伝えました。最初に話したように東部博の体験プログラムのブラッシュアップは、教員と学生が地域に入って新しいことができたという意味で、支援員との役割りの違いを地域の人にも行政人にも理解してもらおう機会になったなと思っています。

#### 大 崎

手詰まりになっている地域もあります。そういう地域に「新しい風を吹かす」というようなことが期待されているところもあるんですよね。大学として新しい取り組みを始めたのでよろしくお祈りしますと、入っていく。支援企画員と同じかもしれないけれど、新しく来たというところで次のステップに進めるところがあります。

#### 岡 村

県はずっと前から地域にいて、もう関係性ができている。我々がやっていることは「地域に大学が来た」という初めてのことなので、そういうところでは今は受け止めてくれているかなと。それと専門性というところは大事ではないかなあ。我々自身も教員という立場ですし、専門性があるわけですし、大学には専門分野があるわけで、その専門性がどう貢献できるかが今までとはちょっと違いが出せたらいいなあ。慣例的にやってきたものと専門的にみるとこうだというのは必ずしも同じではない。そういうところがひとつ大きなインパクトであってほしいと思っています。

今までも自分ではそういうことを実感してやってきました。それと県への感謝ですが、それは最初よりはかなり感じています。たとえばコンサルタントやメーカー、大学として関わった場合は案件組成に少なく

も3カ月から6カ月はかかるはずなんです。それが次の日から出来てしまう早さ。これは高知県がやってくれているところですね。飲み会もそうですね。県がセッティングしてくれているんですね。有難いですね(笑)

### 学生たちの成功体験もコーディネートしていきたい

#### 吉 用

学生たちはどうですか

#### 赤 池

素直な子が多いと思います。特に縁結び隊に参加する学生は地域に対してすごくきれいな言葉を選ぶ。まるでテレビのコメンテーターみたいに。もっと自分が思っている感情や感じたことを自分のことばで伝えられるようになると、地域と学生の心理的距離が近づくのではと思います。

#### 梶

地域がイメージする学生像とのギャップを感じることがあります。時には学生をコンサルタントのように期待されることもあります。学生はまだ社会について学んでいる立場でもあり、学生からのアイデアは参考のひとつとして考えていただければと伝えることもあります。

#### 上 田

特に高知の中山間は「学生は魔法の杖」だと思っている。英才が揃っていてばーんと答えを出してくれると思っている。若いんだからという理由だけで、我々が考えもつかないようなアイデアが出て来るだろうと思われることがありますね。

#### 赤 池

学生が突拍子もない意見が、そのまま受け入れてもらうはいかない。そこにコーディネーターや県、行政が入らないと、意見を言って終わってしまう場合もあります。学生にとっては自分が言ったことが、地域の中のどこかの仕組みの一つになっていたら、そんな嬉しいことはありません。そういう成功体験を作ってあげたいと思う一方で、まだまだ足りないところがあるので、そこはつながりを継続して行く中で、できていくのかなとは思いますが。それは1回でぱっと出るものではない。だから「地域協働学部」の実習先には期待しています。安芸地域にはないのでやってほしいなと思いますけど。

## 上 田

地域協働学部と一緒に仕事をすると苦勞を背負い込むよ(笑)

## 梶

学生が地域に入って来るということは、地域にとってはすごく刺激になっていて、関わったことで住民の方が「こんなこともやってみては」みたいな前向きな話になっていくことが、すごくいいことだと思うんです。住民の方々といい関係になったら地域も学生も変わっていくというのは、あると思います。

## 岡 村



でも学生さんは自分の役割をようわかってるんじゃないのかなと思うことがありますね。縁結び隊とかで行った時に身構えている。自分はこうしないとイケないなど。この前もあるイベントがあって地域の人々が作ってくれたカレーをおかわりしたのは私と教員の3人だけ。学生が喜んで食べることで地域の人が喜ぶからと彼らに言うんですけどね。

## 大 崎

それ、よくわかります。実感しています。

## 上 田

そうですね。地域の人から「高知大の先生は遠慮せん」とよく言われます(笑)。学生は、いい子を決め込んでいる。それをやめろ、もっと素直になれと言うんだけど。他人のメシがうまく食えるように学生を育てないと、と思います。

## 吉 用

先生が一番素直ということですね(笑)

## UBCは大学へのニーズ、愚痴も聞いています

## 大 崎

意外にと言うと失礼なんですけど、すでに地域と関係をもっている先生は多い。ただ、そこから+アルファとなるとなかなかハードルが高いのでしょうか。今やっている地域と別の地域ということになると、いやもう今の地域でやっているの、と言われることが多い。地域からあがってくる案件は同じようなものが多く、どうしても一人の先生に集中してしまうことが起こりうる。その先生がどのくらい受け入れられるのか。また、専門ではないけれど、この件だったらこの先生ができるよとか。そういう情報共有ができるよとか、地域からきた案件を組織としてさばくという仕組みがあればなというふうに思います。個人ベースで解決している感がすごく強い。

## 赤 池

私も教員には2つ伝えたいことがあります。1つは、教員が自分の専門性にこだわり過ぎるあまりに地域との付き合い方や活動が狭くなっている部分があるように思います。コーディネーターには、地域と教員さまざまな接点を提案していくことを求められています。もう一つは、地域ニーズは、漠然としていて地域づくりと一緒にしてほしいとか、地域の農業を考えてほしいといったものが多いのです。

## 梶

地域の中で顕在化しているニーズや漠然としたニーズがある一方、大学の先生の専門領域がはっきりしているものがあって、その間をつなげるためにUBCと地域の方々とは一緒に考え話し合うプロセスが大切だなと思います。その上で、テーマに関連する教員をつなげて、UBC、地域の方がと一緒に悩み、考え、実行していくプロセスや仕組みづくりを一緒に創り上げていく。地域の方々には課題解決のための実践を求めている部分が多いので、そのようなプロジェクトに企画から関わって実行、評価という流れをつくっていったらと思っています。

## 上 田

そうなることがKICSの目標だと思います。要するにぼんやりした課題と一緒に考えてほしいというニーズが一番の地域ニーズなのではないでしょうか。皆さんには、現場に暮らしている者として地域の声を大学の言葉に翻訳して伝えて欲しいと思います。



### 吉用

UBC は逃げられないですからね。それに地域の人たちが思う「教授」というイメージがあります。びっくりするような作られた偶像があります。これを変えるようなことをぜひ。

### 上田

そうです、地域の方は大学の先生を「万能の専門家」だと思っている。だけど大学の先生自身はそうは思っていない。この偶像と実態のギャップを埋める役割を期待しています。

### 吉用

それぞれの UBC が地域での課題も持ちつつ、大学に対する悩みも抱えつつ、非常に苦労されているところかなと思います。ただ高知大学としてはこの KICS に非常に重きを置いています。この事業を文科省からの補助がある 5 年間だけで終えるべきものではない、今後も継続してやっていきたいとなった時に、ではどうやってと問われてくるとは思いますけれど、そこに関しては今後の検討ということになるんですけど、当然のことながら K I C S の機能である「UBC が地域にいる」「大学としての窓口が地域にある」ということに関しては最低限維持していきたい。できれば現状維持で残すのは面白くない、発展したかたちで残していけたらなお面白いなど。また U B C 7 名体制も考えていきたい。そのためにも 4 人の U B C の皆さんには先駆けとして頑張ってもらいたいと思います。

# 産学官民連携推進部門

---

Joint Research and Development Section(JRDS)

## 活動報告

topics1 高知大学と企業、研究機関等との連携事業

topics2 イノベーション・ジャパン、アグリビジネス創出フェア等の展示会へ出展

topics3 シンポジウム、フォーラム等

## 産学官民連携件数等

平成 25 年度 民間企業等との共同研究一覧

平成 25 年度 民間企業等との受託研究一覧

## 活動報告

平成  
25年

4月8日	土佐経済同友会企画部会（四銀キャピタル）
4月10日	『土佐まるごと社中（TMS）』定例会 中小企業海外展開支援セミナー（高知県立大学永国寺キャンパス）
4月12日	『土佐まるごと社中（TMS）』KNS世話人会（大阪メビック扇町）
4月19日	農業創造セミナー開催等委託業務プロポーザル審査委員会（高知県庁）
5月7日	平成25年度高知県地球温暖化防止県民会議総会（高知会館）
5月8日	『土佐まるごと社中（TMS）』世話人会 第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会 BIO tech 2013 アカデミックフォーラム （東京ビッグサイト）（10日まで）（出展）
5月9日	四国サイズの研究プラットフォーム実務者会議（高松市）
5月10日	平成25年度土佐FBCⅡ開講式（高知大学）
5月26日	NPO法人食と健康を学ぶ会 第7回講演会（高知市文化プラザかるぼーと）
5月28日	研究開発セミナー（農学部）
5月29日	産学官連携会議食品部会（工技センター）
6月12日	『土佐まるごと社中（TMS）』定例会
6月17日	土佐経済同友会2013年度第1回定例会（ホテル日航高知）
6月19日	産学連携学会第11回大会（岩手大会）（岩手県盛岡市）（21日まで）
6月21日	四国地区五大学新技術説明会（JST東京本部別館ホール）
6月26日	『土佐まるごと社中（TMS）』 第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会
6月28日	第4回化粧品開発 アカデミックフォーラム（東京ビッグサイト）
7月10日	高知CST養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（株トミナガ） 『土佐まるごと社中（TMS）』世話人会
7月18日	中国・四国地区地域共同研究センター長会議（岡山大学）（19日まで）
7月19日	高知CST養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（兼松エンジニアリング株）
7月24日	第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会
8月5日	四国サイズの研究プラットフォーム第4回WG検討会（高松市）
8月10日	KNS第42回定例会 in さかい（堺市産業振興センター）
8月12日	土佐FBCジェトロ高知大学グローバル人材育成事業（香港フードEXPO2013） （19日まで）（出展）（香港コンベンション&エキジビションセンター）
8月14日	『土佐まるごと社中（TMS）』定例会
8月22日	土佐FBC第8回アグリフードEXPO東京2013（23日まで）（出展） （東京ビッグサイト）
8月27日	第25回国立大学共同研究センター専任教員会議（横浜国立大学）（28日まで）
8月28日	第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会
8月29日	イノベーション・ジャパン2013（東京ビッグサイト）（30日まで）（出展）
9月4日	高知CST養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（高知県工業技術センター） 四万十町行政評価審査委員会
9月11日	高知CST養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（ニッポン高度紙工業株） 『土佐まるごと社中（TMS）』世話人会 第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会
9月12日	産学官連携会議（産業振興センター）
9月13日	国立情報学研究所新技術説明会（JST東京本部別館ホール）

9月25日	第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会
9月26日	他産業連携委員会（高知県工業技術センター）
10月3日	第3回おた研究・開発フェア（大田区産業プラザPiO）（4日まで）（出展） 第9回 新事業創出全国フォーラム in Kochi（高知県民文化ホール）
10月4日	高知 CST 養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（ひまわり乳業㈱）
10月9日	高知 CST 養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（菊水酒造㈱） 第7回産学官民コミュニティ全国大会実行委員会
10月10日	高知大学&高知工科大学医工連携交流会（工科大）
10月19日	第7回産学官民コミュニティ全国大会&TMS発足1周年記念定例会（高知県立大学） 『土佐まるごと社中（TMS）』定例会
10月21日	土佐 FBC II 幡多教室開講（四万十市）
10月23日	アグリビジネス創出フェア（東京ビッグサイト）（25日まで）（出展）
10月31日	第25回国立大学法人共同研究センター長等会議（鹿児島大学）（11月1日まで）
11月3日	高知大学物部キャンパス一日公開（物部キャンパス）（土佐 FBC 出展）
11月6日	四万十町行政評価審査委員会
11月8日	平成25年度地域再生人材創出拠点の形成シンポジウム「地域再生と地（知）の拠点としての大学への期待」（東京）（出展） 高知 CST 養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（司牡丹酒造㈱） 土佐 FBC レストラン開店（松葉川温泉）
11月9日	土佐経済同友会 高知 GKH ティータイムミーティング 2013（三翠園）
11月12日	高知 CST 養成プログラム「先端研究を探るⅠ・Ⅱ」（澁谷食品㈱）
11月13日	『土佐まるごと社中（TMS）』世話人会
11月21日	ものづくり総合技術展 & INAP2013 アジアフェア （高知ちばさんセンター）（23日まで）（出展） 土佐経済同友会 産学官民連携推進委員会（旭ロイヤル）
11月23日	食と健康を学ぶ会 第8回講演会（高知市文化プラザかるぽーと） 「在宅栄養ケア推進事業」事業説明会（総合あんしんセンター）
11月25日	高知エコ産業大賞実行委員会（産業振興センター）
11月26日	全国イノベーションコーディネータフォーラム（滋賀県立県民交流センター）（27日まで）
11月29日	高知県 新エネルギー部会（産業振興センター）
12月2日	四国サイズの研究プラットフォーム第5回 WG 検討会（高松市）
12月3日	高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）委託事業（室戸市役所訪問）
12月4日	高知県 産学官連携会議食品部会（工技センター）
12月8日	土佐 FBC II 幡多教室修了式（四万十市）
12月9日	土佐経済同友会 企画部会（四国総合ビル）
12月10日	高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）委託事業（医学部訪問）
12月11日	高知県工業会 他産業連携委員会 『土佐まるごと社中（TMS）』定例会
12月14日	KNS 第43回定例会 & 第13回 INS in 関西 （アジア太平洋トレードセンター / さんふらわあ船内）
12月19日	土佐経済同友会 産学官民連携推進委員会（旭ロイヤル）
12月25日	高知県 産学官連携会議
12月26日	高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）委託事業（倫理委員会）

平成  
26年

1月8日	『土佐まるごと社中（TMS）』世話人会 高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）委託事業 （高知海洋深層水企業クラブ竹中会長訪問）
1月23日	高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）委託事業 （説明会及びヘリコバクター・ピロリの尿素呼気テスト）（室戸保健福祉センター）
1月24日	土佐経済同友会 産学官民連携推進委員会（旭ロイヤル） 高知県工業会 講演会・賀詞交歓会（旭ロイヤル）
2月3日	土佐経済同友会 通常総会（三翠園）
2月5日	横浜全国産学広域連携推進会議（パシフィコ横浜）
2月5日	テクニカルショウヨコハマ 2014（パシフィコ横浜）（7日まで）（出展）
2月12日	『土佐まるごと社中（TMS）』定例会 0→1（ゼロワン）高知ブースター
2月14日	高知県工業会 他産業連携委員会（県工業技術センター）
2月15日	高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援） 委託事業（1ヶ月間の室戸海洋深層水もしくはミネラルウォーターの飲用）（3月16日まで）
2月20日	土佐経済同友会 産学官民連携推進委員会 土佐 FBC アグリフード EXPO 大阪 2014（ATC アジア太平洋トレードセンター）（21日まで）（出展）
2月24日	四国サイズの研究プラットフォーム 歩き遍路（27日まで）
2月28日	第1回四万十町行政改革推進委員会及び四万十町行政評価審査委員会（大正公民館）
3月6日	新技術事業化研究会（高知工業技術センター）
3月10日	高知県 産学官連携会議食品部会
3月12日	『土佐まるごと社中（TMS）』世話人会
3月14日	平成25年度土佐 FBC II 修了式及び成果発表会（高知城ホール）
3月15日	『土佐まるごと社中（TMS）』高知人文社会学会シンポジウム（高知大学）
3月17日	高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）委託事業 （ヘリコバクター・ピロリの尿素呼気テスト）（室戸保健福祉センター）
3月18日	日中大学フェア&フォーラム in CHINA 2014（上海コース）（24日まで）

## topics 1 高知大学と企業、研究機関等との連携事業

### 1. 産学官連携プラットフォーム「土佐まるごと社中（TMS）」

（土佐まるごと社中（TMS）とは）

土佐に『志』の有る個人が集う『場』があり、そこに集った個人が意気投合する『仲間』を創って『情熱』を燃やす『土佐まるごと社中（TMS）』は、土佐における、そんな、産学官連携の拠点としての『サロン』を目指しています。また、地域の自立のために重要な産学官民の有機的なネットワークを形成するため、広範な交流を図り、土佐の科学技術と産業の振興を図るとともに地域活性化に寄与することを目的としています。

### 第7回産学官民コミュニティ全国大会& TMS 発足1周年記念定例会

日時 平成25年10月19日（土）13:00～19:30

開催場所：高知県立大学永国寺キャンパス 参加者数 200名

交流会場：高知城ホール 参加者数 140名



#### ※実行委員会

- 平成25年5月8日（水）  
第2回 実行委員会（高知県立大学）18:00～
- 平成25年6月26日（水）  
第3回 実行委員会（はりまや天）18:00～
- 平成25年7月24日（水）  
第4回 実行委員会（はりまや天）18:00～
- 平成25年8月28日（水）  
第5回 実行委員会（高知県立大学）18:00～
- 平成25年9月11日（水）  
第6回 実行委員会（高知県立大学）18:00～
- 平成25年9月25日（水）  
第7回 実行委員会（高知県立大学）18:00～
- 平成25年11月13日（水）  
第8回 実行委員会（高知県立大学）18:00～（TMS 世話人会合同開催）

## 定例会（偶数月第2水曜日 18：00～） 5回開催（講演会等の実施）

- 平成25年4月10日（水）
  - 第5回 定例会（高知県立大学永国寺キャンパス）17：00～
  - 中小企業海外展開支援セミナー
  - 講師：新納 宏（高知大学国際・地域連携センター特任教授）
  - 新井 浩（JICA 産業開発公共政策部 兼 企画部中小企業等海外展開支援統括室参事役）
- 平成25年6月12日（水）
  - 第6回 定例会（高知城ホール）18：00～
  - 参加者全員による1分トーク（活動の紹介、パートナー探し、イベント案内など）
- 平成25年8月14日（水）
  - 第7回 定例会（高知城ホール）18：00～
  - ・TMSに集う仲間をもっと深く知ろう！！（3～4名のグループ（家族）に分かれ話し合い）
  - ・産官学民連携の可能性を語ろう！！（同上）
- 平成25年12月11日（水）
  - 第8回 定例会（高知県立大学）18：00～
  - 土佐まるごと社中（TMS）研究会に関する事例発表（テーマ別発表、意見交換）
- 平成26年2月12日（水）
  - 第9回 定例会（0→1（ゼロワン）高知ブースター）18：00～
  - 「ちょい飲み討論！どう活かす？永国寺キャンパス（仮称）産学官民連携センター」



## 世話人会（奇数月第2水曜日 18：00～）

6回開催（土佐まるごと社中の運営に関する事）

## 研究会の設置

- 学生と社会人とのコミュニケーションに関する研究会（とさなら交流会）
  - 平成25年1月19日（土）ラウンドワン他 13：30～
- 集団移住受入支援研究会
  - 第1回遠隔地相互支援委員会（和建設） 12月7日（金）13：00～16：00
  - 内容：福島県原発被災地の視察報告会（&移住希望者受入について）
  - 第2回遠隔地相互支援委員会（和建設） 12月26日（水）10：00～12：00
  - 内容：集団移住モデル事業の、受入市町村の募集と、今後の具体的な推進活動の計画について
  - 第3回遠隔地相互支援委員会（和建設） 1月23日（水）午後
  - 内容：福島県からの視察
- 新技術事業化研究会
  - 地域志向研究発表会
  - 平成26年3月6日（木）高知県工業技術センター 13：30～

## 2. 歩き遍路さんが心と体に与える影響調査

実施期間：平成26年2月24日（月）～2月27日（木）1日5～6時間歩行

データ収集内容：血液、尿、唾液、心拍変動、活動度、疲労度、ストレス状態

「お遍路さん」が心と体にもたらす効能を調べる実証実験を、3泊4日（全行程 60 km）の日程で県内7か所の札所を巡り、血液検査や活動度の検査を行いました。

本実験は（独）産業技術総合研究所と連携し、後年実施予定の一般民間人を対象とした、歩きお遍路生体影響調査研究の事前準備として、高知大学教職員及び（独）産業技術総合研究所の職員を対象とした予備試験を実施しました。



## 3. 高知県産学官連携産業創出研究推進事業

本事業は県内に新事業・新産業を創出することによって本県の産業振興につなげるため、県内の産学官が連携し、大学等の研究シーズや企業ニーズに基づく実用化研究（実験室で試作品が完成するなど、3年以内に事業化研究に移行することなどが見込まれる研究）を行うことを目的としています。

平成25年度は、代表研究機関として1件、共同研究機関として1件の応募があり、うち、代表研究機関分1件が採択されました。

また、高知県産学官連携産業創出研究推進事業（育成研究支援）に1件の応募があり、採択されました。

研究テーマ	研究機関	研究開発費 (平成25年度)
シヨウガを利用した嚥下機能改善品の開発	☆高知大学 松田医薬品株式会社製品事業部南国工場 高知県工業技術センター食品開発課 高知県立大学看護学部 徳島文理大学薬学部	18,659 千円
(育成研究支援) 海洋深層水を用いた臨床評価実施計画の作成	☆高知大学	965 千円

#### 4. 独立行政法人科学技術振興機構（JST）

A-STEP（研究成果最適展開支援プログラム）

A-STEPは、大学・公的研究機関等（以下、「大学等」）で生まれた国民経済上重要な研究成果を実用化につなげるための技術移転支援プログラムです。

##### フィージビリティスタディステージ【FS】探索タイプ

研究テーマ	研究担当者	研究開発費 (平成 25 年度)
ポイント・オブ・ケア診断キットを目指したフェージ尾部吸着タンパク質を利用するイムノクロマトグラフィー法の技術開発	基礎医学部門 内山 淳平	1,110 千円

##### フィージビリティスタディステージ【FS】顕在化タイプ

研究テーマ	研究担当者	研究開発費 (平成 25 年度)
トロンボモジュリン由来新規ペプチドによる骨髄移植後合併症の新規予防注射薬の開発	臨床医学部門 池添 隆之	325 千円

##### 起業挑戦ステージ 起業挑戦タイプ

研究テーマ	研究担当者	研究開発費 (平成 25 年度)
医薬品利用を指向したリボヌクレオチド関連化合物の大量合成技術の開発	複合領域科学部門 片岡 正典	44,151 千円

##### 産学共同促進ステージ ハイリスク挑戦タイプ（復興促進型）

研究テーマ	研究担当者	研究開発費 (平成 25 年度)
血圧制御型自動ショックパンツの開発	臨床医学部門 山崎 文靖	494 千円

## topics 2 イノベーション・ジャパン、アグリビジネス創出フェア等の展示会へ出展

平成 25 年度は、以下の展示会等に本学の研究成果を出展し、民間企業等とのマッチングを行いました。

### 【BIO tech 2013 アカデミックフォーラム】

平成25年5月8日～10日（東京ビッグサイト）

- 「海洋生物が生産する有機リン化合物の探索と合成」  
複合領域科学部門 特任講師 片岡 正典
- 寺本真紀特任講師（総合科学系 複合領域科学部門）
- Ulanova Dana 特任助教（総合科学系 複合領域科学部門）

### 【イノベーション・ジャパン 2013 -大学見本市-】

平成25年8月29日～30日 東京ビッグサイト

- 「陸上多段式タンク栽培による海藻の高効率生産技術」  
黒潮圏科学部門 平岡雅規准教授



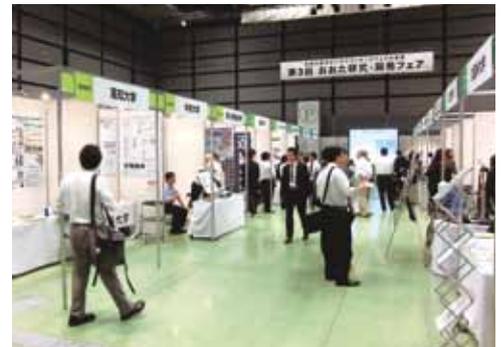
### 【国立情報学研究所新技術説明会】

平成25年9月13日 J S T 東京本部別館ホール

### 【第3回おた研究・開発フェア】

平成25年10月3日～4日 大田区産業プラザ PiO

- 「軽量建築材料や水上浄化材料のための廃ガラスの発泡中空球への  
変換技術の開発」  
複合領域科学部門 柳澤和道教授



### 【アグリビジネス創出フェア 2013】

平成 25年10月23日～25日 東京ビッグサイト

- 「酵母や乳酸菌による発酵種を用いた地域資源の高付加価値化」  
ポスター展示・プレゼンテーション 生命環境医学部門 教授 永田信治
- 「腸内細菌を用いた伴侶動物や家畜のための発酵餌料の開発」  
ポスター展示・プレゼンテーション 生命環境医学部門 教授 永田信治
- 「地域貢献と人材育成に役立つ教育研究活動」  
ポスター展示・プレゼンテーション 生命環境医学部門 教授 永田信治
- 「生物資源と環境保全をキーワードにした学際的教育プログラムと大学院への誘い」  
ポスター展示・プレゼンテーション 生命環境医学部門 教授 永田信治
- 「中小規模園芸ハウスを対象とした複合エコ環境制御技術開発の取り組み」  
ポスター展示・プレゼンテーション 農学部門 准教授 宮内樹代史
- 「親水性樹脂を用いた養液栽培用培地の開発」  
ポスター展示 農学部門 准教授 西村安代

## 【第2回ものづくり総合技術展】

平成25年11月21日～11月23日 高知ぎばさんセンター

- 「中小規模園芸施設を対象とした複合エコ環境制御技術」の開発状況の紹介  
農学部門 宮内樹代史准教授

## 【I N A P 2013 アジアフェア】

平成25年11月21日（同時開催）

- 高知大学学生サークルの展示



## 【テクニカルショウヨコハマ 2014】（第35回工業技術見本市）

平成26年2月5日～7日 パシフィコ横浜

- 「廃ガラスを水熱処理することによるリサイクル方法」  
複合領域科学部門 柳澤和道教授
- 「海藻の高効率生産技術」  
黒潮圏科学部門 平岡雅規准教授

## 【第18回「震災対策技術展」横浜 –自然災害対策技術展–】

平成26年2月6日～7日 パシフィコ横浜

- 「南海地震による津波被害軽減と浸水継続時間を短縮する対策技術の開発」  
本学と高知県及び㈱技研製作所との連携事業

## 【日中大学フェア&amp;フォーラム in CHINA】

平成26年3月19日（水）から3月23日（日）の5日間 上海コース

- 「Development of Conversion Technique from Used Glass to Porous Materials」  
複合領域科学部門 柳澤和道教授
- 「Utilization of unique microwave heating effects for biomass conversion」  
複合領域科学部門 椿 俊太郎特任助教



### topics 3 シンポジウム、フォーラム等

#### 【NPO 法人 食と健康を学ぶ会 第 7 回講演会】

日時 平成25年5月26日

場所 高知市文化プラザかるぼーと

#### 【研究開発セミナー】

平成25年5月28日 農学部

動植物の生体内に含まれるアミノ酸の一種である ALA（5-アミノレブリン酸）を大量生産することが可能となったことから、ALA を用いた医薬品、化粧品、健康食品分野、及び農業分野における研究開発及び事業化への取り組みと今後の展望についてご紹介するセミナーを開催した。

「講演内容」

- SBI ファーマ株式会社 取締役 執行役員 CTO 田中 徹 氏  
「生命の根源物質 5-アミノレブリン酸（ALA）－製造及び用途開発－」
- コスモ石油株式会社 海外事業部 ALA 開発 G 長 兼  
コスモ ALA 株式会社取締役 医薬・食品事業部長 渡辺圭太郎 氏  
「ALA のもつ植物に対する耐塩性向上効果と沙漠緑化への応用」



#### 【産学連携学会 第 11 回大会】

日時 平成25年6月19日～21日

場所 岩手県盛岡市

主催 NPO 法人産学連携学会

#### 【四国地区五大学新技術説明会】

日時 平成25年6月21日

場所 J S T 東京本部別館ホール

#### 【第 4 回化粧品開発展 アカデミックフォーラム】

日時 平成25年6月28日

場所 東京ビッグサイト

#### 【中国・四国地区地域共同研究センター長会議】

日時 平成25年7月18日～19日

場所 岡山大学

#### 【第 42 回 KNS 定例会 in さかい】

日時 平成25年8月10日

場所 堺市産業振興センター

#### 【第 25 回国立大学共同研究センター専任教員会議】

日時 平成25年8月27日～28日

場所 横浜国立大学

**【第 25 回国立大学法人共同研究センター長等会議】**

日時 平成25年10月31日～11月1日

場所 鹿児島大学

**【第 7 回産学官民コミュニティ全国大会 & TMS 発足 1 周年記念定例会】**

日時 平成25年10月19日

場所 高知県立大学

**【農林水産省と産学連携学会共催のシンポジウム ～美味しさへのイノベーション～】**

日時 平成25年10月24日

場所 東京ビッグサイト

石塚悟史副センター長がモデレーターとして登壇

**【食と健康を学ぶ会 第 8 回講演会】**

日時 平成25年11月23日

場所 高知市文化プラザかるぼーと

**【全国イノベーションコーディネータフォーラム】**

日時 平成25年11月26日～27日

場所 滋賀県立県民交流センター

**【第 43 回 KNS 定例会 in 関西】**

日時 平成25年12月14日

場所 大阪アジア太平洋トレードセンター

**【横浜全国産学広域連携推進会議】**

日時 平成26年2月5日

場所 パシフィコ横浜

**【新技術事業化研究会】**

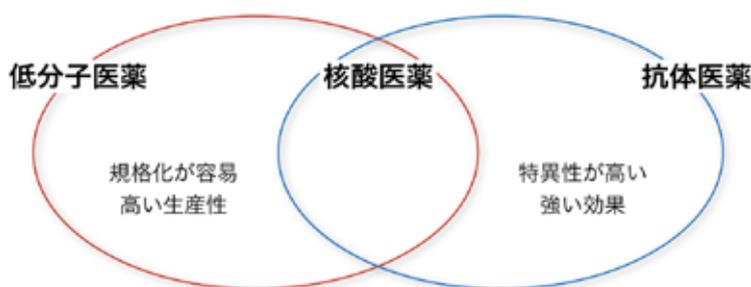
日時 平成26年3月6日

場所 高知工業技術センター

医薬品利用を指向したリボヌクレオチド関連化合物の大量合成技術の開発

科学技術振興機構受託研究：研究成果最適展開支援プログラム（A-STEP）起業挑戦タイプ  
総合科学系複合領域科学部門 片岡正典

近年、低分子を基盤とした新薬の開発は困難を極め、生体高分子を薬として利用する次世代医薬が注目されています。次世代医薬の中では、抗体を医薬品として利用する抗体医薬が、その高い効果から先行して実用化されていますが、生産性や保存の問題を残し、広く普及するに至っていません。一方、オリゴヌクレオチドを医薬として利用する核酸医薬は、抗体医薬と同様に高い効果を有しながら、開発が容易な点から大きな期待を集めています。核酸医薬はその作用機序からアンチセンス、アプタマー、siRNA、miRNA、デコイ核酸等に細分され、とくに高い効果からRNA型のアプタマーやsiRNAを中心に開発が進められています（表）。核酸医薬の適用範囲は腫瘍から脳神経疾患、感染症、炎症など多岐にわたり、シード・プランニング社による核酸医薬市場調査によると、2020年には市場が5000億円に達すると予測されています。

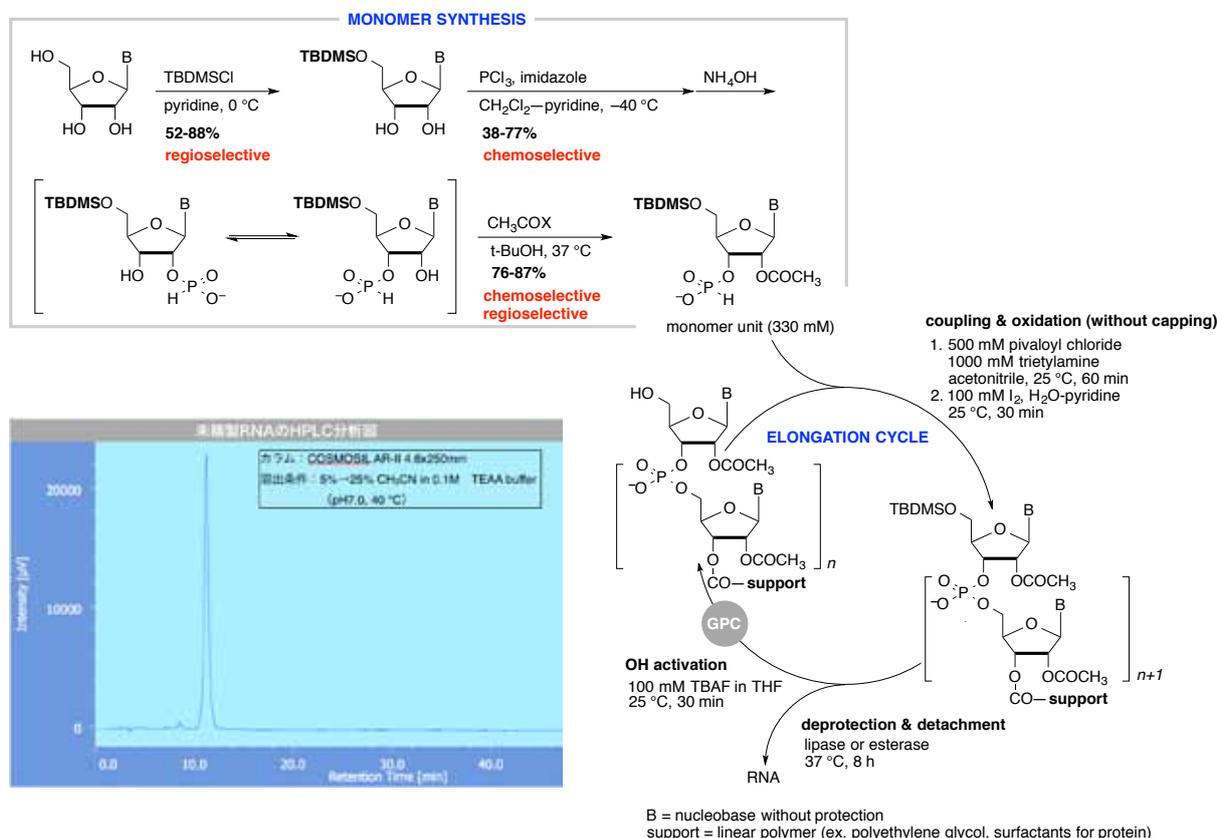


	siRNA	miRNA	アプタマー	アンチセンス	デコイ核酸
構造	二重鎖RNA (20-23量体)	一本鎖RNA (20-25量体)	一本鎖RNA (12-40量体)	一本鎖DNA (6-40量体)	二重鎖DNA (>10量体)
標的	mRNA	miRNA	タンパク質 糖鎖 2次代謝物	mRNA	転写因子
作用機序	mRNAを分解	miRNAの 機能を制御	標的に結合、 機能を阻害	mRNAに結合、 翻訳を阻害	転写因子の 機能を阻害
その他	体内のRNAiを 利用	診断薬も対象	分子進化法	核酸医薬 の始まり	

表. 核酸医薬の分類と特徴（シード・プランニング社調査資料より）

核酸医薬の大きな特長の一つが化学合成によって自由に合成できる点にあります。生物生産に依存する抗体医薬は生産コストが高く、大量製造におけるスケールメリットは期待できませんが、核酸医薬の大量製造は大きなスケールメリットが期待されます。しかし、従来の核酸医薬製造法は、少量多品種のオリゴヌクレオチド生産を目的に改良されてきた合成技術を大量合成に適用したものであり、0.5gの25量体RNAの価格は約500万円高値で受託製造されています。

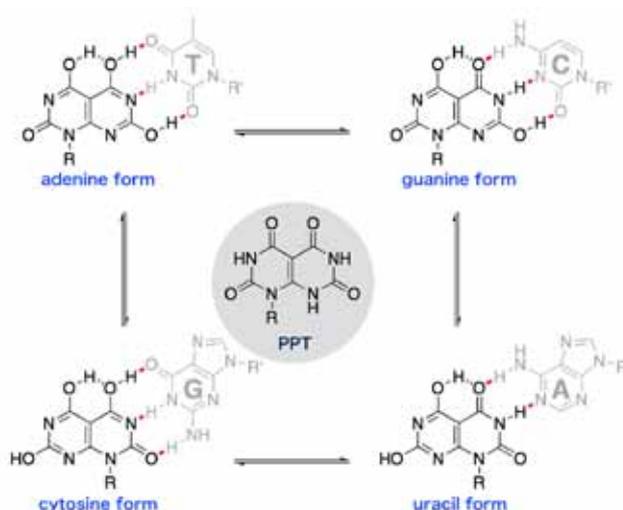
私はRNAの合成技術を一から見直し、大量製造に最適なモノマーを設計し、鎖長伸長サイクルのすべての工程について、効率化を図りました（スキーム1）。本技術は全工程において高価な化学薬品を使用せず、安全・安価な薬品のみで製造できるように設計しています。例えば、モノマー製造において新たに開拓した官能基選択的・位置選択的アセチル化工程は、特定のリパーゼを利用することで4工程以上の短縮と合成収率の向上、コストパフォーマンスの改善に大きく貢献しています。また、RNAの鎖長伸長サイクルにおいては、薬物輸送担体として利用されるポリエチレングリコール誘導体をヌクレオシドの3'末端に結合させることで、合成に係る煩雑な操作をなくし、さらに独自の酸化技術と精製技術、HPLCによる縮合工程のモニタリング等を開拓することで、高い合成効率を実現しました。得られる合成中間体（RNAの保護体）はエステル結合のみを残すので、ヒト由来エステラーゼやリパーゼを用いて簡単にRNAに誘導することができます。合成中間体を直接投与するプロドラッグ型の核酸医薬としての利用も計画しています。



スキーム1. RNA液相合成技術の概略

現在、国内のオリゴヌクレオチド受託合成企業や製薬企業との共同研究を進め、市場要請度の高い RNA を 100g スケールで合成すべく条件検討を最適化しています。また、自動合成装置化を目指して、酵素を使用しない純化学的な工程の確立と、鎖長伸長サイクルの効率化などの技術改良をおこない、本技術の実用化を目指しています。

一方で、変異性ウイルスに対する核酸医薬の開発に向けて、すべての核酸塩基と塩基対の形成が可能な人工塩基 PPT を開発しました（スキーム 2）。PPT は、対峙する塩基に呼応して自身の構造を変化させ、擬似塩基対を形成するインテリジェントな人工核酸塩基です。この特異な機能は、人工核酸として知られるペプチド核酸骨格に PPT を導入し、塩基対形成実験に供して実証しました。PPT を含むオリゴヌクレオチドが、配列を非特異的に認識して二重鎖を形成するユニバーサル核酸として機能することが明らかとなりました。PPT をリボースに導入することにも成功しましたので、医薬品候補 RNA への PPT の導入と、細胞内 RNAi 活性試験を計画しています。PPT は尿素から 3 工程で製造可能で、対応する N-アルキル尿素を用いれば、様々な誘導体へも容易に誘導できることから、様々な機能を付加した生化学ツールの開発も期待されています。



スキーム 2. PPT の作用機序

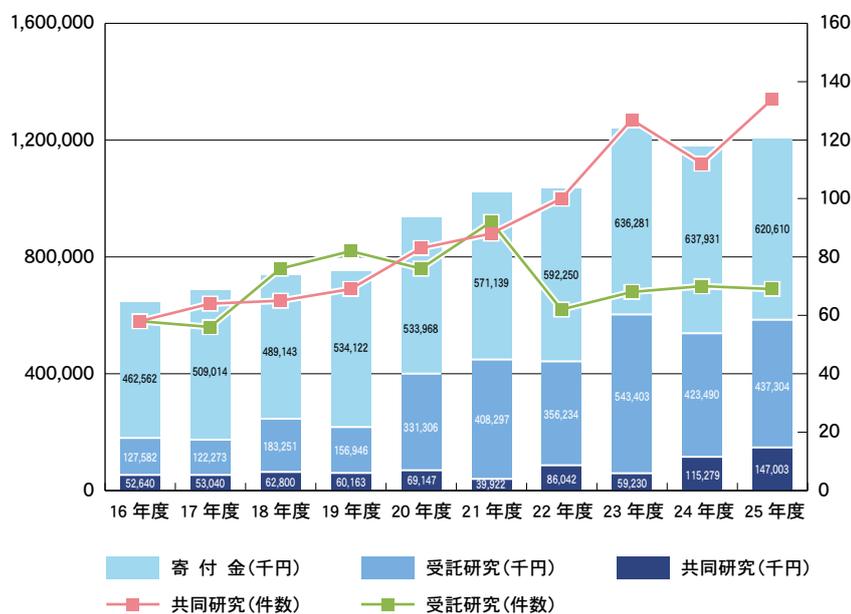
今回紹介させていただいた技術は、文部科学省テニユアトラック普及・定着事業「若手研究者自律的研究環境整備促進」イノベティブマリン研究者育成事業における研究成果の一部であり、科学技術振興機構に評価いただき実用化研究の支援を受けることになりました。両事業に対して御礼申し上げます。

## 産学官民連携件数等

単位：千円

	16年度		17年度		18年度		19年度		20年度	
	金額	件数								
共同研究	52,640	58	53,040	64	62,800	65	60,163	69	69,147	83
受託研究	127,582	58	122,273	56	183,251	76	156,946	82	331,306	76
寄付金	462,562	705	509,014	710	489,143	737	534,122	679	533,968	710

	21年度		22年度		23年度		24年度		25年度	
	金額	件数								
共同研究	39,922	88	86,042	100	59,230	127	115,279	112	147,003	134
受託研究	408,297	92	356,234	62	543,403	68	423,490	70	437,304	69
寄付金	571,139	729	592,250	731	636,281	771	637,931	741	620,610	761



### ● 諸活動

- 大学シーズと企業等ニーズとのマッチング
- 共同研究等契約支援
- 各省庁及び自治体・企業等の外部資金獲得事業
- 知的財産の創出・活用支援
- シンポジウム、講演会等
- 産学官連携関係イベント（シーズ出展等）
- 産学官連携に関する調査及び研究
- 産学官連携システム（組織化・共同体）の構築
- 地域連携事業
- 科学・技術相談
- 事業化支援
- 起業（大学発ベンチャー）支援

## 平成 25 年度 民間企業等との共同研究一覧 (134 件)

No.	研 究 題 目	大学研究者
1	海洋深層水より調整した高ミネラル飲料の継続飲用による腸内細菌叢・口腔内細菌叢および生体影響に関する研究	医学部先端医療学推進センター 名誉センター長 相良 祐輔 臨床医学部門 教 授 前田 長正
2	ソフィβ-グルカンの免疫賦活効果の作用機序の検討	看護学部門 教 授 吾妻 健
3	ソフィβ-グルカンを取り入れた食事療法の実用化の検討	看護学部門 教 授 吾妻 健 看護学部門 講 師 野村 晴香
4	機能性素材の有効利用に関する研究	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医 学 部 特任助教 渡部 義哉
5	機能性素材の安全性評価及び有効的な利用方法の検討	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医学部 特任助教 渡部 義哉
6	柚子の機能性についての研究	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医学部 特任助教 渡部 嘉哉 看護学部門 教 授 高橋 永子 看護学部門 准教授 山脇 京子 講 師 青木 早苗 助 教 寺下 憲一郎 教育学部門 教 授 原田 哲夫
7	室戸海洋深層水と黒酵母由来β-グルカンの相乗効果に関する研究	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医学部 特任助教 渡部 嘉哉
8	多糖類の経口摂取による免疫賦活効果に関する研究	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医学部 特任助教 渡部 嘉哉
9	機能性素材の効果を維持した加工食品の開発	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医学部 特任助教 渡部 嘉哉
10	黒酵母β-グルカンの経口摂取による免疫賦活効果に関する研究	看護学部門 教 授 溝渕 俊二 医学部 特任助教 渡部 嘉哉
11	HLA 分子結合性ペプチドを用いた悪性腫瘍の免疫療法の開発	基礎医学部門 教 授 宇高 恵子
12	溶解性マイクロニードル技術を利用した癌経皮ワクチン反応性 T 細胞検出法を意図した共同研究	基礎医学部門 教 授 宇高 恵子
13	肝細胞がん及び膵臓がんを標的とした免疫活性ペプチドの共同開発	基礎医学部門 教 授 宇高 恵子
14	ポイント・オブ・ケア診断キットを目指したファージ尾部吸着タンパク質を利用するイムノクロマトグラフィー法の技術開発	基礎医学部門 助 教 内山 淳平
15	5-ALA の抗肥満および抗糖尿病作用	基礎医学部門 准教授 津田 雅之 助 教 都留 英美
16	医療・介護現場のニーズに対応した移乗動作介助機器の実用化	附属病院リハビリテーション部 准教授 石田 健司
17	医療器具等の研究	附属病院 病 院 長 杉浦 哲朗 看護部長 楠瀬 伴子 特任教授 宮井 千恵

18	開放規格検体検査自動化システムの実用性に関する研究	附属病院 病院長 杉浦 哲朗 検査部 技師長 小倉 克己
19	全自動免疫測定装置を用いた臨床検査の評価研究	附属病院 病院長 杉浦 哲朗 検査部 技師長 小倉 克己 副技師長 山中 茂雄
20	検体系検査統合システム構築に関する研究	附属病院 病院長 杉浦 哲朗 検査部 技師長 小倉 克己
21	採血管準備管理システム新方法の研究	附属病院 病院長 杉浦 哲朗 検査部 技師長 小倉 克己
22	血糖測定用 POCT の運用システムの構築に関する研究	附属病院 病院長 杉浦 哲朗 検査部 技師長 小倉 克己
23	ショウガを利用した嚥下機能改善品の開発	附属病院薬剤部 教授 宮村 充彦 臨床医学部門 教授 兵頭 政光 附属病院薬剤部 薬剤師 横田 淳子 薬剤師 常風 興平 薬剤師 阿部 譲朗 薬剤師 仲井 めぐみ 薬剤師 平田 歩 薬剤師 飯塚 美知郎 薬剤師 野村 政孝 薬剤師 八木 祐助 薬剤師 船戸 裕樹
24	高知県産ショウガを利用した嚥下機能改善品の開発	附属病院薬剤部 教授 宮村 充彦
25	トロンボモジュリンの上皮増殖因子様構造を用いた血管内皮細胞保護薬の開発	臨床医学部門 講師 池添 隆之
26	トロンボモジュリン由来新規ペプチドによる骨髄移植後合併症の新規予防注射薬の開発	臨床医学部門 講師 池添 隆之
27	泌尿器癌への 5-ALA 光線力学的診断/治療に用いる装置の開発	臨床医学部門 准教授 井上 啓史
28	泌尿器癌への 5-ALA 光線力学的診断と治療効果の検討	臨床医学部門 准教授 井上 啓史
29	C 型慢性肝炎に対する PEG-IFN $\alpha$ -2a を中心とした併用療法の治療効果と HCV 遺伝子変異および鉄代謝の関係の検討	臨床医学部門 准教授 岩崎 信二
30	NASH の病態と鉄代謝に関する検討	臨床医学部門 講師 小野 正文
31	非アルコール性脂肪性肝炎血清診断マーカーの研究	臨床医学部門 教授 西原 利治
32	The role of pentraxin3 in psoriasis	臨床医学部門 教授 佐野 栄紀 助教 中島 英貴
33	乾癬治療剤の開発研究	臨床医学部門 教授 佐野 栄紀
34	マウス乾癬様皮膚炎モデルでの薬効評価	臨床医学部門 教授 佐野 栄紀 助教 高石 樹朗
35	腫瘍マーカー、ラミニン関連因子の評価研究	臨床医学部門 教授 執印 太郎 講師 鎌田 雅行

36	分子標的薬、ヨード造影剤による腎障害への 5-ALA の効果	臨床医学部門 教授 執印 太郎 准教授 井上 啓史 教授 寺田 典生 連携医学部門 教授 降幡 睦夫 基礎医学部門 准教授 津田 雅之
37	ELISA および尿検査試験紙による尿路癌の新たな検査法の開発	臨床医学部門 教授 執印 太郎
38	食品素材が健康に与える効果の確認	臨床医学部門 講師 竹内 啓晃 教授 杉浦 哲朗
39	降糖化学療法剤治療における BCAA 併用での血中アミノグラム解析	臨床医学部門 教授 花崎 和弘
40	大血管への採血アプローチによる血糖測定系の確立	臨床医学部門 教授 花崎 和弘 助教 北川 博之 附属病院 医員 宗景 匡哉 臨床医学部門 准教授 山下 幸一 助教 矢田部 智昭
41	循環動態変動に対する脈波伝播時間の評価	臨床医学部門 准教授 山下 幸一
42	歯科治療材料の生物学的毒性に対する検討	臨床医学部門 教授 山本 哲也
43	歯科治療材料の物理的・化学的・生物学的機能の臨床評価	臨床医学部門 教授 山本 哲也
44	KL-6 発現トランスジェニックマウスでの抗 TNF- $\alpha$ 投与による KL-6 値変動	臨床医学部門 教授 横山 彰仁 准教授 窪田 哲也 助教 河瀬 成穂
45	蛋白電気泳動波形を用いた検査値予測システムの研究	連携医学部門 助教 片岡 浩巳
46	データマイニング技術を用いた診療支援に関する研究	連携医学部門 助教 片岡 浩巳
47	データマイニング手法を用いた、過去のデータの有用性確認に関する研究	連携医学部門 助教 片岡 浩巳
48	吸着剤による化学物質の除去に関する研究	連携医学部門 教授 菅沼 成文 生命環境医学部門 助教 康 峪梅 連携医学部門 助教 弘田 量二
49	健康診断ソフトの開発	連携医学部門 講師 宮野 伊知郎
50	BiofangoR (温泉泥) による慢性疼痛に対する代替療法の研究開発	連携医学部門 講師 宮野 伊知郎 講師 弘田 量二
51	高齢者の健康長寿の要因に関する縦断研究	連携医学部門 教授 安田 誠史 講師 宮野 伊知郎
52	土佐湾における魚類再生産機構に関する研究	黒潮圏科学部門 教授 木下 泉
53	下北八戸沖掘削コア試料を用いた地圏と生命圏の共進化に関する共同研究	海洋コア総合研究センター センター長 徳山 英一
54	閉鎖循環飼育システムを用いたトラフグ完全陸上養殖と連携するアクアポニックスに関する研究	黒潮圏科学部門 准教授 石塚 悟史
55	生分解性抗菌ナノ粒子を不織布加工技術と融合させた医療分野への商品開発および農業水産分野への新規抗菌技術開発	黒潮圏科学部門 教授 大島 俊一郎
56	地域医療・在宅介護等に関する ICT 利活用の適用可能性に関する研究	黒潮圏科学部門 准教授 久保田 賢
57	未利用生物資源からの血糖値および脂肪制御作用を持つ物質の探索	黒潮圏科学部門 教授 富永 明

58	人工藻礁設置による褐藻類繁茂促進に関する研究	黒潮圏科学部門 准教授 平岡 雅規
59	海洋深層水スジアオノリ・タンク養殖の研究	黒潮圏科学部門 准教授 平岡 雅規
60	海洋深層水を利用したアワビと海藻の増養殖に関する研究	黒潮圏科学部門 准教授 平岡 雅規
61	安心して子育てができる地域コミュニティ形成支援ICTモデル開発のための共同研究	人文社会科学部門 准教授 遠山 茂樹
62	ミニトマトスウィーティアの純系作出	地域連携推進センター(土佐FBC) 特任准教授 吉金 優
63	バイオ新素材ポリグルタミン酸の量産化とバイオジェル吸水部材の応用研究	生命環境医学部門 教授 芦内 誠
64	馬路村における果皮成分増量技術を活用した柚子果汁品の研究開発	生命環境医学部門 准教授 柏木 丈弘
65	緑豆由来の殺虫成分の同定	生命環境医学部門 教授 金 哲史
66	農業用電解水で栽培した還元野菜の機能性の解明	生命環境医学部門 准教授 島村 智子
67	<i>Aureobasidium</i> sp. が生産する $\beta$ -1,3-1,6- グルカンの応用	生命環境医学部門 教授 永田 信治
68	県産素材を用いた発酵食品の開発	生命環境医学部門 教授 永田 信治
69	農業用電解水の機能特性の検証と機能発現メカニズムの解明	農学部門 教授 石川 勝美
70	高知県産有機小麦(夏播き小麦)を使ったオンリーワン焼酎の製造・販売	農学部門 教授 石川 勝美
71	インテリジェント性を有する紙および不織布の開発	農学部門 准教授 市浦 英明
72	衛生用紙の高機能化研究	農学部門 准教授 市浦 英明
73	斜面工事における労働災害防止のための計測機器設置方法の検討	農学部門 教授 笹原 克夫
74	モニタリングデータを用いた降雨浸透モデル定数最適化の研究	農学部門 教授 笹原 克夫
75	四国地方における深層崩壊の発生危険斜面の抽出に関する研究	農学部門 教授 笹原 克夫
76	資源循環型土エコクレイを利用する農地保全技術開発に関する共同研究	農学部門 准教授 佐藤 泰一郎
77	本格架線集材システムに対応した機械開発に向けての研究	農学部門 准教授 鈴木 保志
78	強度間伐施業等に対応した森林管理技術の開発	農学部門 教授 塚本 次郎
79	甘味料を用いた保存食品害虫防除技術の開発	農学部門 准教授 手林 慎一
80	万願寺とうがらし葉の有効利用に関する研究	農学部門 准教授 手林 慎一
81	健康食品成分を利用した保存加工食品の害虫防除技術の開発	農学部門 准教授 手林 慎一
82	「愛媛のかんきつ(みかん類)」の酸性特性を活用した酸性炭化有機肥料試作品の成分分析と病害虫に対する忌避試験に関する研究	農学部門 准教授 手林 慎一
83	酢ビ系材料を用いた農業部材の開発	農学部門 准教授 西村 安代
84	丸太打設による液状化対策の実用化研究	農学部門 准教授 原 忠
85	地盤の地震時挙動分析に関する研究	農学部門 准教授 原 忠
86	谷埋め盛土の耐震照査に関する研究	農学部門 准教授 原 忠
87	養殖魚の配合飼料に関する研究	農学部門 准教授 深田 陽久
88	安定的な養魚用飼料の開発に関する研究	農学部門 准教授 深田 陽久

89	低魚粉飼料における非必須アミノ酸の魚類成長への影響	農学部門 准教授 深田 陽久
90	面的水管理・カスケード型資源循環システムの統合評価に関する研究	農学部門 教授 藤原 拓
91	オキシデーションディッチからの亜酸化窒素の排出に関する調査研究	農学部門 教授 藤原 拓
92	機能性材料を用いた水処理技術の開発に関する研究	農学部門 教授 藤原 拓
93	下水消化汚泥の堆肥化に関する基礎研究	農学部門 教授 藤原 拓
94	革新的な低エネルギー水処理技術の開発と評価	農学部門 教授 藤原 拓
95	低エネルギー水処理技術の開発に関するパイロット実験	農学部門 教授 藤原 拓
96	生物処理機能調査に関する研究	農学部門 教授 藤原 拓
97	下水処理の最適化に関する研究	農学部門 教授 藤原 拓
98	ウコン及びカンナの栽培技術の確立	農学部門 准教授 宮崎 彰
99	RNA 大量合成法の開発	複合領域科学部門 特任講師 片岡 正典
100	RNA 液相合成用サポートタグの開発	複合領域科学部門 特任講師 片岡 正典
101	合成 RNA の機能評価システムの構築	複合領域科学部門 特任講師 片岡 正典
102	有用微細藻の大量培養を目的とした培養環境の検討	複合領域科学部門 教授 津田 正史
103	海洋深層水大規模培養による海洋性アンフィジニウム属渦鞭毛藻由来の医薬リード化合物の探索と開発	複合領域科学部門 教授 津田 正史
104	新規マイクロ波高活性化固体触媒の開発と、海藻バイオマスからのラムノース製造への応用	複合領域科学部門 特任助教 椿俊 太郎
105	水熱条件における金属粉製造に関する研究	複合領域科学部門 教授 柳澤 和道
106	水熱合成法による単結晶材料の創生に関する基礎研究	複合領域科学部門 教授 柳澤 和道
107	水熱法を利用した酸化マグネシウムの表面改質に関する研究	複合領域科学部門 教授 柳澤 和道
108	GTL を用いた新たなハウス加温法の開発	自然科学系理学部門 教授 安田 尚登
109	東部南海トラフ海域のコア試料を用いた年代推定等に関する研究	自然科学系理学部門 教授 安田 尚登
110	GTL を用いた新たなハウス加温法の開発と各種栽培品種への実証試験	自然科学系理学部門 教授 安田 尚登
111	固体触媒を用いた乳酸からのアクリル酸合成	複合領域科学部門 講師 恩田 歩武
112	アパタイト触媒を用いたアルコール類の有用化学品への転換反応	複合領域科学部門 講師 恩田 歩武
113	電子線を用いた無機-有機ハイブリッド化合物の固定化技術に関する研究	複合領域科学部門 教授 米村 俊昭
114	偏波ドップラーレーダーによる激しい気象の解析	理学部門 教授 佐々 浩司
115	TH z を用いた安心センシングセンサーの研究	理学部門 教授 西岡 孝
116	高知大学方式 3 HeGM 冷凍機の高効率化	理学部門 教授 西岡 孝
117	メカ・電子システムのハイブリッドモデル化技術の研究	理学部門 教授 村岡 道明
118	GTL を用いた新たなハウス加温法の開発とその実証試験	自然科学系理学部門 教授 安田 尚登

外 16 件

## 平成 25 年度 民間企業等との受託研究一覧 (69 件)

No.	研 究 題 目	大学研究者
1	「新型成人用 HFO 人口呼吸器の開発」および「ARDS 患者向け HFO 呼吸管理プロトコル」の開発	医学部 災害・救急医療学 特任教授 長野 修
2	ポイント・オブ・ケア診断キットを目指したファージ尾部吸着タンパク質を利用するイムノクロマトグラフィー法の技術開発	基礎医学部門 助 教 内山 淳平
3	平成 24 年度子どもの健康と環境に関する全国調査その 2 高知ユニットセンター委託業務	基礎医学部門 教 授 菅沼 成文
4	生細胞膜上の分子間相互作用を簡便に解析する新規方法の事業化検討	基礎医学部門 教 授 本家 孝一
5	高知県産ショウガを利用した嚥下機能改善品の開発	附属病院薬剤部 教 授 宮村 充彦
6	平成 25 年度高知県産学官連携産業創出研究推進事業委託業務 「ショウガを利用した嚥下機能改善品の開発」	附属病院薬剤部 教 授 宮村 充彦
7	トロンボモジュリンの上皮増殖因子様構造を用いた血管内皮細胞保護薬の開発	臨床医学部門 講 師 池添 隆之
8	トロンボモジュリン由来新規ペプチドによる骨髄移植後合併症の新規予防注射薬の開発	臨床医学部門 講 師 池添 隆之
9	医療・介護現場のニーズに対応した移乗動作介助機器の実用化	臨床医学部門 准教授 石田 健司
10	放射線科学分野にかかる学術研究動向に関する調査研究— とくに新しい放射線増感剤の研究開発動向について	臨床医学部門 教 授 小川 恭弘
11	ERISA および尿検査試験紙による尿路癌の新たな検査法の開発	臨床医学部門 教 授 執印 太郎
12	クラビット点滴静注特定使用成績調査「第 10 回抗菌薬感受性年次別推移の検討」	附属病院 病 院 長 杉浦 哲朗
13	構音嚥下障害や中枢神経系の障害を中心とした筋ジストロフィー患者さんの ADL の改善に関する研究	臨床医学部門 教 授 古谷 博和
14	自殺状況分析	連携医学部門 講 師 宮野 伊知郎
15	23-A-31 (特) 多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究 分担研究課題名「高知地域におけるコホート構築」	連携医学部門 教 授 安田 誠史
16	パーティカルサイズミックケーブル方式反射法地震探査 (VCS) と高周波音源を組合わせた接地型高解像度探査システムの開発	海洋コア総合研究センター 特任教授 徳山 英一
17	アメリカにおける乳・乳製品摂取を促進する食育プログラムの理論と方法および使用教材の研究	教育学部門 講 師 柴 英里
18	「朝食時及び夕食時 (就床時) の牛乳摂取は子どもの精神衛生と睡眠健康を増進させるか」	教育学部門 教 授 原田 哲夫
19	「リーフレット「朝牛乳で実現しよう！早寝、早起き、朝ごはんで 3 つのお得！」の教育的効果の検証」	教育学部門 教 授 原田 哲夫
20	アグリ・グリーンイノベーションを実現する生分解性抗菌ナノ粒子による農業用抗菌剤の研究開発	黒潮圏科学部門 准教授 石塚 悟史 他
21	海洋深層水を用いた臨床評価実施計画の作成	黒潮圏科学部門 准教授 石塚 悟史
22	平成 25 年度エツの産卵環境調査	黒潮圏科学部門 教 授 木下 泉
23	天然アユを守る取り組み	黒潮圏科学部門 教 授 木下 泉
24	「熱帯多島海域における沿岸生態系の多重環境変動適応策」	黒潮圏科学部門 准教授 中村 洋平
25	天然スジアオノリの生産量アップの実証実験事業	黒潮圏科学部門 准教授 平岡 雅規 特任助教 椿 俊太郎
26	実証化を目指した大島に適した高級海藻の増養殖に関する研究	黒潮圏科学部門 准教授 平岡 雅規
27	海底鉱物資源文献データ編纂・整理・解析	総合研究センター 特任教授 臼井 朗
28	平成 25 年度深海底鉱物資源基礎調査事業に係るコバルトリッチクラストの基礎研究	総合研究センター 特任教授 臼井 朗

29	平成 25 年度海陽町津波堆積物年代測定基礎調査	総合研究センター 特任教授 岡村 眞
30	大豊町振興に向けた CO2 削減野菜クルベジの認知度向上のためのキャラクターデザイン	地域協働教育学部 准教授 大槻 知史
31	新農薬実用化試験に関する研究	生命環境医学部 教授 荒川 良
32	オオバに発生する病害虫の新規防除剤を活用した総合防除体系の確立	生命環境医学部 教授 荒川 良
33	生体調節機能成分を活用した野菜生産技術の実証研究 (1) - 3 「オスモチン大量精製法の確立とナス科野菜の栽培条件、加工条件別オスモチン含有量の変動解析」	生命環境医学部 教授 受田 浩之 准教授 柏木 丈弘 准教授 島村 智子
34	県産未利用有用植物の活用に向けた農商工医連携基盤の構築と事業化モデル	生命環境医学部 教授 金 哲史
35	新農薬実用化試験に関する研究	生命環境医学部 教授 曳地 康史
36	種雄牛の現場後代検定	生命環境医学部 准教授 松川 和嗣
37	世界初のアオリイカ人工受精・孵化技術の確立	農学部 准教授 足立 亨介
38	遺伝子改良型海産珪藻による有用バイオ燃料生産技術開発	農学部 教授 足立 真佐雄
39	豪雨・急傾斜地帯における低攪乱型人工林管理技術の開発（林業専用道施工技術の開発）	農学部 教授 後藤 純一 准教授 鈴木 保志 准教授 原 忠 准教授 松岡 真如
40	竹林資源の安定供給のための低コスト搬出等の実証	農学部 教授 後藤 純一
41	国土交通省 平成 25 年度河川砂防技術研究開発公募地域課題分野（砂防）採択課題 （研究代表者：東京工業大学 灘岡和夫教授）中の「生態学的アプローチによる熱帯沿岸生態系の生物多様性・生態系機能維持機構と多重ストレス応答評価」 <平成 23 年度採択課題の継続実施> 斜面動態モニタリングに基づく土砂災害発生予測技術の高度化に関する調査研究	農学部 教授 笹原 克夫
42	健康食品成分を利用した保存加工食品の害虫防除技術の開発	農学部 准教授 手林 慎一
43	新農薬実用化試験に関する研究	農学部 准教授 手林 慎一
44	香南市の地域防災対策を目的とした堆積地盤の揺れやすさマップの構築に関する研究	農学部 准教授 原 忠
45	常時微動観測による土佐市の堆積地盤構造の推定	農学部 准教授 原 忠
46	中土佐町海岸平野部の地域防災対策を目的とした堆積地盤の揺れやすさ判定に関する研究	農学部 准教授 原 忠
47	養殖漁業技術開発支援	農学部 准教授 深田 陽久
48	気候変動を考慮した農業地域の面的水管理・カスケード型資源循環システムの構築	農学部 教授 藤原 拓
49	中小規模園芸ハウスを対象とした複合エコ環境制御技術の確立	農学部 准教授 宮内 樹代史
50	Exp.337 下北沖深部掘削試料の全元素、物理特性、微生物集積の多次元マッピング	農学部 教授 村山 雅史
51	高知県内のハウス栽培農家でのヒートポンプ並びに木質バイオマスの導入による二酸化炭素削減効果を検証する	農学部 准教授 安武 大輔
52	赤潮・貧酸素水塊漁業被害防止対策事業研究（瀬戸内海等での有害赤潮発生機構解明と予察・被害防止等技術開発）	農学部 准教授 山口 晴生
53	簡便な抗酸化力評価用の電気化学センサー開発に関する研究	複合領域科学部 准教授 上田 忠治
54	海洋鉱物資源広域探査システム開発	複合領域科学部 教授 岡村 慶
55	抗アレルギー海洋微細藻カロテノイドの開発	複合領域科学部 特任助教 小野寺 健一

56	医薬品利用を指向したリボヌクレオチド関連化合物の大量合成技術の開発	複合領域科学部門 特任講師 片岡 正典
57	新規マイクロ波高活性化固体触媒の開発と、海藻バイオマスからのラムノース製造への応用	複合領域科学部門 特任助教 椿 俊太郎
58	南大洋における新規掘削提案の検討～南極寒冷圏変動史プロジェクト～	理学部門 准教授 池原 実
59	災害時に事業継続性を発揮する情報通信インフラのための運用計画改善手法および冗長化技術の研究開発	理学部門 教授 豊永 昌彦 准教授 佐々木 正人
60	Exp.344によるコスタリカ・オサ半島沖沈み込みプレート境界地震発生帯のテクトニクスと堆積物組織・物性変化	理学部門 准教授 橋本 善孝
61	泥質層のコア層解析ならびに貯留層特性の評価	理学部門 教授 安田 尚登

外 8 件

## 特別対談3

# 大学と産業界が一緒になって 10年後の高知をつくっていこう

**進行役**

地域連携推進センター副センター長  
産学官民連携推進部門長

**石塚 悟史**



土佐経済同友会  
産学官民連携推進委員会 委員長  
株式会社シティネット代表取締役社長

**渡邊 基文**

## 産と學と土佐まるごと社中

**石塚**

産学官民連携推進部門は、産業界の方々との付き合いも多い部門です。土佐経済同友会の渡邊さんとも「土佐まるごと社中」

などを通じて酒を酌み交わす仲ですが、今日は土佐経済同友会の産学官民連携推進委員会委員長というお立場で、10年後の高知を見据えて産学官連携して高知の活性化にどう貢献できるのかといったお話などお聞きしたいと思います。「土佐まるごと社中」は土佐経済同友会が中心となって産学官連携の拠点、そのサロンを目指して2012年に発足しました。事務局は地域連携推進センターが担っています。

**渡邊**

「土佐まるごと社中」は、熱いココロザシを持った人たちが自由に集まるサロンです。そこで人と出会い、意気投合する仲間を創って情熱を燃やす。毎月第2水曜日に定例会を開いて、先日も高知大の先生をゲストにお招きしたばかりです。高知の人間は郷土愛が強く、高知をなんとかしたいという気持ちが根底にあるから、こういう産学官民が連携する組織をつくってもスムーズにいくという大きな素地があるわけです。これまで産業界と大学のつながりはほとんどありませんでしたので「大学と連携できる」という期待感も大きいし、私たち産業界が今まであまり使えていないリソースが大学です。大学の先生方の未来をつくる力を持ってぜひ、産業界と一緒に10年後の高知をつくっていきましょう。それにはまず、人間関係をつくっていく必要があります。

**石塚**

現在、高知大学には教員が約700人いて、高知工科大学、高知県立大学、高知学園短期大学、高知工業高等専門学校を含めると県内の高等教育機関にはかなりの人数の教員数がいます。高知をよくするためにそういう先生方の知をどうフル活用してもらうか。県内の大学同士での連携も非常に重要です。

**渡邊**

産業界からしてみると、大学の先生は小さい種をたくさん持っておられます。ただ、研究成果という芽はなかなか出て来ない。それが産業界と交流することによって“あっ、それはこういう育て方をすると商売の種子になるのではないか”というような発想ができると思うんです。先生や学生たちと交流をしていながら、時間はかかるけれど産業界も少しずつ大学を理解していかないといけないと思っています。

**石塚**

純粹にその学問だけを見ていると、それがどういう価値があって、どのように活用できるのかということには意外と気づかない。それが他の人と接することで出てくる。お互いにそういう違った視点や観点の交流にもなりますね。

## 産学連携の好循環をつくる

**石塚**

産学官が連携をして高知の活性化にどう貢献できるか。ここ1年間で高知大学発のベンチャーと言われる企業が4社ほど設立されています。先生方がこれまで10年、20年と積み上げられて来られた研究成果がようやく実を結んだカタチです。大学発のいろんな新しい商品というのはすごく時間がかかる。その速度をあげるために産学官でその土

壤をどう作っていくかということも大事になってきます。ちなみに私の経験から申しますと、産業界と大学が連携していく中で、大学発の技術の成功率は1割ぐらいです。

### 渡 邊

1割ですか。1割もあるというべきか。

### 石 塚

また、企業から持ち込まれたニーズに対しては7~8割ぐらいは、何らかのカタチで企業さんに満足していただけるものになります。そういう意味でも大学はもっと社会とつながり、世の中にすぐに貢献できるような研究テーマを見つけて、そこから新しいものを生み出していくといった好循環をつくっていく必要があります。

### 渡 邊

民間からしてみると、すごい特許を使って日本の未来や世界に飛び出していくような産学連携があれば、地元の地道なある商品売り出したい時に、何かの成分がすごく役立つといったような地元志向型の付加価値を見つけてくれる身近な産学連携もあります。実際に高知大学の学域と産業界に役立つ分野はどこでしょう。



### 石 塚

実学でみた時には農学部。高知の一次産品をどう域外に売っていくか。食品の場合なら付加価値を高めて外貨を稼ぐであるとか、こと林業、農業、水産業に直結した学問なので、そういう部分では一次産業に生きる高知には非常に貢献できる。私が高知大学でやろうと思ったのは食と健康に関することでした。医学部は地域の健康、福祉、医療といった高知県の医療産業に貢献しています。高齢化が進んだ高知県でどういことをやるべきか、非常に大きなテーマですし、やりがいもある。社会系の人文学部、教育学部もそうですが、地域の政策、社会的な調査や分析などお役に立つことも多いのではないかと思います。高知県に高知大学がある意義がなければ、高知に高知大学は要らないという話になります。

### 渡 邊

企業家からしてみたら、大学の先生って面白いことに結構広いネットワークを持っておられるんですね。いろんな大学の先生やスペシャリストをたくさん知っていて、そのスペシャリストと一緒にやっていた企業の人まで知っている。そういうところとコーディネートして貰えると、高知県内だけでは達成できないことも実現できるかもしれません。そこまで面倒みて貰えると嬉しい。



### 石 塚

私は産学連携のコーディネーターになって14年になりますが、全国で同じような仕事をしている方から何か相談を受けた場合、それに関係しそうな方に問い合わせを

すると、だいたい3人目で何らかの解答が得られますね。高知の中でなかなか打開策が見出せない時は、それぞれが持っているネットワークをフル活用して足りない分は全国から、海外から高知に集めてくれば良いと思うんですね。「個々の最適ではなくて、全体の最適」を考えた時に、大学が持っているネットワークというのは産業界の皆さんにとって相当使える部分があるんじゃないでしょうか。

### 渡 邊

今、産学連携に関する相談はどのぐらいあるんですか。

### 石 塚

私は年間600件以上のいろんなご相談を受けています。共同研究の技術相談が多いです。中にはまだアイデアも固まっていないような相談もありますが、企業の立場に立って一緒に考えていきます。“もう少し考えがまとまってから来てください”と言うと、大学に相談しても門前払いされるということになります。先生方にとっては非常にしんどい作業になるのかもしれませんが、うちのセンターでは「いつまでに、誰が、何を、どのように」を基本にある程度の筋道ができるまで一緒に考えましょうというスタンスです。ある程度固まれば、あとは事業化までのロードマップを描けばいいだけです。あとは動き出します。

## 大学も産業界も高知のためにという覚悟がある

### 渡 邊

このあたりでもう少し、ぶっちゃけたお話をさせて貰うと、

大学の先生にご相談にいくと、教授が「それって教育になるのかあ、研究になるのかあ」と言います。これは高知大学だけではありませんけれど、こと教授レベルになるとなかなかうまくいかない。私が大学に言いたいのは大学として地域に貢献する、連携するということを中期計画に盛り込んで明記して、できれば先生に加点してあげてほしい。先生方は学問を教えるのが仕事なので、そこが大きくなってもらえないとは思いますが、ただそういう地域貢献に対するモチベーションを少しでも持って貰うとありがたい。

### 石塚

大学は「教育・研究・社会貢献」を3つの柱としています。教育と研究がベースで、その結果としての社会貢献という位置づけです。もちろん、大学内でも地域と活動をしているというのは社会貢献として評価されるようになっていますが、営利集団ではないので企業側からご相談を受けても、それが自分にとってメリットがあるかどうかのポイントになってくるわけです。企業の論理だけでは、大学は何もやってくれないという人もいますけれど、先生にとってはそこが見えなければ、ただ単にただ働きのボランティアということになるわけです。そこが、お互いに文化の違うところでのポイントなのかなと思うんですけれどね。

### 渡邊

たとえば、石塚先生が何かの研究をされていて、知り合いでなければそういう回答が返ってくるかもしれません。でも、酒席でそういう話になって「そういう研究をしたことがあるよ」「今ならあの先生に聞くといいかもしれない」という話がでないとは限らない。だから、あまり人間関係がないところでぶつかっていくと、お互いに警戒して親身に考えず、損得関係だけになってしまう。「まるごと社中」にも参加して貰って、今度何かお互いに必要とされる時の前準備をしておかないと今まで通りのことになるのではないかな。早い話が「飲み会を持って」ということですね(笑)

### 石塚

飲み会は要る(笑)。今日も会議室より酒席がいいかなと思ったぐらいです。

### 渡邊

そうやって人間関係をつくりながら、産業界は先生を気遣い、大学は産業

界を気遣ってくれるような関係性ができたら変わるのではないかな。今はそれがうまくできていないから、産学連携もあまりできていない。実際、中小企業のほとんどが「大学、それ関係あるが?」という人が多いのも事実。私たちの方としても積極的に大学と絡んでいこうという文化を作らないといけないなと思っています。

### 石塚

大学でもどういうところで皆さんの役に立つことができるのか、一緒にやることができるのかというのは想像でしかない。地域のほうでも「大学ってなんか使えそうな気もするけれど、どうやって相談してどうすれば新しいことができるのだろう」という状態ですよ。個々としては知っているけれど、全体としてはまだそういうところです。

### 渡邊

そういう意味ではお互いにまだどこか、付き合い方を模索している感じですね。

### 石塚

連携することで何か新しいことができそうな気はする。でも何ができるんだろうということですよ。まだお互いに知らないわけだから、そこは一緒に膝を付き合わせて考えていくという作業がなければなにも生まれません。今、学内の先生方もどんどん外に出て行こうという流れにはなっています。そういう意味では良い方向にいらっているのではないかと思います。

### 渡邊

平成27年度に県主導で県立大の永国寺キャンパスに新しく開設する「(仮称)産学官連携センター」は県内5大学



が加入している。これはすごいことです。コンパクトだからできる。これは地の利だと思うんですよ。コンパクトでお互いに信頼し合えるというメリットをどんどん生かして、学生たちも巻き込んで一緒に新しい商売を作って貰いたい。

### 石 塚

そこをめざして大学も高知のためにという覚悟を持ってやっていますから、こういう流れを高知の活性化の流れにしていけないといけないと思っています。いづれにしても情熱や熱意が必要です。あとは天の時、地の利、人の和。天地人です。これが揃うと必ず成功します。成功例をたくさんつくっていける活動を大学も経済界とともにやっていけたらなと思います。

### 渡 邊

高知大学は文部科学省直接の大学なので、国の動き、世間の動きに敏感だと思いますし、産学官民連携というのを先んじて体系立てて取り組んできた大学だと思います。そういう意味でも高知大学はトップランナーです。だから他大学に少し遠慮されているようにも見えますが、他大学をリードしてもらわないと、これからやろうとしているところがまたイチから勉強しないといけなくなるので、もっと大学間連携の速度を速めてもらいたい。ともかく産業界はこれからも高知大学の地域連携推進センターに期待しています。

# 知的財産部門

---

Intellectual Property Section(IPS)

平成 25 年度活動概要

topics1 知的財産部門の紹介

topics2 各種セミナー等取組み

知的財産権の活用状況について

知的財産部門実績

## 平成 25 年度活動概要

平成  
25年

5月8日	BIO Tech 2013 出展（東京ビッグサイト）（10日まで）
5月9日	平成 25 年度第 1 回医学部倫理委員会
5月13日	夏播き小麦の普及・活用に向けた協議
6月3日	平成 25 年度第 2 回医学部倫理委員会
6月11日	平成 25 年度第 1 回弁理士による発明相談会（1件）
6月12日	第 95 回知的財産専門委員会
6月12日	平成 25 年度第 3 回医学部倫理委員会
6月13日	平成 25 年度第 1 回特許等取得活用支援連絡会議
6月13日	平成 25 年度第 1 回「知財サロン」会議
6月19日	第 7 回産学連携大学実務者ミーティング
6月26日	国際・化粧品開発展 アカデミックフォーラム 出展（東京ビッグサイト）（28日まで）
7月1日	平成 25 年度第 2 回弁理士による発明相談会（3件）
7月8日	医療器具等研究開発プロジェクト
7月18日	平成 25 年度第 4 回医学部倫理委員会
7月19日	第 96 回知的財産専門委員会
7月29日	第 97 回知的財産専門委員会
7月30日	平成 25 年度第 5 回医学部倫理委員会
9月2日	平成 25 年度第 6 回医学部倫理委員会
10月7日	平成 25 年度第 7 回医学部倫理委員会
10月16日	平成 25 年度第 3 回弁理士による発明相談会（1件）
10月23日	第 98 回知的財産専門委員会
11月6日	平成 25 年度知的財産権セミナー
11月7日	平成 25 年度第 8 回医学部倫理委員会
12月12日	第 99 回知的財産専門委員会
12月20日	平成 25 年度第 4 回弁理士による発明相談会（1件）
12月26日	平成 25 年度第 9 回医学部倫理委員会
12月27日	第 100 回知的財産専門委員会

平成  
26年

1月30日	第 101 回知的財産専門委員会
2月13日	職務発明制度説明会（19日まで）
2月14日	平成 25 年度第 10 回医学部倫理委員会
2月19日	平成 25 年度第 2 回特許等取得活用支援連絡会議
2月19日	平成 25 年度第 2 回「知財サロン」会議
2月21日	平成 25 年度第 5 回弁理士による発明相談会（3件）
3月4日	第 102 回知的財産専門委員会
3月7日	平成 25 年度第 11 回医学部倫理委員会
3月25日	第 103 回知的財産専門委員会
3月27日	平成 25 年度第 6 回弁理士による発明相談会（1件）

## topics 1 知的財産部門の紹介

### 1. 機能

本部門は、高知大学知的財産ポリシーに則り、教職員の研究成果である発明の相談・保護・管理・活用を実施する部門として設置されたものである。

主要な活動として、発明相談会開催、特許等のライセンス契約・管理、特許関係の各種セミナーの開催、共同研究契約等の知的財産条項の交渉・検討、及び各種展示会出展等の技術移転活動を行っている。

### 2. 体制

#### I. 知的財産部門

平成 25 年度の体制は、部門長は国際・地域連携センター長の受田副学長が兼務し、下方特任助教（平成 25 年 10 月から）、四国 TLO 安田客員准教授（平成 24 年 8 月から）が教員組織として、また、事務組織としては、地域連携課の係長及び係員がそれぞれ 1 名配置されている。

#### II. 他部門等との連携

当部門の業務内容と密接に関連する、産学官民連携部門（コーディネイト機能）及び研究推進課（共同研究契約等の実務窓口）との連携が必須であることから、合同ミーティング及び情報交換を実施し、案件のステージにあわせて最適な教職員を当該教職員の担当者とすることで、効率的に業務を行えるように配慮している。

#### III. 四国 TLO との連携

当部門の業務に関して、四国 TLO との連携強化を図っている。具体的には、研究者から発明の相談があった場合において、弁理士とともに発明相談会に同席し、特に市場性の観点からの目利きを依頼することができる体制を確立している。また、技術移転段階においては、手続を文書化することにより、明確な意思表示の下での委託関係を構築している。

#### IV. 県内機関との連携

高知県商工労働部新産業推進課・高知県商工会議所・高知県商工会連合会・公益財団法人高知県産業振興センター・一般社団法人高知県発明協会・高知工科大学・高知工業高等専門学校及び県内企業等と連携して実施する「知財サロン」に会員として参画し、県内での知的財産に関する取り組みの活性化を図るとともに、情報交流ネットワークを構築した。

### 3. 実績

特許出願に関しては、第 2 期中期目標・中期計画等を踏まえ、大学帰属出願案件についてはより一層の質的充実を図るため、特許の実施許諾契約等におけるライセンス等収入（直接的収入）や特許等をシーズとした共同研究等の外部資金及び競争的資金（間接的収入）の獲得に当たっての数値目標を設定するとともに、新たに「退職教員が発明者となっている特許等の取扱い基準」、「発明者に対する技術移転の状況報告に関する指針」、「国際出願・外国出願の取り扱いに関する指針」の策定を行った。また、知的財産権の有無に影響されない「成功報酬型共同研究」の制度を導入した。

平成 25 年度における特許出願等件数については、発明届出件数は 30 件（前年度比 13 件減）、特許出願件数は 27 件（前年度比 4 件減）であった。なお、出願件数（27 件）のうち、共同研究等に基づく企業等との共同出願件数については、24 件（前年度比 1 件増）であった。

平成 25 年度における特許等の知的財産の活用による大学への収入又は外部資金等の獲得状況については、実施許諾契約等に基づく収入（直接的収入）は 3,272 千円であった。

また、特許をシーズとし、これと密接に関連した共同研究、受託研究及び競争的資金等の受入（間接的収入）は、264,878 千円であった。

#### 4. 成果物（16 - 25 年度）

- 高知大学知的財産ポリシー
- 高知大学国際・地域連携センター規則
- 高知大学国際・地域連携センター運営戦略室規則
- 高知大学国際・地域連携センター推進委員会規則
- 高知大学国際・地域連携センター知的財産専門委員会規則
- 高知大学発明規則
- 職務発明における補償金に関する細則
- 高知大学技術移転規則
- 高知大学成果有体物取扱規則
- 企業との共同研究等から生じた知的財産権の取扱についての基本方針
- 高知大学国際・地域連携センター知的財産部門特許助成制度について
- 共同研究・受託研究・特許権の取扱いについて（平成19年9月10日改訂）
- 国立大学法人高知大学特許出願方針
- 特許の審査請求及び拒絶理由通知等対応方針
- 国立大学法人高知大学知的財産権活用・放棄基準
- 国立大学法人高知大学発明フロー
- 発明届の審議手順
- 発明から特許取得までの手続きと費用
- 高知大学共同研究取扱規則
- 共同出願契約書（ひな型）
- 実施許諾契約書（ひな型）
- 有体物譲渡契約書（企業用）（ひな型）
- 有体物譲渡契約書（研究用）（ひな型）
- 商標使用権設定契約書（有償版）
- 商標使用権設定契約書（無償版）
- 「研究ノート」の活用について
- 高知大学安全保障輸出管理規則
- 共同研究の成果に係る特許出願及び譲渡指針
- 退職教員が発明者となっている特許等の取扱い基準
- 発明者に対する技術移転の状況報告に関する指針
- 国際出願・外国出願の取り扱いに関する指針
- 成功報酬型共同研究について
- 高知大学における大学発ベンチャーの認定に関する規則

## topics2 各種セミナー等取組み

### 1. 発明相談会

伊藤浩彰 弁理士、(アスフィ国際特許事務所：大阪市)、中野睦子 弁理士、(三枝国際特許事務所：大阪市)、中井 博 弁理士(山内特許事務所：香川県)を延べ6回招聘し、累計10件の相談を行い、出願明細書の打合せ、研究の方向性や必要なデータの確認等を行った。

### 2. 展示会

名 称：BIO tech 2013

開催日時：平成25年5月8日(水)～10日(金)

開催場所：東京都 東京ビッグサイト

主 催：リード エグジビション ジャパン株式会社

名 称：Cosme Tech 2013 アカデミックフォーラム

開催日時：平成25年6月26日(水)～28日(金)

開催場所：東京都 東京ビッグサイト

主 催：リード エグジビション ジャパン株式会社

### 3. その他の取り組み

#### 1. 知財活動の個人評価への反映(特許を論文と同等に評価することへの取組)

高知大学では、教員の活動を教育、研究にとどまらず地域貢献等を含めて点数化(評点)して評価するシステムを他大学に先駆けて構築し、平成18年度から本格的に導入している。この中で特許出願、特許登録についても論文と同等以上の価値を認めることになった。このシステムは、今後、大学に知的財産活動を定着化するのに非常に大きな力になると考えられる。

素点の一覧表(講義時間1時間との比較)

		研究				
		素点		時間換算(授業相当)		
		文系(x2)	理系	文系	理系	
論文	著書	欧文	30	15	200.0	100.0
		邦文	12	6	80.0	40.0
	総説	欧文	30	15	200.0	100.0
		邦文	12	6	80.0	40.0
	原著論文	欧文	30	15	200.0	100.0
		邦文	12	6	80.0	40.0
活動			文理-共通		文理-共通	
	受賞	件数	25.00		166.7	
	特許出願(公開)	件数	5.00		33.3	
	取得	件数	30.00		200.0	

【平成25年度「教員の総合的活動自己評価」の実施要項】より抜粋

#### 2. セミナー事業

日本弁理士会の協力を得て、本学と高知県との共催事業による知的財産権セミナーを開催した。

## 知的財産権の活用状況について

### 【中期目標】

研究拠点プロジェクト、学系プロジェクト、個人・グループ等が行う研究活動の質的向上や社会還元に向けた全学的支援体制を充実するため、センター機能をより一層強化する。

### 【中期計画】

国際・地域連携センターにおいて、1) 共同研究、受託研究、2) 数値目標を設定した特許出願を推進する。

### 【H25年度計画】

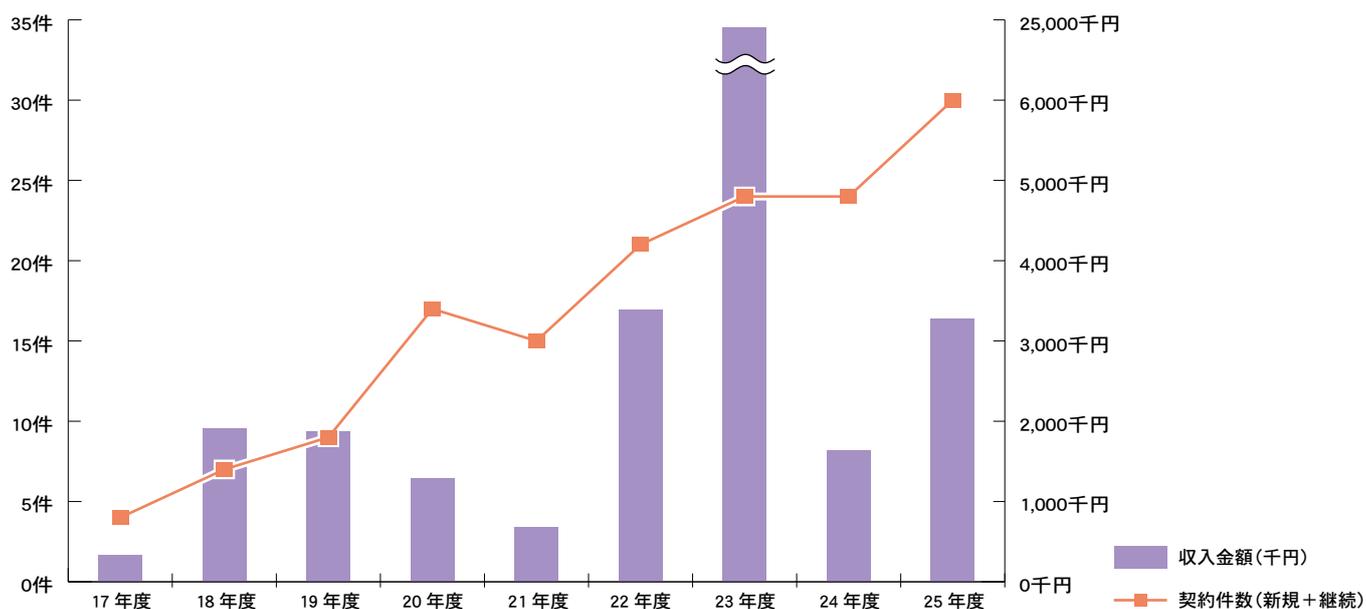
共同研究及び受託研究の推進に向け、産学官連携のネットワークを拡大する。また、大学帰属出願案件の質的な充実を図った上で、知的財産を活用したライセンス収入・競争的資金獲得の増加を図る。

### 【数値目標】

知的財産を活用した直接的収入（ライセンス収入等）300万円以上、間接的収入（知的財産をシーズとする競争的資金・共同研究等の外部資金の総額）1億円以上を目標とする。

### (1) 発明活用（直接的収入）状況の推移

【直接的収入】：特許等実施許諾契約・研究成果有体物提供契約・特許等譲渡契約等の件数・収入実績



事項	年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
契約件数 (新規+継続)		4件	7件	9件	17件	15件	21件	24件	24件	30件
契約件数 (新規)		2件	3件	4件	12件	3件	6件	4件	5件	9件
収入件数		2件	4件	8件	11件	8件	11件	16件	12件	15件
収入金額 (千円)		327千円	1,904千円	1,871千円	1,281千円	676千円	3,388千円	24,164千円	1,637千円	3,272千円

(2) 発明活用（間接的収入）状況（平成25年度）

【間接的収入】：特許等と密接に関連した共同研究・受託研究・科学研究費補助金獲得状況

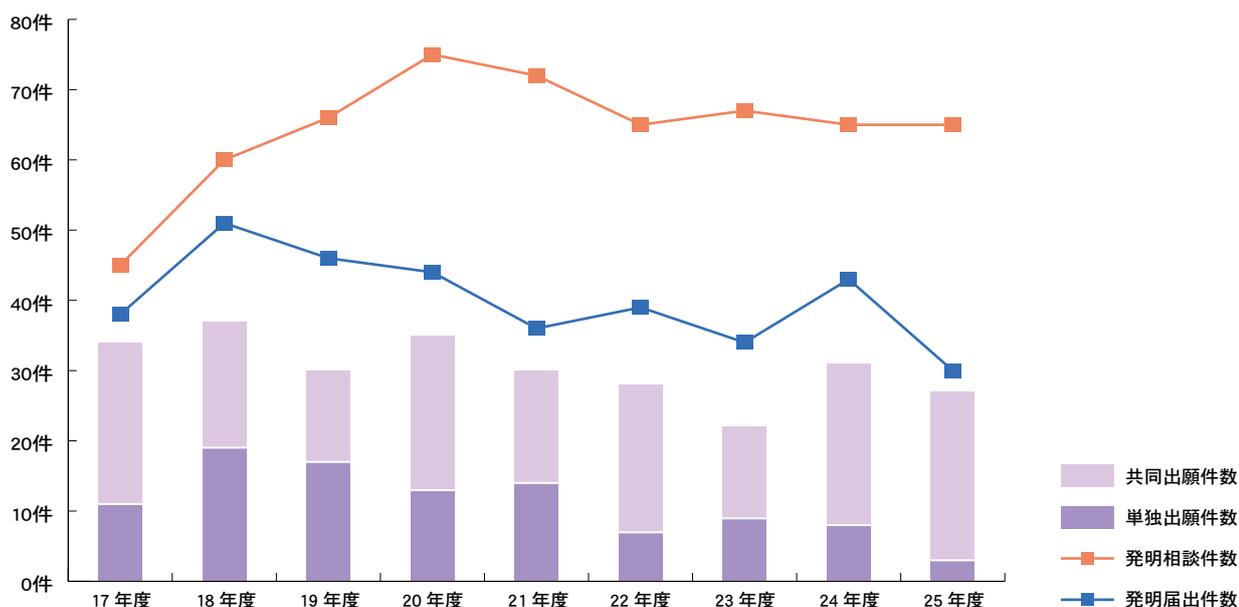
(i) 特許等と密接に関連した共同研究等の総件数に占める比率

	関連件数	総件数	対総件数比
共同研究	61件	134件	46%
受託研究	17件	69件	25%
科学研究費助成事業	28件	278件	10%
科学研究費補助金（厚労省）	2件	32件	6%
合計 （ ）内は平成24年度	108件 (99件)	513件 (488件)	21% (20%)

(ii) 特許等と密接に関連した共同研究等の総額に占める比率

	関連金額	総額	対総額比
共同研究	71,412千円	147,003千円	49%
受託研究	129,587千円	437,304千円	30%
科学研究費助成事業	55,510千円	488,118千円	11%
科学研究費補助金（厚労省）	8,369千円	58,816千円	14%
合計 （ ）内は平成24年度	264,878千円 (322,428千円)	1,131,241千円 (1,206,799千円)	23% (27%)

(3) 発明相談件数・発明届出件数・出願件数の推移



事項	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
発明相談件数	45件	60件	66件	75件	72件	65件	67件	65件	65件
発明届出件数	38件	51件	46件	44件	36件	39件	34件	43件	30件
単独出願件数	11件	19件	17件	13件	14件	7件	9件	8件	3件
共同出願件数	23件	18件	13件	22件	16件	21件	13件	23件	※24件

※ 実用新案1件を含む

特許保有件数（平成25年度末 現在）

大学保有特許	大学保有特許	うち共同保有特許
日本国特許	92件	53件
外国特許	37件	27件
実用新案登録	1件	1件

## 知的財産部門実績

事項		平成 16年度	平成 17年度	平成 18年度	平成 19年度	平成 20年度	平成 21年度	平成 22年度	平成 23年度	平成 24年度	平成 25年度
1. 特許出願件数	【計画】	30件	33件	36件	39件	42件	45件				
	【実績】	33件	34件	37件	30件	35件	30件	28件	22件	31件	27件
2. 発明届出件数	【計画】		38件	41件	44件	47件	50件				
	【実績】	45件	38件	51件	46件	44件	36件	39件	34件	43件	30件
3. 発明相談会 (知的財産部門)	【計画】		38件	41件	44件	47件	50件				
	【実績】	未記録	45件	60件	66件	75件	72件	65件	67件	65件	65件
4. 発明相談会 (弁理士)	【計画】		8回	10回	10回	10回	10回				
	【実績】	5回	8回	11回	11回	14回	7回	9回	8回	10回	6回
	【実績】	26件	28件	27件	40件	34件	21件	20件	31件	24件	10件
5. 特許実施許諾等 契約（新規）	【計画】		2件	2件	2件	2件	2件				
	【実績】	1件	2件	3件	4件	12件	3件	6件	4件	5件	9件
6. 特許実施許諾等 契約（新規＋継続）	【計画】		4件	6件	8件	10件	12件				
	【実績】	2件	4件	7件	9件	17件	15件	21件	24件	24件	30件
7. セミナー開催	【計画】		2回	2回	2回	2回	2回				
	【実績】	3回	2回	4回	6回	4回	3回	2回	0回	3回	1回
8. 共同研究等の知的財産 条項検討・交渉	【計画】		31件	34件	37件	40件	43件				
	【実績】	未記録	31件	81件	94件	64件	42件	47件	46件	63件	69件
9. 大学院生への特許調査 方法教育	【計画】		58名	23名	23名	23名	23名				
	【実績】		58名	1名	18名	7名	1名	0名	0名	1名	0名
10. 研究戦略企画 プロジェクト会議	【計画】		2回	2回	3回	3回	4回	0回			
	【実績】		2回	2回	3回	2回	5回	2回	0回	1回	3回
11. 特許フェア等 (産学官民が主となるものを除く)	【計画】		1回	1回	1回	1回	1回				
	【実績】		1回	1回	2回	2回	3回	3回	3回	1回	4回
12. 職務発明説明会 (新規採用者)	【実績:回数】	対象外	1回	3回	16回	5回	1回	1回	1回	1回	3回
	【実績:確認書】	対象外	33人	23人	28人	25人	12人	26人	29人	30人	26人
13. 研究ヒアリング	【実績:人数】				15人	19人	5人	2人	2人	3人	3人
14. J-STORE、特許流通 DB 登録件数	【実績】			23件	23件	28件	39件	39件	39件	40件	81件
15. 上記照会件数	【実績】			0件	2件	2件	1件	0件	0件	1件	1件
16. 特許等による収入実績			327千円	1,904千円	1,871千円	1,281千円	676千円	3,388千円	24,164千円	1,637千円	3,272千円
17. 特許出願支援（JST）実績		498千円	3,140千円	3,790千円	2,342千円	4,639千円	3,288千円	6,178千円	5,269千円	6,686千円	6,644千円

## 特別対談4

# ほしいものがほしい 看護師発の特許のこころ



進行役

地域連携推進センター知的財産部門  
特任助教 弁理士

下方 晃博



高知大学医学部附属病院  
副病院長 看護部長

楠瀬 伴子



泉株式会社  
樹脂事業部東京樹脂課 担当課長

阿部 晃之

## 医療の現場はアイデアの宝庫

高知大学では、教員の活動を教育、研究にとどまらず地域貢献等を含めて点数化（評点）して評価するシステムを他大学に先駆けて構築し、平成18年度から本格的に導入しています。この中で特許出願、特許登録についても論文と同等以上の価値を認めることになりました。このシステムは、今後、大学に知的財産活動を定着化するのに非常に大きな力になると考えられます。

### 下方

高知医大附属病院の看護師さんたちのアイデア満載の医療用スタッキングカートと後方連結型点滴スタンドです。泉株式会社さんとの産学連携から生まれた製品で、大学の知的財産でもあります。知財部門ではその知財を守るために特許出願していて、後方連結型点滴スタンドに関しては外国出願も行なっています。医師や研究者の先生ではなく、看護師さんがというのは他の大学や病院でもなかなかないことだと思いますし、すごく面白いケース。製品化までの思いやプロセスを聞かせてください。

### 楠瀬

泉株式会社さんとの出会いは5年ほど前のことになります。元・倉本病院長から、私たち看護師が日頃欲しいと思っているようなモノを産学連携で共同開発してみてもどうかとご紹介頂いたのが、そもその始まりです。

### 下方

その開発パートナーとなった泉株式会社さんとの出会いから、医療カートと点滴スタンドに辿り着いたのはどうしてですか。

### 楠瀬

キックオフの前にまず、阿部さんをはじめ泉株式会社の

方々に私たちの要望をたくさん聞いて頂きました。それは現場の看護師たちから挙がって来た「こんなものがほしい」とか、「ほしいと思っているけれど、なかなか身近にない」という140を超えるアイデアの数々です。もうすでに製品化されているものなどを阿部さんに調べて頂いて除き、その中からピックアップしたものが医療カートでした。ナースステーションを見ていただくとわかりますが、いつもカートが散乱して場所を取るのどにか収納したい、また患者さんのベッドサイドに行ってパソコンに入力しながらバッテリー切れが心配になるといった意見やアイデアを取り入れたのが、この折り畳めるスタッキングカートです。



### 阿部

実は私ども泉株式会社は商社でして、基本的には医療機器メーカーではありません。自社で企画開発をして販売することもあまりないんです。私が所属している部署が社内でも異質のセクションでして、立ち上げて使う映

用のスクリーンを作っております。これから別の分野にも挑戦していこうという中で高知大学さんとのご縁に巡り会いました。ですので、私どもは何でもすべてできるというわけではありませんし、産学連携による共同開発も初めての試みでしたので、たくさんのアイデアの中で最も役に立ちそうな医療カートを選ばせてもらいました。

## 下方

140を超えるアイデアがあったということで、そういう意味では現場はアイデアの宝庫でもあるんですね。開発中の思い出とかエピソードはありますか。

## 楠瀬

この商品を開発するにあたって、阿部さんは現場を知るために夜勤をしました。医療の現場、看護の現場を全然ご存じではないので、私たちが「混乱している」とか「こんなものがほしい」と言っても自分にはわからないからと。

## 阿部

それまでまったく医療現場の経験がなかったので、いくら言葉でご説明いただいてもわからない。実際に使われている現場が見られて非常に参考になったというか、その大変さがよくわかりました。

## 下方

阿部さん、やる気がすごいですね。

## 産学連携で医療業界初の特許が生まれた

## 阿部

その製作段階の中で私が一番印象に残っているのは、カートワゴンの角にもっと丸みを持たせてほしいと。製作側からしますと、それをするととなると投資も必要ですし、お互いにせめぎ合いなんです。台数が増えたら売れてから、そこは考えましょうと(笑)

## 下方

医療現場として角に丸みを持たせたい理由とは何なのでしょう。

## 楠瀬

一番は見た目と可愛さ(笑)。機能面としては台の隅が角張っていると拭き掃除がしにくい。丸みがあるときれいに拭けるので拭き掃除がしやすく、清潔さも保てるというのが理由です。カートを選ぶ場合、私たちはカタログを見て選ぶわけですが、スタッキングできるとか機能の説明を

聞いてもわからない。でも色やかたちだと目で見てわかる。そういう意味から言ってもこのカートは今までにないカタチなんです。

## 下方

電子カルテ用と処置台用の2タイプがあって、コンパクトサイズ、コンパクト収納、コンパクトにオールインワン。病院によってパソコンや備品サイズが違うのでカスタマイズできるようになっている。

## 楠瀬

はい。バッテリーを載せなくてもいいように巻取り式の電源コードをカートの中に忍ばせてもらっています。最初はACアダプターをその中に一緒に入れてパソコンだけを取るというふうに考えていましたけれど、ここが私たち看護師のずぼらさで、カートに載せたものは載せたまま(笑)。机のように片付けようとか、せっかくのスタッキングなのにあまり折り畳もうとしない。現場はで忙しい中でやっぱり畳むことは難しくてそのまま、そこで打とうかなと思うのかなと。



## 阿部

私どもも、この病院だけではなく他の病院でも使ってもらっていますし、学会に行ってもやっぱり、パソコンを載せっぱなしという声結構多いので、パソコンを載せたままでも折り畳めるようなかたちをちょっと考えている最中です。

## 下方

そしてもう一つの特許、点滴スタンドはいかがですか。

## 楠瀬

私は点滴スタンドのほうがイチオシです。点滴スタンドは安全という意味からも非常にいいものができると思っています。

## 下方

安全というのはどういった面で？

## 楠瀬

点滴をされている患者さんの車いすを押す場合、点滴棒を車いすの後ろにつけます。でも、多くのものは点滴ス

スタンドに輸液ポンプをネジで止めているのでまずそれを外して、また車いすの点滴棒に付けなければいけないので手間がかかる。しかも車いすに付属している点滴スタンドの棒は少し細くてネジも止めにくいんですね。患者さんは病棟内では車いすに乗らなくても自分で歩ける方もいらっしゃるの点滴スタンドはそのままという人も多い。そうすると片手で車いすを押し、片手で点滴スタンドを持つというカタチになります。車いすの操作性も悪くなりますし、点滴スタンドの安定感も悪くなったり、いろんなチューブがあつたりと危険性が非常に高いんです。

## 下方

そういえば、看護師さんに車いすを押し貰いながら患者さんが前で点滴スタンドを持っているのをよく見かけますね。

## 楠瀬

キャスターが少しの溝ではまっけてしまい点滴スタンドが倒れかけるというようなこともあって、私たちは今まで常に神経をはりめぐらせていました。どうにか点滴スタンドを車いすに付けられるようになればいいなと。スタンドを車いすの後ろにつけるとうまくいくし、安全性も確保されました。患者さん方も歩く時は点滴スタンドを押しながら使えるし、着脱が簡単なので車いすに乗る時は簡単にはめ込めます。患者さんの安全・安心が私たちの安心。まずはこれを高知大学病院の中から広めていきたいと思っています。

## 下方

そこが“業界初”の後方連携型。3点止めにするというのが特許のポイントです。他の病院でも使われているんですよ。

## 阿部

はい。点滴スタンドは発売をしてちょうど1年ぐらいになります。私どもが製品を一番PRできる場というのは展示会や学会での企業展示ですけど、そういうところに持って行って看護師さんに見てもらおうとすごく反応がいいんです。特に現場を知っている人からは「画期的」だとか「こんなほしい」という声は結構聞かれます。そういう声を聞くと私どもも「ああ必要とされているんだな」と実感としてよくわかるので、嬉しさもやりがいも感じます。

## 楠瀬

ただ看護師って欲張りなので、1つよくなるとあれもしたいこれもしたいと、もっと盛り込みたくなってしまいうんですよ（笑）

## それ、特許とっていますか

## 下方

こういうふうに見て看護師発の医療用品がまったく違う流れで特許として世の中に出て行くというのは面白い。大学の知財としてもひとつまた別の可能性を見出せるケースかなと思います。

## 楠瀬

今まで臨床の看護師がこういうものを考える立場になかったのかもしれない。それに臨床の現場は忙しく、患者さんや診療のほうに目がいっていますので。ただ、今回はカラダの中に入る医療機器ではなく、カラダの外の器具なので、ある意味、看護師発でいいのかなと思いますね。

## 阿部

今回、高知大学さんと出会って、その現場の声をいかして製品になったというのは、私にとってもすごく貴重な経験になりました。私どもは先にも申しましたが、今まで他のところと共同開発、研究はやったことがないので、正しいかどうかはわかりませんが、こちらに最初伺った時の印象としては皆さんがとても熱心に常にそういったことを考えていらっしゃるんだなあとということ。そして驚いたのが病院の中に機械工作室みたいなものがあるということ。今はほとんど使われていないそうですが、昔は自分たちで考えたものをそこで作ったり、実際に使っていたというお話を聞きました。もともと、ここの大学病院はそういったアイデア



をお持ちなところなのかなと。

### 楠瀬

検査部の中にも、その自作のアイデアと施設がありますね。検体は1つの血液からタンパク質を測ったり、血球の数を測ったり、いくつもの検査に検体を手で持って回って行きます。でもその検体をベルトコンベアで運びましょと、開院当初にそれを自主開発で作ったんです。それこそ全国から見学に来たぐらいです。人が通ると、そのベルトコンベアが跳ね橋のようにパカッと開いたり(笑)。検査部は本当にすごい道具を自分たちで創っていますね。



### 下方

ということは、どうやら医学部は昔からそういう創造の種子というか、DNAを持っていそうです。

### 楠瀬

薬剤部は薬剤部で、ピッキングという製品を業者と開発したと聞いています。ロボットのような器械がアンプルをつまんでお皿に一人分の注射をのせて準備してくれるんですよ。

### 下方

そういう情報は私のもとにまったく届いていません(笑)。私は昨年秋に来たばかりで過去のことをまだ知りません。今、お話を聞きながら惜しいなあ、特許は取っているのかなあ、たぶん、特許はとっていないんでしょうね。知財として情報を早く集めていかないといけないなと思っています。商品ができたから終わりではなく、泉株式会社さんと楠瀬さんたち看護師さん、高知大学とのお付き合いはまだしばらく続いていくんですよ。信頼関係で結ばれていることがよくわかりました。

### 楠瀬

阿部さんの知識は、もはや看護師レベルですからね。それに別の案件のテスト試作で手術室にも入りましたからね。

### 阿部

もうお話を聞けば聞くほど奥が深くて、いろんな体験をさせて貰っていくなかで覚えさせてもらいました。まだビジネスとして軌道に乗ったといえるレベルではないですけども、私どもとしては、これからもそういったモノを増やして

いくなかで私どもの会社の中でも大きな一つの事業になるように何とかしていきたいという気持ちは持っていますので。

### 下方

高知のはちきんたちの相手は大変だろうと思いますが、知財となるような特許製品を生み出してってください。

### 阿部

スタッフの方々は皆さん、かなりはっきりしておられます。でも高知だからというわけではなく、学会とかに行ってもやっぱり来られる方はみんな似ていらっやいます(笑)

### 楠瀬

これからも言いたい放題で遠慮はしませんよ(笑)

# 四国産学官連携イノベーション 共同推進機構(四国共同機構) 高知大学サテライトオフィス

Shikoku Innovative and Collaborative Organization for Industry,  
Academia and Government(SICO)

平成 25 年度活動概要

四国産学官連携イノベーション共同推進機構

## 平成 25 年度活動概要

平成  
25年

5月15日	第1回四国共同機構準備委員会
6月28日	テレビ会議システムの導入
7月3日	第2回四国共同機構準備委員会
7月5日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構規則制定
9月10日	安全保障輸出管理についての協議会
9月15日～ 9月23日	四国共同機構としての活用及び四国共同機構の海外展開を検討するために、徳島大学が所有する海外事務所である米国拠点シリコンバレーオフィスを視察
10月1日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構を設立
10月1日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構高知大学サテライトオフィス特任教員が着任
11月15日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第1回運営委員会
11月15日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第1回構成員連絡会
12月11日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第2回構成員連絡会
12月24日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第2回運営委員会

平成  
26年

1月7日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第3回構成員連絡会
1月30日～ 2月1日	nano tech 2013 - 第12回 国際ナノテクノロジー総合展・技術会議に参加
1月31日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構キックオフシンポジウム
2月5日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第4回構成員連絡会
2月25日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構新技術説明会
3月3日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第3回運営委員会
3月6日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第5回構成員連絡会
3月10日～ 3月12日	BIO - Europe2014 に参加し本商談会の有用性を調査するとともにトライアルとして商談会に参加
3月10日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構共通基盤情報システムが設置
3月18日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第4回運営委員会
3月25日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第5回運営委員会
3月26日	四国産学官連携イノベーション共同推進機構第6回運営委員会

## 四国産学官連携イノベーション共同推進機構

### 1. 紹介

平成 25 年 10 月、文部科学省の国立大学改革強化推進事業の 1 つとして『四国産学官連携イノベーション共同推進機構』は発足した。四国の国立大学、徳島大学・鳴門教育大学・香川大学・愛媛大学・高知大学には高度な“知財”や“技術”があり、活用方法次第では大きなビジネスチャンスとなり得る“産業の種”の宝庫である。

しかし、大学とはあくまで研究機関・教育機関であるため、“種”はあれど独自にビジネス展開ができる環境ではない。

そこで生まれたのが当機構である。四国地区の国立 5 大学が大学の枠を超えて産学官連携活動を行うことで、さらなるビジネスの種を生み出すことができる。そして、新たな技術や研究成果を欲している企業と大学を繋ぎ新事業を創出することで、大学の知財を活用し、研究活動の活性化と地域社会の発展を目指すものである。



### 2. 事業概要

四国内の大学群の産学官連携部門共通業務の統合・一元化を図り、産学官連携部門の運営の効率化、高度化、低廉化、グローバル化及び IT 技術を駆使した産学官連携業務の効率化を図り、知の集積、国内外の大学と社会との接点、イノベーション創出の拠点となる四国産学官連携イノベーション共同推進機構（以下「四国共同機構」という。）を構築する。

### 3. 連携大学：

徳島大学（基幹校）、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学

## 4. 事業内容：

### (1) 背景・必要性

大学には、大学の個性や使命を明確化し、知の競争力の向上（知の創出）が望まれている。そのためには、大学の枠組みを超えて有機的な連携・一元化に向けた「大学群」の創出による連携協力システム構築、特に技術交流の拠点である産学官連携組織の統合・一元化に向けての大学改革が重要である。

現在、四国内大学、産業界、自治体の関係者から大学主導型の組織的産学連携体制の構築、四国地域の産学官連携情報の共有化、地域人材の積極的な活用、広域分野の専門人材バンクの設置、地元企業、自治体、研究機関など地域一体型の連携、海外組織との連携などが求められており、早急な対応の必要性がある。

### (2) 実施計画

平成24年度から29年度までに、四国共同機構の活動基盤を整備しながら、各大学の産学官連携部門や地域連携部門と協働し、四国共同機構体制の構築を行う。

- 24年度目標：四国共同機構の設置準備
- 25年度目標：四国共同機構の基盤整備
- 26年度目標：四国共同機構の各事業のモデル事業の実施と検証
- 27年度目標：四国共同機構の本格稼働に向けた事業検証
- 28年度目標：四国唯一の産学官連携部門として本格的稼働
- 29年度目標：広域・国際産学官連携機関としての海外展開

### (3) 効果

機構を設置することにより、次のような効果が期待できる。

#### ①大学組織・経営上の効果

大学の存在感の増大（研究活動、社会貢献活動、大学改革等の見える化、アピール力の強化）、大学間の連携の強化（情報共有、研究交流など）など

#### ②大学教育・研究上の効果

大学、地元企業、公的機関等の研究成果、研究設備及び人材（研究者）の有効な利活用による研究推進、知的財産の質の向上と知的財産活用による研究推進など

#### ③スケールメリットによる効果

- 産学官連携の広域的な研究成果利活用の推進、5大学の抱える課題、弱点の解消など
- 企業との連携チャンネルの増加とアピール力の向上、産官学連携機関の共有活用、研究者、技術者、マネージャー、法律家、知財マンなど異種分野の人材活用、各大学の研究設備の共用、研究活動場の共用、広域活動による外部資金獲得、マネジメント経費の削減、研究経費の無駄遣いの防止（重複研究、重複活動の削減）など

#### ④共通基盤情報システム設置の効果

四国共同機構の大学間連携の基盤となり、知的創造サイクルの促進、四国内大学研究情報の統一による利便性の向上とアピール力の増大、学際間、大学間、企業間の研究交流の増大など

## 5. 事業経費：平成24年度～平成29年度

総額 5億7,525万円

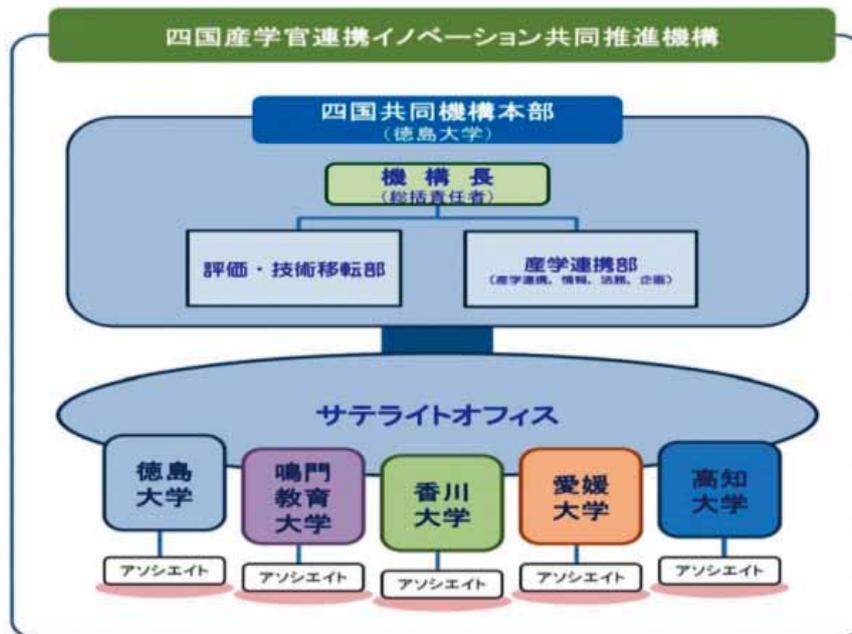
内 文部科学省補助金 4億275万円

大学自己負担金 1億7,250万円

## 6. 主な活動実績

(1) 平成 25 年 10 月 1 日、四国共同機構を設立した。

「組織図」



「組織表」

所 属	職 名 等		氏 名
四国産学官連携イノベーション 共同推進機構	機 構 長	研究担当理事	野地 澄晴
	副 機 構 長	教 授	織田 聡
	産学連携部長	(再掲)	織田 聡
	産学連携部教授	教 授	坂井 貴行
	産学連携部特任准教授	特任准教授	荒木 寛幸
徳島大学サテライトオフィス	アソシエイト	助 教	井内 健介
鳴門教育大学サテライトオフィス	アソシエイト	准 教 授	宮本 賢治
香川大学サテライトオフィス	アソシエイト	准 教 授	永富 太一
愛媛大学サテライトオフィス	アソシエイト	教 授	土居 修身
高知大学サテライトオフィス	アソシエイト	特 任 助 教	下方 晃博

(2) 四国産学官連携イノベーション共同推進機構キックオフシンポジウム

平成 25 年 10 月に発足させた四国産学官連携イノベーション共同推進機構を活用していただくための情報発信と情報交換を目的として、キックオフシンポジウムを開催した。



日時：平成 26 年 1 月 31 日（金曜日）13 時 30 分から 17 時 15 分

場所：ホテルクレメント徳島 クレメントホール・4 階

プログラム：

13時30分～ 5 大学代表挨拶  
徳島大学長 香川 征

13時40分～ 特別講演  
文部科学省文部科学審議官 板東 久美子 氏

14時20分～ 事業説明 「四国産学官連携イノベーション共同推進機構について」  
四国共同副機構長（徳島大学教授） 織田 聡

基調講演

14時55分～ 「統合失調症治療薬アリピプラゾールへの道」  
大塚製薬株式会社薬事部 檜山 隆司 氏

16時05分～ 「イノベーションを創出する産学連携」  
株式会社東京大学 TLO 代表取締役社長 山本 貴史 氏

17時05分～ 閉会の挨拶  
四国共同機構長（徳島大学理事） 野地 澄晴

17時30分～ 情報交換会  
19時



## (3) 四国産学官連携イノベーション共同推進機構新技術説明会

2月25日(火)、JST東京本部別館ホール(東京・市ヶ谷)において、「四国産学官連携イノベーション共同推進機構 新技術説明会」が開催された。来場者数は約108名であった。高知大学からは、米村俊昭教授と片岡正典特任講師が発表し、成功裏に終わることができた。各発表について約30～50人と多くの視聴者があり、全ての説明者に対して、名刺交換および個別面談の申込みがあった。共同研究や技術移転に繋がる可能性がある企業からのアプローチも複数社あり、今後の進展が期待される。

日時：平成26年2月25日(火曜日)10時30分から16時

場所：JST東京本部別館ホール(東京・市ヶ谷)

## プログラム：

- 
- 10時30分～ 主催者挨拶  
四国産学官連携イノベーション共同推進機構 副機構長 織田 聡  
独立行政法人科学技術振興機構 理事 小原 満穂
- 
- 10時40分～ JST 事業紹介  
科学技術振興機構
- 
- 10時50分～ 硬脆材料への高品位小径貫通穴加工を目的とした電着工具の開発  
Development of electroplated diamond tool for fracture size minimization in micro through-hole drilling of hard and brittle material  
徳島大学 大学院ソシオテクノサイエンス研究部 先進物質材料部門 講師 溝渕 啓
- 
- 11時20分～ 圧縮だけでなく、曲げの衝撃吸収材として使用できる均質かつ高信頼性の超軽量ポーラス金属  
Ball-chain Type metallic hollow sphere structure for ultralight good energy absorber  
香川大学 工学部 知能機械システム工学科 准教授 吉村 英徳
- 
- 11時50分～ 積層ナノ薄膜を用いたリアルタイム発光性酸素センサ  
Preparation of Hybrid LB Films of Clay and Iridium(III) Complexes for Highly Sensitive Sensing of Oxygen Molecules  
愛媛大学 大学院理工学研究科 環境機能科学専攻 教授 佐藤 久子
- 
- 13時20分～ 付加的な要因で発光性を発現する無機-有機ハイブリッド材料  
Inorganic-organic hybrid materials with solid fluorescence by additional factor  
高知大学 教育研究部 総合科学系 複合領域科学部門 教授 米村 俊昭
- 
- 13時50分～ 事後、簡便に分解できる界面活性剤の開発と乳化重合  
Development of easily degradable surfactants and emulsion polymerization  
愛媛大学 大学院理工学研究科 物質生命工学専攻 教授 渡邊 裕
- 
- 14時30分～ 原発性アルドステロン症の新規血液マーカー  
A novel blood biomarker for primary aldosteronism  
香川大学 医学部 薬理学 准教授 小堀 浩幸
- 
- 15時～ 新規モノマーによるRNA液相合成法  
Liquid-phase synthesis of oligoribonucleotides using novel ribonucleoside monomers  
高知大学 教育研究部 総合科学系 複合領域科学部門 特任講師 片岡 正典
-

15時30分～ イグサ抽出液のオーラルケア製品への応用開発  
 Clinical application of Igusa extract for oral health products  
 徳島大学 大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 口腔微生物学分野 助教 村上 圭史

16時～ 閉会挨拶  
 テクノネットワーク四国 事業本部長 酒井 一夫



(4) 共通基盤情報システム (平成 26 年 3 月導入完了)

四国共同機構が運営する共通基盤情報システムは、それを媒体として、企業、大学研究者、四国共同機構・各大学の産学連携部門のコーディネーター等の3者が連携することにより大学と企業等のマッチングを実現し、四国5大学の産学連携機能を促進することを目的に導入された。



# 関係資料

---

## Information

地域連携推進センター 組織図 (平成 26 年度)

地域連携推進センター 組織体制 (平成 26 年度)

高知大学地域連携推進センター規則 (平成 26 年度)

高知大学国際・地域連携センター職員等 (平成 25 年度)

高知大学地域連携推進センター運営戦略室規則 (平成 26 年度)

国際・地域連携センター運営戦略室会議名簿 (平成 25 年度)

地域連携推進センター運営戦略室会議名簿 (平成 26 年度)

高知大学地域連携推進センター自治体連携室利用内規 (平成 26 年度)

科学・技術相談申込書

交通アクセス

## Information 高知大学地域連携推進センター

高知大学は、人文、教育、理、医、農の5学部と総合人間自然科学研究科、附属病院、全国共同利用・共同研究拠点、学内共同教育研究施設から構成され、教職員約1,700名、学生5,600名を抱える総合大学です。

本学は、南国土佐の自然と風土に学び、未来を展望した智の創造と学術の継承・発展を通じて、人類の継続的発展と地域社会へ貢献することを使命としています。

本センターは「地域を敬い、人を愛するー敬地愛人ー」の理念を掲げつつ、「地域発展のために」というミッションを実現することで、個性豊かな地域の大学としてその存在意義をアピールしてゆきたいと考えています。

### 敬地愛人

「地域発展のために」

本センターは、本学の有する人的資源、知的財産、施設を活用し、地域社会との緊密な連携を推進することにより、地域における人材の育成、科学の発展、技術開発および産業の活性化に貢献するとともに、地域振興と維持・発展に資することを目的とします。また、地域ニーズと大学シーズを効果的にマッチングさせる高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）化事業を推進し、地域の大学として、高知県と高知大学が官学一体となり地域の課題解決を進め、地域の課題を組織的かつ機動的に解決するための域学連携教育研究体制の強化に貢献することを目的とします。



## One Stop Window

(ワンストップウィンドウ)

本学へのお問い合わせや要望に対して、サービス業務を一体化し、ひとつの窓口でお受けし、最も適した担当者へ速やかに伝達致します。

例えば、こんな相談を……

#### 企業からは

- 技術的な面での専門家のアドバイスがほしい
- 大学と共同研究をしたい

#### 地方自治体からは

- 市町村のまちづくり計画に有識者として参加願いたい
- 大学と連携して地域活性化の取組みをしたい
- 大学生と一緒にプロジェクトを行いたい

#### 教育機関からは

- 大学と共同で教育プログラムを開発したい
- 教育の研修や教育上の諸課題を相談したい

どんなご相談でも  
お気軽にどうぞ



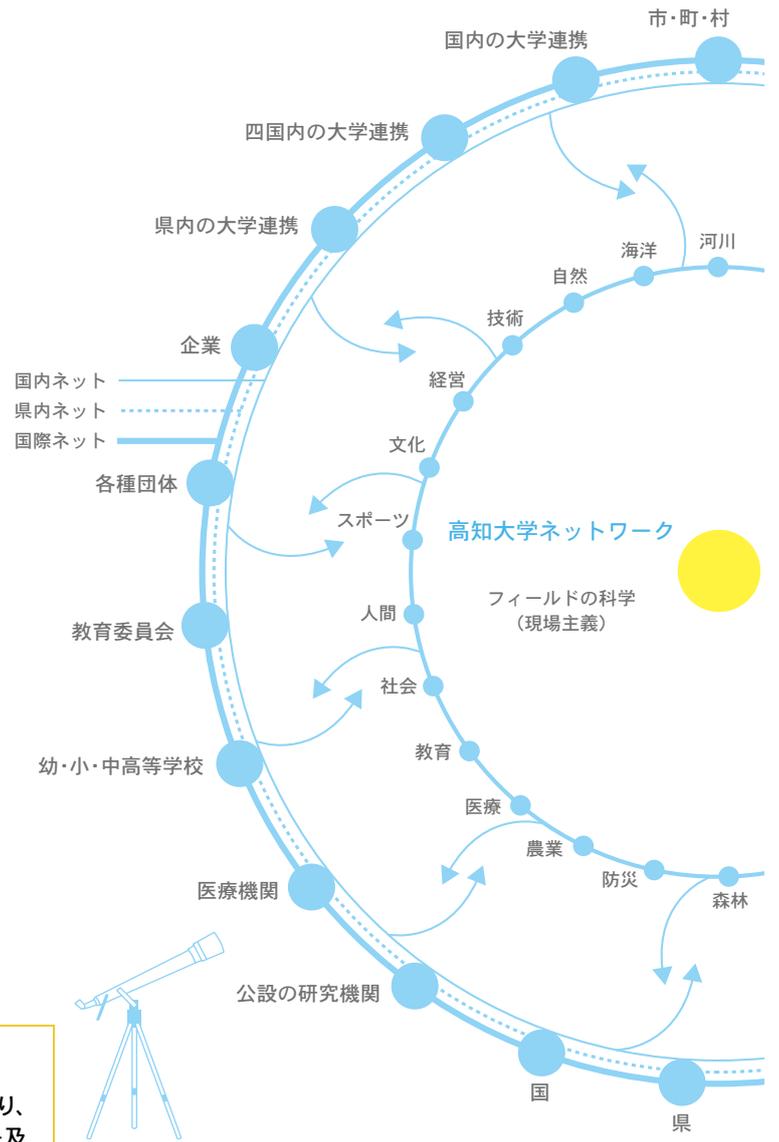
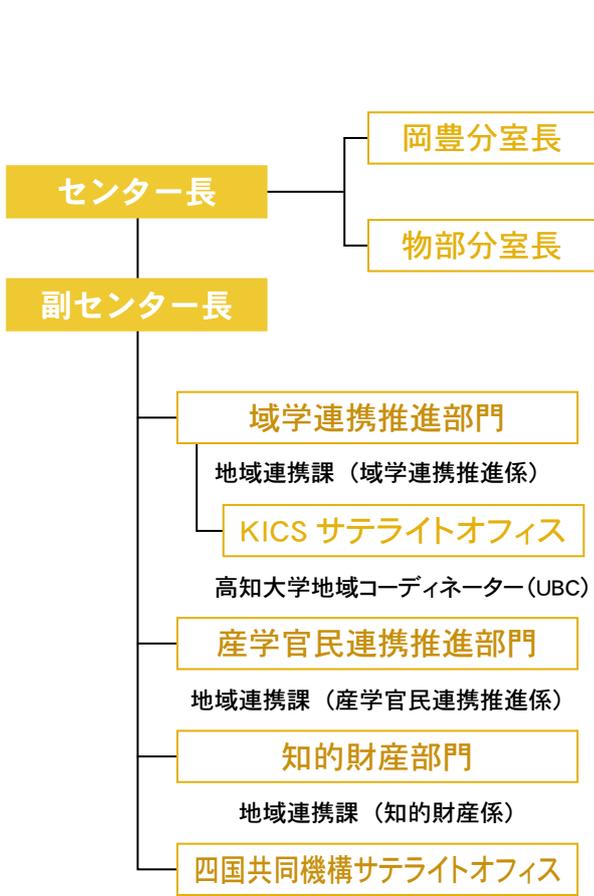
### 高知大学地域連携推進センター

〒780-8073 高知県高知市朝倉本町2丁目17-47

TEL : 088-844-8555 FAX : 088-844-8556

<http://www.ckkc.kochi-u.ac.jp/>

# 地域連携推進センター 組織図



**【域学連携推進部門】**  
 高知大学が有する人材・知的資源を駆使することにより、地域との連携を推進し、現場のニーズに応じた課題解決及び地域における人材の育成に貢献するとともに、生涯学習の普及に努め、また、地域を志向した教育の推進を図ることで、地域の振興と維持・発展に寄与する。

- 地域との連携に係る企画立案及び推進
- 地域のニーズに応じた課題解決及び地域の人材育成
- 公開講座開設及び大学教育開放事業
- 高知大学インサイド・コミュニティ・システム(KICS)運営
- 地域と協働した教育プログラムの開発と実施 等

**【知的財産部門】**  
 高知大学の創出した知的財産を自らの責任のもとに、保護、管理、活用し、本学の教職員等、学生、地域社会が受ける利益の最大化を目指す。

- 知的財産に係る情報収集及び広報
- 特許等の出願、権利化、維持
- 知的財産の活用 等

**【産学官民連携推進部門】**  
 企業、研究機関等との共同研究、受託研究を推進するとともに、教育及び研究の成果を通じて、地域イノベーションの創出、技術開発及び産業の活性化に貢献する。

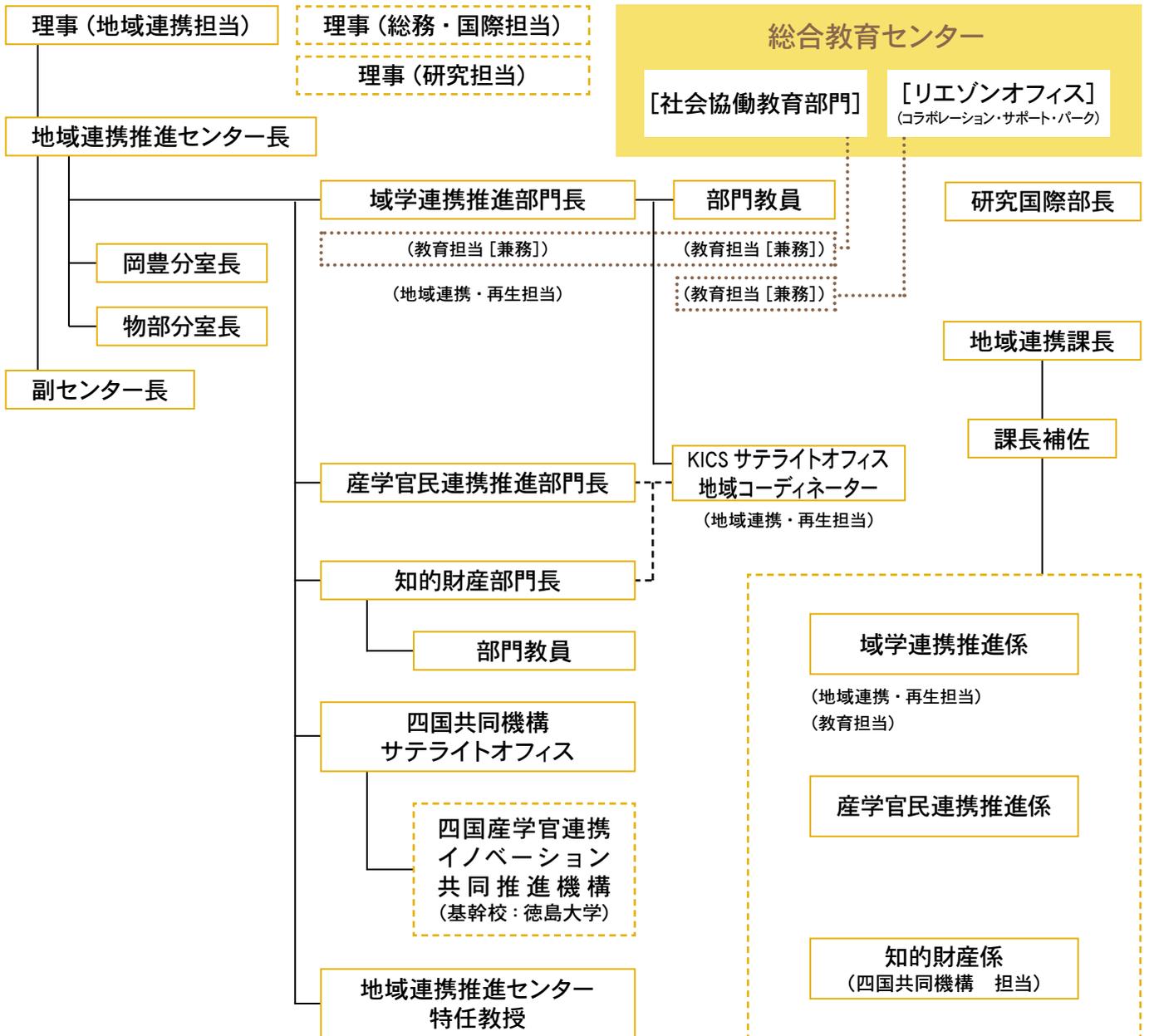
- 地域イノベーションの創出に係る企画立案及び推進
- 学内及び他大学との共同研究及び連携
- 企業、研究機関等との共同研究及び受託研究の受入れ
- 企業、研究機関等からの科学・技術相談 等

**【四国共同機構サテライトオフィス】**  
 四国共同機構は、徳島大学(基幹大学)、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学及び高知大学の産学官連携部門共通業務の統合・一元化を図ることにより、知の集積、人材の育成、国内外の大学と社会の接点及びイノベーション創出拠点を構築する。

- 産学官連携推進事業
- 産学官連携イノベーション関係情報事業 等

地域連携推進センター 組織体制

【平成 26 年 4 月 1 日】



土佐 FBC II 企画運営室

- 特任教授 (非常勤)
- 特任准教授
- 特任専門員 (非常勤)
- 事務補佐員
- 特任教授 (非常勤)
- 特任講師
- 教務補佐員

お問合せ先

研究国際部 地域連携課

〒 780-8073 高知県高知市朝倉本町 2 丁目 17-47 地域連携推進センター

TEL : 088-844-8555

FAX : 088-844-8556

URL : <http://www.ckkc.kochi-u.ac.jp/>

## 高知大学地域連携推進センター規則

平成 26 年 3 月 26 日

規則 第 93 号

## (趣旨)

第 1 条 この規則は、国立大学法人高知大学組織規則第 27 条第 2 項の規定に基づき、高知大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）における組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

## (目的)

第 2 条 センターは、高知大学における教育研究の進展に寄与し、高知大学の有する人的資源、知的資産、施設を活用して、地域との緊密な連携を推進することにより、地域における人材の育成、地域イノベーションの創出、科学の発展、技術開発及び産業の活性化に貢献するとともに、地域の振興と維持・発展に資することを目的とする。また、地域ニーズと大学シーズを効果的にマッチングさせる高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業を推進し、地域の大学として、高知県と高知大学が官学一体となり地域の課題解決を進め、地域の課題を組織的かつ機動的に解決するための域学連携教育研究体制の強化に貢献することを目的とする。

## (分室)

第 3 条 岡豊キャンパス及び物部キャンパスに、それぞれ岡豊分室及び物部分室を置く。

## (組織)

第 4 条 センターに、運営戦略室、域学連携推進部門、産学官民連携推進部門及び知的財産部門を置く。

2 運営戦略室に関し必要な事項は、別に定める。

3 センターに、国立大学改革強化推進補助金事業「四国 5 大学連携による知のプラットフォーム形成事業」の共同実施に関する協定書第 2 条に規定する「四国産学官連携イノベーション共同推進機構（以下「四国共同機構」という。）の構築」事業に係るサテライトオフィス（以下「四国共同機構サテライトオフィス」という。）を置く。

4 域学連携推進部門に、高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業を実施するための高知市地域、嶺北地域、物部川地域、安芸地域、仁淀川地域、高幡地域及び幡多地域サテライトオフィス（以下「KICS サテライトオフィス」という。）を置く。

5 域学連携推進部門は、専任担当教員又は兼務教員で組織する。

6 産学官民連携推進部門は、専任担当教員又は兼務教員で組織する。

7 知的財産部門は、専任担当教員又は兼務教員で組織する。

8 四国共同機構サテライトオフィスは、四国共同機構アソシエイトで組織する。

9 KICS サテライトオフィスは、高知大学地域連携推進センター地域コーディネーター（以下「UBC」という。）で組織する。

## (業務)

第 5 条 センターは、役員会の意を受け、次の各号に掲げる業務を行う。

## (1) 域学連携推進部門

ア 地域との連携に係る企画立案及び推進に関すること。

イ 地域のニーズに応じた地域貢献に関すること。

ウ 地域の人材育成に関すること。

エ 高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業における地域連携・再生に関すること。

オ 高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業における地域を志向した教育の推進に関すること。

カ 高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業における地域を志向した研究の推進に関すること。

キ 地域に係る学術研究調査の実施に関すること。

ク 地域の諸活動に対する専門的支援に関すること。

ケ 地域における社会人教育・生涯教育に係る調査・研究に関すること。

- コ 公開講座開設及び大学教育開放事業の実施に関する事。
- サ 生涯学習に係る資料の収集、情報の提供及び相談に関する事。
- シ その他域学連携推進に関する事。
- (2) 産学官民連携推進部門
  - ア 地域イノベーションの創出に係る企画立案及び推進に関する事。
  - イ 企業、研究機関等との共同研究及び受託研究の受入れに関する事。
  - ウ 企業、研究機関に対する学術情報の提供に関する事。
  - エ 学内及び他大学との共同研究及び連携に関する事。
  - オ 企業、研究機関等からの科学・技術相談に関する事。
  - カ 企業、研究機関等の技術者に対する技術教育及び研修に関する事。
  - キ その他産学官民連携推進に関する事。
- (3) 知的財産部門
  - ア 知的財産に係る施策の策定に関する事。
  - イ 知的財産に係る教育活動及び啓発活動の企画立案・実施に関する事。
  - ウ 知的財産に係る情報収集及び広報に関する事。
  - エ 知的財産の相談に関する事。
  - オ 特許等の調査に関する事。
  - カ 特許等の出願、権利化、維持に関する事。
  - キ 知的財産の各種契約に関する事。
  - ク 知的財産の法務・紛争（訴訟を含む。）に関する事。
  - ケ 知的財産の活用に関する事。
  - コ 研究成果の技術移転に関する事。
  - サ その他知的財産に関する事。
- (4) 四国共同機構サテライトオフィス
  - ア 四国共同機構に関する事。
- (5) KICS サテライトオフィス
  - ア 高知大学インサイド・コミュニティ・システム化事業における地域課題の解決に関する事。

(職員)

第6条センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 分室長
- (3) 専任担当教員
- (4) 四国共同機構アソシエイト
- (5) UBC
- (6) 兼務教員
- (7) その他必要な職員

2 センターの教員人事については、センター長は、欠員補充の可否を学長に協議した上で、高知大学センター連絡調整会議の議を経て、発議を行うものとする。

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、学長が指名する。
- 3 センター長の任期は、当分の間、学長が定める。

## (分室長)

第8条 分室長は、センター長の下に各キャンパスの業務を掌理する。

2 分室長は、センター長の推薦により、学長が任命する。

## (副センター長)

第9条 センターには、必要に応じて副センター長を置くことができる。

2 副センター長は、センター長が指名する。

## (部門長)

第10条 センターの各部門に、部門長を置く。

2 部門長は、センター長の職務を助け、部門の業務を統括する。

3 部門長は、部門所属の教員からセンター長が指名する。

## (専任担当教員及び兼務教員)

第11条 専任担当教員及び兼務教員は、部門長の職務を助け、センターの業務を処理する。

## (四国共同機構アソシエイト)

第12条 四国共同機構アソシエイトは、センター長の業務を助け、四国共同機構サテライトオフィスの業務を処理する。

2 四国共同機構アソシエイトは、本学職員から学長が指名する。

## (UBC)

第13条 UBC は、KICS サテライトオフィスの業務を処理する。

## (事務)

第14条 センターの事務は、研究国際部地域連携課において処理する。

## (雑則)

第15条 この規則に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

## 附 則

この規則は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

## 高知大学国際・地域連携センター職員等（平成25年度）

## 国際・地域連携センター

- 副学長           センター長 受田 浩之 兼務  
                  副センター長 石塚 悟史
- 岡豊分室長           山本 哲也 兼務
- 物部分室長           藤原 拓 兼務
- 特任教授           野地 照樹
- 地域連携課長       須藤 晴夫
- 同課長補佐       藤原 眞一
- 国際交流課長       永野 秀美
- 同課長補佐       北岡由三子

## 地域連携・再生部門

- 部門長           特任講師 吉用 武史
- 特任講師       赤池 慎吾 (地域コーディネーター)
- 特任助教       大崎 優 (地域コーディネーター)
- 地域連携・再生係  
                  係長 立花 裕  
                  事務職員 佐藤 宏之
- 専門職員 (地域連携担当) 小島 眞一

## 産学官連携部門

- 部門長           准教授 石塚 悟史
- 産学官連携係 (総務担当)  
                  係長 伊藤 誠彦  
                  主任 知名 桂  
                  事務補佐員 市川 幸
- 土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業  
                  特任教授 沢村 正義  
                  特任教授 樋口 慶郎  
                  特任准教授 吉金 優  
                  特任講師 中島 悦子  
                  特任専門員 浜口 忠信  
                  教務補佐員 高田 順子  
                  事務補佐員 長吉 智子

## 知的財産部門 (四国共同機構担当)

- 部門長           副学長 受田 浩之 兼務  
                  特任助教 下方 晃博 (四国共同機構アソシエイト)
- 知的財産係       係長 岡本 優  
                  事務職員 谷内 紗代

## 国際連携部門

- 部門長           教授 菊地るみ子 兼務
- 部門長           教授 谷口 雅基 兼務  
                  准教授 神崎道太郎  
                  准教授 林 翠芳  
                  准教授 大塚 薫 (安徽大学日本語センター)
- 国際企画係       助教 GARCIA DEL SAZ EVA  
                  特任教授 新納 宏  
                  特任准教授 唐 千友  
                  係長 矢田 裕美  
                  係員 秋田 雅代
- 国際連携係       係員 山本 禎司  
                  係員 山脇 由子  
                  事務補佐員 岩郷 晴美

## 高知大学地域連携推進センター職員等（平成26年度）

## 地域連携推進センター

- 副学長           センター長 受田 浩之 兼務  
                  副センター長 石塚 悟史
- 岡豊分室長           山本 哲也 兼務
- 物部分室長           藤原 拓 兼務
- 特任教授           野地 照樹
- 地域連携課長       須藤 晴夫
- 同課長補佐       藤原 眞一

## 域学連携推進部門

- 部門長（教育担当）  
                  教 授 上田 健作 兼務  
部門教員 准 教 授 石筒 覚 兼務  
部門教員 准 教 授 大槻 知史 兼務  
部門教員 特 任 講 師 今城 逸雄 兼務
- 部門長（地域連携・再生担当）  
                  特 任 講 師 吉用 武史  
地域コーディネーター  
安芸地域担当 赤池 慎吾  
高知市地域担当 大崎 優  
幡多地域担当 岡村 健志  
嶺北地域担当 梶 英樹
- 域学連携推進係  
                  係 長 小島 眞一  
主 任 中西 英孝  
事 務 職 員 佐藤 宏之  
特任専門職員 清水伺名子
- 土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業  
                  特 任 教 授 沢村 正義  
                  特 任 教 授 樋口 慶郎  
                  特任准教授 吉金 優  
                  特 任 講 師 中島 悦子  
                  特任専門員 高橋 洸貴  
                  教務補佐員 高田 順子  
                  事務補佐員 長吉 智子

## 産学官民連携推進部門

- 部門長           准 教 授 石塚 悟史
- 産学官民連携推進係（総務担当）  
                  係 長 小林 克巳  
主 任 知名 桂  
事務補佐員 市川 幸

## 知的財産部門（四国共同機構担当）

- 部門長           副 学 長 受田 浩之 兼務  
                  特 任 助 教 下方 晃博（四国共同機構アソシエイト）
- 知的財産係  
                  係 長 洞口 由美  
事 務 職 員 谷内 紗代  
事務補佐員 白米 英里

## 高知大学地域連携推進センター運営戦略室規則

平成 26 年 3 月 26 日

規則 第 95 号

(趣旨)

第 1 条 この規則は、高知大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）規則第 4 条第 2 項の規定に基づき、高知大学地域連携推進センター運営戦略室（以下「運営戦略室」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(組織)

第 2 条 運営戦略室は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) 岡豊分室長及び物部分室長
- (3) 域学連携推進部門長、産学官民連携推進部門長及び知的財産部門長
- (4) 研究国際部長
- (5) その他センター長が必要と認めた者

(業務)

第 3 条 運営戦略室は、次の業務を行う。

- (1) 企画・戦略及び運営・評価に関する事項
- (2) 中期目標・中期計画及び年度計画に関する事項
- (3) 各部門の事業計画及び実施に関する事項
- (4) 財務に関する事項
- (5) 人事に関する事項
- (6) 規則の制定・改廃に関する事項
- (7) その他センターの業務に関する必要な事項

(運営戦略室会議)

第 4 条 運営戦略室に、前条の業務を行うため、運営戦略室会議を置く。

2 運営戦略室会議に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

(専門委員会)

第 5 条 センターの業務に係る必要な事項を審議するため、必要に応じて専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

(事務)

第 6 条 運営戦略室の事務は、研究国際部地域連携課において処理する。

(雑則)

第 7 条 この規則に定めるもののほか、運営戦略室の運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

この規則は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

## 国際・地域連携センター運営戦略室会議名簿

平成 25 年度

組	織	部 局 ・ 職 名	氏 名	備 考
センター長		本センター長	受田 浩之	844-8554
岡豊分室長		医学部教授	山本 哲也	880-2421
物部分室長		農学部教授	藤原 拓	864-5163
地域連携・再生部門長		本センター特任講師	吉用 武史	844-8732
産学官連携部門長		本センター准教授	石塚 悟史	844-8557
知的財産部門長		本センター長(兼務)	受田 浩之	844-8554
国際連携部門長		教育学部教授	菊地 るみ子	844-8395
国際連携部門長		教育学部教授	谷口 雅基	844-8378
研究国際部長		研究国際部長	石井 康雄	844-8768
センター長が 必要と認めた者		理事(地域(社会)連携担当)	森下 勝彦	822-9311

※ 委員数 9名、成立は過半数 5名

## 地域連携推進センター運営戦略室会議名簿

平成 26 年 4 月 1 日現在

組	織	部 局 ・ 職 名	氏 名	備 考
センター長		本センター長	受田 浩之	844-8554
岡豊分室長		医学部教授	山本 哲也	880-2421
物部分室長		農学部教授	藤原 拓	864-5163
域学連携推進部門長 (地域連携・再生担当)		本センター特任講師	吉用 武史	844-8732
域学連携推進部門長 (教育担当)		教育研究部 総合科学系 地域協働教育学部門／教授	上田 健作	844-8224
産学官民連携推進部門長		本センター准教授	石塚 悟史	844-8557
知的財産部門長		本センター長(兼務)	受田 浩之	844-8554
研究国際部長		研究国際部長	石井 康雄	844-8768
センター長が 必要と認めた者		理事(地域連携担当)	森下 勝彦	822-9311

※ 委員数 8名、成立は過半数 5名

## 高知大学地域連携推進センター自治体連携室利用内規

平成 26 年 4 月 1 日

## (設置)

第 1 条 地域との連携を推進するため、高知大学地域連携推進センター規則第 15 条の規定に基づき、高知大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）に自治体連携室を置く。

## (利用の原則)

第 2 条 自治体連携室の利用は、自治体との情報共有・情報交換等の交流や協議・打合せ等を行う場合、連携協定を締結する自治体が一時的な活動の拠点とする場合及び地域との連携に資するためセンターが必要と認める場合とする。

## (利用の手続)

第 3 条 連携協定を締結する自治体が一時的な活動の拠点として自治体連携室を利用する際には、別に定める書面をもって、使用の手続きを行うものとする。

2 前項の手続きを経て使用する場合は、使用料は徴収しないものとする。

## (利用時間)

第 4 条 自治体連携室の利用時間は、平日 8 時 30 分～17 時 15 分とする。ただし、事前にセンター長が認めたときは、22 時まで延長することができる。

## (管理)

第 5 条 自治体連携室の管理は、地域連携課地域連携・再生係において行う。

## (雑則)

第 6 条 この要領に定めるもののほか、自治体連携室に関し必要な事項はセンターが別に定める。

## 附 則

この規則は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

平成 年 月 日

## 科学・技術相談申込書

(講師紹介・委員会や研修会等にも対応します!)

高知大学地域連携推進センター 御中

(Tel : 088-844-8555 Fax : 088-844-8556 E-mail : kt04@kochi-u.ac.jp)

〒780-8073 高知市朝倉本町2-17-47

\*受付番号: CRIC-

高知大学HP: <http://www.kochi-u.ac.jp/JA/>

\*事務受付日: 平成 年 月 日

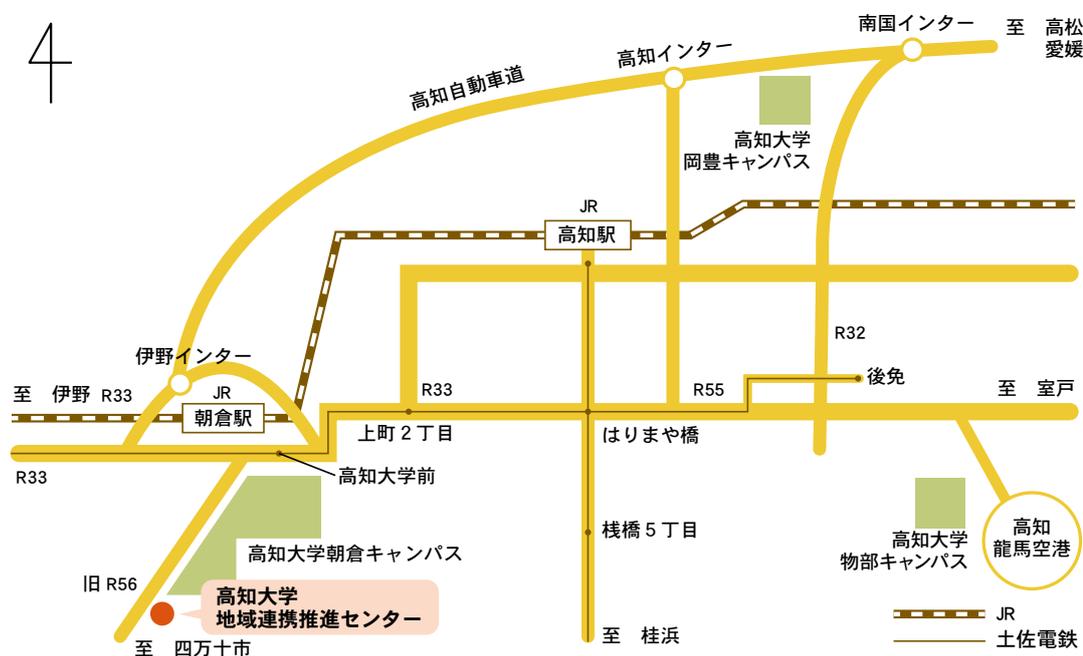
\*事務受付担当:

	紹介機関・者	Tel ( )		
申 込 者	機関名			
	所属・役職		氏名	
	連絡先	〒		
	T e l		F a x	
	E-mail			
相 談 内 容	<p>・相談事項は、本記入用紙1枚につき1件でお願いします。</p> <p>1. 題 目</p>  <p>2. 相談内容 (箇条書きでキーワードがわかるように記入願います。)</p>			
* 相談担当者 (大学記入)	所属・役職		氏名	
	T e l		F a x	
	E-mail			

・本用紙に相談内容をご記入の上、E-mail、Fax又は郵送でお送り下さい。(コピーしてご利用下さい)

## 交通アクセス

### センターへのご案内図



### 高知大学（朝倉キャンパス）周辺図



#### 車での所要時間

- 高知空港から ..... 約45分
- 伊野インターチェンジから ... 約5分
- 高知駅から ..... 約20分



---

## 高知大学 地域連携推進センター 年報 2014

発行日：2014年〇月

発行：国立大学法人高知大学 地域連携推進センター  
〒780-8073 高知県高知市朝倉本町2丁目17-47  
TEL：088-844-8555 FAX：088-844-8556  
<http://www.ckkc.kochi-u.ac.jp/>

印刷：弘文印刷株式会社

---



**CRC**

Center for Regional Collaboration

*Kochi University October 2014*